立教大学図書館蔵『平家物語』翻刻（四）巻第十～巻第十二

朴　知恵・鈴木　彰

【凡例】

一、立教大学図書館蔵『平家物語』全十二巻（請求記号 913.434/H51）を底本として翻刻したものである。

一、異体字は通行字体に、旧字体は新字体に直した。

一、丁の表裏の変わり目に（｜）を付し、（1オ）（1ウ）のように示した。なお、遊紙は丁数に入れていない。

一、内題・巻頭の目録を除いて本文は追い込み形とし、改行箇所は「／」で示した。ただし、和歌・漢詩・文書類は行頭二字下げとし、末尾で改行する形式とした。

一、見せ消ちされた文字の左側に傍線を付した。

一、本文の右傍に記された異本注記や補記はそのまま記した。

一、本文の文字間に符号「○」を付して補入位置を示した傍記は、符号の入れられた箇所の右傍に「＊」を付してから傍記された文字を記した。本文中に小字で書き加えられた補記についても同様に扱った。

一、誤字・誤脱があると考えられる箇所もそのままに翻刻し、当該箇所には「（ママ）」と傍記した。

【翻刻】

平家物語巻第十目録

平家一そくのくひおほちをわたさるゝ事
これもりやしまよりしよしやうの事
ほん三位中しやう女はうにたいめんの事
おなしき女はうしゆつけの事
ゐんせんの事
ほん三位中将上人にたいめんならひに関東下向の事
よこふえの事
しうろんの事
かうやこかうの事
こまつ三位中将出家の事

｜（1オ）

小松三位の中くまのさんけいならひに海に入るゝ事
しゆとくゐんを神とあかめ奉らるゝ事
いけの大納言かまくらけかうの事
こまつ三位の中将の北方しゆつけの事
ふちとかつせんの事
御けいの事
（以下、三行分余白）　」（1ウ）

平家物語巻第十

平家一そくのくひおほちをわたさるゝ事

寿永三年二月七日つのくに一の谷にてうたれさせ給し平家の／くひともおなしき十日都へ入と聞えしかはこきやうに残りとゝ／まり給へる人〻は身の上にいかなる事をかきかんすらんとや／すき心もなかりけりなかにも小松三位中将これもりのきやう／の北のかたは大覚寺におはしましけるか西国へうつてのくたる／と聞ゆるたひには中将の事をつゐにいかにかきゝなさんす／らんとしつ心もし給さりけるに一の谷よりへいけの人〻のくひなら／ひに三位中将といふ人いけとりにせられて都へいると聞えしかは」（2オ）いかにも此人はなれ給はしとそなけかれける人参りて三位の中将殿／と申はしけひらの御事にて候と申せは扨はくひとも／なかにや有らんとてなき給ふおなしき十一日たいふ判官中／原のよりのりへいけのくひともうけとりておほちをわたし／こくもんにかけらるへきにてありしをほうわう猶も此事／いかゝあるへきとおほしめしわつらひ給て大政大臣已下五人／のくきやうにおほせあはせられけるり中にも堀河の大納言／忠親のきやう申されけるはこのともからはせんてうの御とき／せきりのしんとして久しくてうかにつかうまつるなかんつ／くにけいしやうのくひおほちをわたされたる事れいなし」（2ウ）のりよりよしつねか申ちやうあなかちに御きよよう有へ／からすと申させ給ひけれは法皇もこのきもともとてわた／さるましきにて有けるをのりよりよしつね申されけるは命をか／ろくしきをおもうする事はちよくせんのおもむきをかたし／けなく存るかゆへかつはおやのくわいけいのはちをきよめん／とおもふためなり申むねを御せういんなからんにをひて／はしこんいこ何のいさみありてうてきをもたいらけ候へ／きときとをり申されけれはこのきもたしかたしとてつ／ゐにわたさるへきにそさたまりける同き十二日に平氏の／くひおほちをわたされけりきやう中の上下みる人きく人」（3オ）袖をそぬらしけるいはんやそのえんにふれをんをかうふりし人／この心のうちいかはかりの事をか思はれけん小松三位中しやう／のさふらひにさいとう五さいとう六とてみやこにとゝめをか／れたりけるかさまをやつして見物の人のなかにましはりて／わかしうの御くひやあると見奉りけるにその御くひはなか／りけれともみしり参らせたる人〻の御くひのおほかりけれは／あまりにめもあてられすおもひてしきりに涙のすゝみけれ／は人にあやしめられしといそき大覚寺へかへりたり北の方さ／ていかにやとのたまへはこまつとのゝ君たちにはひちうのか／うのとのゝ御くひはかりみえさせたまひ候

つる其外しか〳〵」（3ウ）そちやうその御くひかのくひなとそ申けるさいとう五か申け／るはけんふつの人のなかに申候つるはこまつとの、君た／ちははりまとたんはのさかいに候なる三くさの山をかためさ／せおはしまし候けるか源氏にやふられさせ給てはりまのた／かさこより船にめしてさぬきのやしまへわたらせおはしまし／て候ぬひちうのかみとのはかりそ一の谷へ帰り参りたまひて／うたれさせ給ひて候と申候つる程に御（さ）て三位中将とのゝ／御事はいかにと、ひて候へはそれはいたはりとてこんとのいく／さにはあはせ給はすさぬきのやしまにわたらせ給ふとこ／そ申せはきたのかたそれもあさゆふわれらか事を思ふ」（4オ）にこそやまひともなりぬ（ママ）らめとの給ふわかきみ姫君さて／その御やまひをは何事そとかへしてはとはさりけるかと／てそなかれける／

これもり八島よりしよしやうの事

三位中将これもりはさぬきのやしまにおはしけるかある／夜のあかつきかたにねさめしてよ三ひやうゑしけかけわらは／いしとうまろあたりちかふ（カ）御とのゐ申て候けるにの給ひ／けるはあはれいま都にもねさめやしたまふらんおさなき者／共はおもひわするとも人はかた時も忘れし物をかくいつとな／くつれ〳〵なれはむかへもとりてなくさまはやとは思へ共ゑ」（4ウ）ちせんの三位のうへの事をきくにかしこくそこれらをとゝ／めをきたりけるひきくしたらましかはいかはかり心くるし／からましとその給ひける有ときよ三ひやうゑを御使にて／みやこへ御文あり北のかたへの御ふみには見そめみえそめ奉／りしのちはかた時もはなれ参らせしとそ申しかとも心に／まかせぬ道なれはむかへもとり奉らぬ也今はこんしやうにて／あひみん事もかたけれはのちの世にはかならすひとつはち／すのえんとねかひ給ふへしとかき給ひおくには一しゆの歌／をそ書れたる／

いつくともしらぬあふせのもしほくさかきをくあとを」（5オ）

かたみとはみよ

わかきみ姫君への御文（ママ）つれ〳〵をはなにとして／なくさませ給ふいそきむかへとらんするそ六代殿へやしや御／前へとこまやかにこそかゝれたれしゆせきはいつまてもく／ちせぬ物かなれはたとへこれもり世になきものとなりたりとも／後の世まてのかたみともみよかしとてかやうに書そをくられ／けるよ三ひやうゑ都にのほり大覚寺へ参りたり人さこの文／をひらきてさしつとひてそなかれけるきたの方より御返事／なりわかきみ姫きみさてやこの御返事をはなにと申へき／との給へはたゝわかなに共おほされんやうにかき給はめと／あれはなとやむかへもとらせ給はぬそよに〳〵こひしうこそ思ひ」（5ウ）まいらせ候へなとはかなけにそかゝれたるよ三ひやうゑ御返事／給てやしまへかへりまいりたり三位中将このふみをひらき／て見たまふに北の方のとかくうらみかきくときかゝれ／たるよりもおさなき人さのいとけなきふてのすさひに恋し／〳〵とかゝれたりけるを見給ふにそいとゝせんかたなくは／思ひぬ（ママ）れともれんほのおもひはなをやますさいしはもとより／心をつなくものなれはゑとをいとふにさはりとなりえんふあ／いしうのきつなつよくしてし

やうとをねかふに物うし今生／にてはかくいつとなくさいしに心をくたくのみならすたう／らいは又しゆらのくるしみにこそしつまんすれしかし是より」（6オ）うらつたひしまつたひにも都にのほりこひしき人さをもみ／もしみえもしてまうねんをはらひ其後やかて出家入道し火／の中みつのそこにも入なんにはとそおもひさため給ひけるお／なしき十四日ほん三位中将しけひらの卿おほちをわたれ（ママ）けり／とひの二郎さねひらもくらんちのひたゝれにひおとしの／よろひきてとうしやしたりとひが家のこらうとう百／きはかり車のせんこにうちかこみて六条をひかしへわたし奉る／京中の上下あないとおしやあの人こそ入道とのにも二位との／にもおほえのきんたちにて一もんの人にももてなされしゆ／つしの所にてもたけの人さにもこゝろをかれ（ママ）給ひしかけふの」（6ウ）御（ママ）たうへ入奉りてとひか家の子らうとうこれをしゆこし奉る／その夜に入てゐんより御つかひあり蔵人のこんのすけさた／なかとそ聞えし定長せきいにけんしやくをたいしたり三位／ちうしやう日比はなにともおもひ給はさりしさたなかいま／はたゝめいとにてみやうくわんにむかへる心ちもこれには／すきしとおそろしけにそ見え給ふさたなかほうけんない／し所をたに返し入参らさせられ候はゝ御命をたすけ参ら／せらるへきにて候このむねを西国へ申くたさせたまふへしと申／けれは三位ちうしやうしけひらおほくの一門のなかにいけ／とりにせられて大ちをわたされはちをさらしぬる上は今」（7オ）は一門のものともにおもてをむかふへし共そむせす一もんも／又しけひらをたすけてみんともよも申候はしたゝしはゝに／て候二位のせんにはかりそいかにもして今一度見はや共／おもひ候らんそれによるへしとはそんし候はねともゐん／せんをくたされ候はゝ申つかはしこそし候はめと申されけ／れはさらはとて院せんをそくたされける御つかひは御／つほのめしつき花かたとそ聞えし三位中将のつかひには平／さゑもんしけとしなり一門のなかへの御文をはゆるされ給へ／共わたくしのふみをゆるされす三位中将しけとしをめして／このふみ三位とのへ奉れとてたひつ北のかたへはわたくしの」（7ウ）文をはゆるされ候はぬあひたことはにて申也ありし六日の／あかつきをかきりにて候けりいまはこんしやうにてあひ奉る／事有へからす来世にてはかならす一仏しやうとのえんとね／かひ給ふへしとその給けるさるほとに花かたしけとしさ／ぬきのやしまへそ下りける／

三位中将女はうにたいめんの事

三位ちうしやうのさふらひにむくむまのせうまさときと申／ものあり八てうの女院にもけんさんして候けるかあるくれ方／に三位の中将のおはします八てうほりかはの御たうへまいり／たりしゆこのふしに申けるはこれは三位中将としころめし」（8オ）つかはれ候しむくむまのせう正時と申ものにて候也こそ／の秋都を御いてのときも御とも仕るへきにて候しかとも／弓のもとすゑをたにしらぬ身にて候うへ八条の女院にもけん／さん仕り候間いとま申てまかりとゝまり候ぬ都にわたら／れ給はん事もけふあすはかりとやらん承り候へは参りて／物かたりをも申入なくさめまいらせ候はやと存候か御

ゆるされ／や候へきと申ければやすき御事なりこしのかたなをた／にもあつけをき三位ちうしやうの御前にこそまいりけれ其／夜はと、まりてむかし今の事ともたかひにかたりあはせてな／きぬわらひぬそしたまひける明けれはまさときいとま申」（８ウ）てまかりいてんとす三位中将うれしうも今夜みえたるもの／かななんちしてつねにいひかよはせしふみのぬしはいつくに／とかきくたうしはゐんの御所にこそ御わたり候なれあは／れさらは文をつかはして返事を見てなりともなくさまはや／と思ふかつたへなんやとの給へはやすき御事候あそはされ候／へと申せは三位やかて御文かきてまさときにたふ給はて／出けるをあれはいつかたへの御ふみにて候やらんあやしくおもひ／まいらせ候と申せはとてとひの二郎にそ見せられけるこれ／は女はうの御かたへの御ふみにて候けりくるしかるましとて／いたしたりまさときしゆくしよにかへりつ、その日一日」（９オ）まちくらし夜に入てゐんの御所にまいりくもの上のし／つまる程をうか、ひてこの女はうのおはしけるつほねのやか／きのへんにた、すみてき、けれはた、いまも三位中将の御／事をの給ひいたしてなかれけれはいとおしやこの人もいま／たおもひ忘れ給はさりけりとおもひてにしのつまとをほと／〳〵とうちた、けは内よりたれそとこたふ三位中将殿の／御つかひにまさときと申せはつまとをあけられたり御ふみを／奉る女はうひらきて見給へは一しゆのうた有／

なみた川うきなをなかす身なりともいまひとたひの逢／よしもかな

女はう御返事あそはしてまさときにたまはり」（９ウ）けり明る日三位のちうしやうに奉る一しゆの歌をそかへされ／たり／

きみゆへにわれもうき（ママ）をなかすともそこのみくつと／ともにきえなん

三位中将つねはこのふみを見給てそ思ひ／をなくさめ給ひけるあるときとひの二郎にの給ひけるは一／日ふみのぬしにけさんして後の世の事をも申をかはやと／おもふはいか、有へきとの給へはさねひらしさい候はしとてゆ／るし奉るちうしやうよろこひたまひて正時にこのよし／をの給ひあはせられはまさときかひ〳〵しくうしくるま／したて、院の御しよに参りこのよしを申せは女はうなの」（１０オ）めならすよろこひたまひていそきいてんとしたまへはかたへの／女房たちそこにはふしとものおほく有て見くるしかんなる／ものをいか、はなと申あはれけ（ママ）に共この女はういまならてい／つの世にかあひみる事も有へきとおもはれけれはしいて／車にのり給ひ八てう掘川へおはしたる人まいりてこのよし／を申せはうちにはふしとものいくらも候てみくるしかる／へきにくるまよりはなおり給ひそとてかとをはやりいれ庭の／ほとりにくるまをたてはるかに夜ふけ人しつまりて後ふし／にいとまをこひくるまの内にてたいめんし給ふこしかた／行すゑの事ともたかひにかたりあはせつ、その夜は車」（１０ウ）にてそあかされけるし（シ）の、めやう〳〵ほのめけはなこりはつ／きすおもへ共あけなは人めしけしとてくるまのながへを

め／くらしてもとの道へそかへられけるいつくを家ちといそく／らん又いつまてとかちきりけんしのふにたへぬ涙の色くるま／のよそまてもれぬへし三位中将こうてうにまさときを御つ／かひにて一しゆのうたをそをくらけ*レる／

あふ事も露のいのちももろともにこよひはかりや／かきりなるらん

女はうすみすりふてをそめ返事かかんとせ／られけるせめてのおもひのあまりにやみつからひすいのかんさ／しをもとゆひきはよりをしきりて御返事にそへられける」（11オ）

あふ事もかきりときけは露のみのきみよりさきにきえ／ぬへきかな

三位中将是をみ給に付ても日比の心さしのわ／りなき程もあらはれてたへぬ思ひのあまりにそこゑ(ママ)にも／いたしてなきぬへくこそ思はれけれ／

おなしき女房しゆつけの事

その後この女はう院の御所をしのひいてとし二十三と申に花／のすかたをひきかへてすみそめの袖にやつれはて東山さう／りん寺のほとりにをこなひすましておはしける此女房と／申は大はらのみんふきやう入道ちかのりのきやうの御むすめなり／さゑもんのすけとのとそ申ける」（11ウ）

ゐんせんの事

さる程に花かたしけとしさぬきの国やしまにけちやくして院／せんならひに御ふみ奉るへいけの人さをの〳〵あつまりて院せん／をそひらかれけるそのことはりに(ママ)いはく／

せんていほつけつのしんしよを(ママ)ひてし(ママ)め給ふ上はしんしほう／けんないしところ三しゆのしんきにをひて(ママ)はきん中に／とゝめらるへきところにとをく千里たきやうにうつしてす／てに両年のくわういんにをよふてうかのてうしはうこく／のもといなりしけひらのきやうさんぬる七日せつしうのせん／ちやうにをひて(ママ)てたちまちにいけとられをはんぬろうてう」（12オ）くもをこふる思ひはるかに千里の南海にうかひくむかんと／もをうしなふうれへさためて九重のくはらくにとうせんもの／かかのかすかの大からんをめつはうのとかよろしくけんけいに／しよせらるへしといへ共三しゆのれいほうを返し入たてまつるへ／くはちうくはをくはんゆうししんそくにかへしつかはさ／るへしていれは院の御きそくによて言上くたんのことし／

寿永三年二月五日　　大せんの大夫成忠奉／

しん上　　平大納言殿へ／

とそかゝれたる三位中将の御文二位とのひらきて見給へは／しけひら一の谷にていかにもまかりなるへう候し身かうき」（12ウ）なをなかして二たひ都へかへりてこそ候へゐんせんをくたされ候／しんしほうけんないし所をかへしいれまいらせさせたまひ候／はゝしけひらか命はたすからんするにて候なるこのむねを／よきやうに御はからひ候へとそかゝれたる二位とのこのふみ／かいまきて一門の

なかへ出給ひこれ御らんせよや三位中将か／かく申くたしてさふらふ何のやうも有ましはやその御た／からかへし入まいらせさせ給ひしけひらのきやうを今度み／せ給へ世にあらんとおもふも子を思ふゆへにてこそ候へとて／なきたまひけるそまことにさこそとおもひてあはれなる人／〳〵此事いかゝあるへきとひやうちやうあり中にもともも」（13オ）りのきやうの申されけるは君の御代をしろしめさるゝも三／しゆの神きのまほり奉り給ゆへ也一家我君をあふき奉りて／かくて候をしけひら一人にかへおほしめさるへしやたとひ返／し入参らせたりとも三位中将をたすけられん事あるへ／からす申（と）されけれは人〻みなとうせられけり二位とのちから／及給はすせひにつきて御うけをは申さるへしとてへい大／なこん時たゝの卿承りてそしんせられける花かた御うけを／給てみやこにのほり院の御しよに参りたり大せんのたいふこの／しやうをうけ取て御前に参りてとくしんすそのしやうに／云

今月十五日のゐんせん同しき二十一日にたうらいひざまづ」（13ウ）ひてもてこれをはいけんす我きみはたかくらのせんくわうの／第一の皇子なりその御ゆつりをうけほうそをふましめ給て／より此かたいまに四か年なり三しゆのしんきなにことによて／きよくたいをはなさるへきをやまさにいまとういほくて／きたちまちにけいしをおかさんとほつする間かつは国母／せんゐんの御なけきをやすめ奉らんかつはへいちせきり（ママ）／のほ（ママ）うをひらかんためしはらく南海のへんいきにみゆき／せしむるところなりそれ君はしんをもくてい（ママ）とすしんはきみ／をもてしんとす心内にうれふるときんとす（ママ）なはちてい外によろ／こはすきみ上にうれふるときんはすなはちしん下にたのし」（14オ）ますこゝをもて平将くんさたもりまさかとをついたうせし／より此かたしそむさうそくしててうかをまほり奉るなかん／つくにこ入道さきの大政（ママ）大臣保元へいち両度の大らんをしつ／めためよしよしとも以下のけきとをほろほしをはんぬかの時／みなもとのよりともかうへをはぬへきよしてうきありとい／へ共きよもりこうことにしみんをたれてしけいを申なた／むる所なりしかるによりともはやく其かうをんをわすれを／のれかせんひをくいすちよかん流人の身なから事をわた／くしのしゆくいによせすてに国家をとうらんする条〻ちう（ママ）／のせめ是をまぬかるへからす当家にをひてはるいせひこうしん」（14ウ）のよいんなりなんそふさうのちうせつをすてしめ給はんやし／からははやくせんきよをさむしうにうつさるゝかしからすはよ／りともちうはつのゐんせんを給はりかのけきるいをついたう／してくはいけいのはちをきよめんとほつするものなりそも／〳〵しけひらのきやうの事さんぬる七日一そくすはいめい／をせつしうのくんちやうにおとしをはんぬなんそかならす／しもかのきやう一人のくわんゆうをよろこふへきをやいせん／しよそうの条〻もしゆるされすは三しゆのれいもつたとひく／わいこくのほうくはかいていのちりたりと云とも二たひけいらく／のちま

たに入奉るへからさるむねさきの内大臣已下おな」（15オ）
しくこん上せしむる所なりこのおもむきをもてもらしひ／ろう
せしめ給ふへしときたゝせいくわうせいきよとんしゆつ(ママ)しん／
て申／

寿永三年二月廿八日大納言時忠請文／

とそよみ上たるほうわうこの上はちからをよはせ給はす三／位中将
をかまくらへくたさるへきにそさたまりける三位中／将は此由を
きゝ給ひてされはこそかなふへしともそむせさり／つる物をなにし
に申くたしけんいかに一門の人さこれほとに／は思はすとしけひら
を云かひなく申あはれつらむとこうく／わいし給へともかひそな
き」（15ウ）

本三位中将上人にたいめんならひに関東下向の事

三位のちうしやうとひの二らうをめして出家をせはやと思ふ／かい(ママ)
かゝ有へきとの給へはかまの御さうし九らう御さうしに／このよし
を申せはゐんへそうもんせられけり法皇よりと／もに見せてはい
かゝ有へきとて御ゆるされもなかりけり三／位中将とひの次郎にの
給ひけるはさらは日比けさんし／たりしひしりに今一度たいめんし
て後世の事をも申／さはやと思ふはいかか有へきとのたまへはひし
りはたれに／御わたり候やらんと申くろたにのほうねん上人とその
給ひ／けるその上人の御事はさねひらもしんし奉り候やすき御」
（16オ）事也とて東山へこのよしを申けれはさる事ありやかて／
けさんせんとて八てうほり河へおはしたり三位中将たいめん／し給
てしけひら一の谷にていかにもまかりなるへくに(ママ)／候しにかゝる身
にまかりなりて大ちをわたされはちをさ／らし候ぬる事おもへはな
か〳〵なけきのなかのよろこひな／りそのゆへはたうしみな人のし
やうしんの如来とあかめ奉／る上人にいきて二たひけさんに入候事
こそ身のさいわい／と存候へさてもこしやうの事をはいかゝ仕り候
へき世に／ありしときはてうにつかへ身をたてせいろにふけりて
たゝゑ／いくはにのみほこりかつてたうらいのせうちむをそむせ
す」（16ウ）ましてうんつき世すゑになり候て後はかしこにあら
そひこゝ／にたゝかひかたきをほろほし身をたすけんとそむせしか
は／あくしんいよ〳〵さへきりてせんしんさらにすゝますつきに南
／都はめつの事みな人しけひらかしわさと申つたへ候な／れは上人
もさためてさそおほしめされ候らん親のめいに／したかふならひし
ゆとのあくきやうをしつめんため(ママ)にまかりむ／かひて候し程にいか
なるけうとのなかよりか火をいたし／て候けんおほくのからんをほ
ろほし奉りし事またくほん／いとはそむさ*せりしかともすゑの露もと
のしつくとなる／ためしせめ一人にきするならひにて候へはなかく
あひ大せう」（17オ）ねつのそこにしつまん事たゝいまなりつら
〳〵一しやう／のていをあんするにあくこうはしゆみよりも猶たか
しせん／こんはりちん(ママ)はかりのたくはへも候はすされはかゝるあく
／人もたすかりぬへきほうや候らんすみやかにしめさせおはし／ま
し候へとの給へは上人も涙にむせひてしはしはものも／の給はすま
ことにしゆつりのようたうむなしくせさせ給はん／事なけきのなか

の御なけきなるへししかりといへとも一ねん／せんしんをおこさせ給はゝむりやうのさいしやうもせうめつ／し一たひほたいしんをゝこさせ給はゝ三世のしよふつもさた／めてすいきし給ふへしをよそしゆつりのようたうまち〳〵也」（17ウ）と申せともまつはうちよくらんのきにをひてはせうみやう／念仏をもてさきとす心さしを九ほんにむけきやうを六／しにつゝめたりされはくちあんとむのものもたもちやすくはか／いちうさいのともからもとなふるにたよりありいはんやねむ／〳〵おこたらすとき〳〵に忘れさせ給はすこのたひくかいの（ママ）／さかいを出まし〳〵てあむやうふたいのしやうとへいらせたま／はん事何のうたかひか候へきと申されけれは三位なのめな／らすよろこひ十念うけ給ふ出家はゆるされ候はねはいたゝ／きはかりにかみそりをあたてゝかいさつけ給ひなんやと申され／けれはしかるへき御事也とていたゝきをすこしそしりてかい（ママ）」（18オ）さつけ奉らる御かいのふせいとおほしくて年来かよひてあそ／はれけるさふらひのもとにあつけをかれたりけるさうし／はこ御すゝりをめしよせて上人に奉らるこのすゝりと申は／鳥羽院の御時そうてうより三めむわたりて候しなかに松陰／と申てめいよのすゝりにて候なりこ入道相国にくたし給て／候しをしけひらにあたへて候なりあひかまへてすゝりをは／人に給はて上人の御めのかゝらん所にをかせ給ひ候へ御らん／せられんたひにはしけひらか事をおほしめしいたしてこせ／とふらひてたまはせ給へと申されけれは上人うけ取ててし／の僧にあつけられけりその夜はとゝまりてしやうとの九」（18ウ）ほんくわんすへきやうあんしんきやうのほうもんよもすから／申されけれは三位中将の御事は申にをよはすとひ／の二郎をはしめとして御前に候けるしゆこのふしもさいわ／いに今夜かゝる御ほうもん承る事よとてみなすいきの／なみたをそなかしける明けれは上人いとまこひてそかへられけ／る三位中将えんまてをくり給ひてあむしんきやうのほうもん（ママ）／はひしとおもひさため候ぬたとへこんしやうのちくこそたゝ／いまはかりにて候とてらいせ（ママ）にてはかならす一ふつしやうと／のえんと生れあひ参らせ候へしとて入給へは上人もすみそ／めのそてをかほにをしあてゝなく〳〵東山へそかへられけ」（19オ）る三位中将をはかちはら平三かけときうけ取てたてまつりて（ママ）／おなしき三月十日くわんとうへ下かうとそ聞えけるさいこく／よりいけ取にせられて二たひ都へ帰りのほり給ふたにも／かなしきにいつしか又あつまちはるかにおもむき給ひける心／のうちそをしはかられてあはれなりかも河しら川うちわ／たりまつさか四の宮かはらにもなりしかはこゝはむかしゑんき／の第四の皇子せみまろのせきのふもとに捨られてつねは心／をすましひはをひき給ひしにはくかの三位と云し人風の／吹日もふかぬ日も雨のふる夜もふらぬよも三年か間あゆみ／をはこひ立聞てひきよくをつたへ給ひしわらやのとこのきう」（19ウ）せきもおもひ入てそとをられけるあふさか山打こえてせたの／なかはし駒もとゝろとふみならしのちしの原の露をわけまの／の入江のはま風にしかのうらなみはるかけてかすみにくも／るかゝみ山夕日も西にかたふけは

ふもとのしゆくにそ付た／まふひらのたかねをきたにみてゐふきのたけもちかつきぬ／すりはり山をうちこえてその事としもなけれともあれて心／のととまるはふはの関屋のいたひさし／

みのならは花もさきなんくんせ川わたりて見はや春のけ／しきを

とうちなかめおはりなるあつたのやしろをふしおかみなにと／なるみのしほひかた涙にそてはしほれつゝかのありは」（２０オ）らの中将のから衣きつゝ馴にしとなかめけん三かはの／八はしにもなりしかはくもてに物をとあはれなり都も／今はとをたうみはまなのはしのゆふしほにさゝれてのほる／あまをふねこかれて物や思ふらんさらてもたひはものう／きに心をつくすゆふまくれいけたの宿にそつき給ふかの／しゆくのゆうくんゆやかむすめしゝうかもとにしゆくし給へ／りしゝう三位ちうしやうを見奉りて日比はかゝる御ありさまに／見なし奉るへしとは露おもひもよらさりしかとて一しゆ／の歌をそをくりける／

あつまちやはにふのこやのいふせさにふるさといかに」（２０ウ）

こひしかるらん

三位中将かちはらをめしてこれはいかなるも／のそとの給へはこれこそやしまのおほいとのゝいまたたう／こくのかみにてわたり候し時おほしめして都へ御のほりの／ときもめしくせさせおはしまして候しにこきやうに／一人の老母ありある時かれかいたはる事候て都へししやを／つかはして候けれはしゝういかにいとまを申せ共ゆるされ／参らする事も候らはさりけるにころはきさらき廿日／あまりの事にてもや候けん／

いかにせんみやこのはるもおしけれとなれしあつまの花／やちるらん

と申歌つかうまつりてゆるされ参らせて候し」（２１オ）かいたう一のめいしんいけたのしゝうと申ものにて候へと／申けれは三位さる事有とかんし給ひて返事をそせられける／

ふるさともこひしくもなしたひのそらいつくもつゐの／すみかならねは

みやこを出て日かすふれはやよひもなかはすき／春もすてにくれなんとすえんさむの花はこん（ママ）の雪かとう／たかはれ浦さしま〳〵かすみ渡れりこしかた行すゑおもひ／つゝけ給ふにいかなるせんこうのつたなさそおもはれける（ママ）／こそことはりなれ御子の一人もおはせさりける事をはゝ二／位とのも北のかたも大納言（ママ）のすけとのも大きになけき給／て万の神仏にいのり申されけれともつゐにそのしるしなしさ」（２１ウ）れともいまはかしこくなかりけるあらましかはいとおもひ／のかすはそひなましとの給ひけるそいとおしきつたかえて／のはしけり心ほそきうつの山うつゝは夢のの心（ママ）ちしてこしを／すきて行はきたにとをさかりて雪しろき山ありとへはかいの／しらねとそ申ける三位中将／

おしからぬいのちなれともけふあれはつれなきかひのしらぬ（ママ）／

をもみつ
きよみかせきをもすきけれはふしのすそにも成／にけり北にはせいさんか、として松ふく風もさつ〳〵たり南／にさうかいまん〳〵としてきしうつなみもはう〳〵たりこひ／せはやせぬへしこひせすもありなんと明神のうたひはしめ給」（22オ）ひけんあしからの山うちこえていそかぬたひとはおもへとも日／かすやう〳〵かさなれはかまくらにこそつき給へつきの日兵衛／のすけたいめんし給て君の御いきとをりをやすめ参ら／せんと存候又おやのくはいけいのはちをきよめむとおもひ／たち候しよりこのかた平家をほろほし奉る事はあん／のうに（ママ）候きされ共かやうにまのあたりけさんに入へしとこ／そ存候はさりつれかゝれはさためてやしまのおほいとのにも／けさむに入ぬとこそそむし候へそも〳〵ならをほろほ／され候し事はこ入道相国の御はからひ候か又時にとりての御／事かもてのほかの御さいこうとこそそむし候へと有けれは」（22ウ）南都えんしやうの事はちよくめいといひふめいといひ大／将くむにえらはれてしけひらまかりむかひ候し程に／おほくのせいともの中よりふりよに火いてきてからん／せうしつのてうちからをよはさるしたいなりしけひら都／を出しよりこのかたかはねをは山野にもさらし河海のそこ／にもしつめんとこそ存候しに命いきてこれまて下るへし／とは露思ひよらすてうてきをたいらけぬるもの、七代迄／さかふると云事はきはめたるひかことなりそのゆへは御へんもさ／ためてしり給ひたるらん保元平治りやうとのかつせんに／こ入道しやうこくふしのしやうをさつけられしより此かた」（23オ）当家のゑいくわかたをならふる人もなかりきされともその／身一こをかきりりてし（ママ）そんかくあるへしやはいんたうはかた／いにとらはれふむわうはゆういにとらはると云事ありいか／にたけきしやうくんなれともかたきのてにとらはれてい／のちをうしなふ事わかんためしおほき事也しけひら一／人にかきらねはまたくはちにてはちならすたゝはうをんに／はいそきかうへをはねらるへしとのたまひてその後はもの／ものたまはすならをほろほされたるからんのかたきなり／大衆さためて申さんすらんとてそのほとはいつの国の住人／かののすけむね茂にそあつけられけるかの、すけあつまの」（23ウ）ふしなれともなさけあるものにて三位中将をやう〳〵になくさ／め奉る有時ゆとのして御ゆひかせ奉る三位ちうしやうかやうに／身をきよめてちかうきらるゝ事もやあらんすらんとかへ／てうれしくも又心ほそくもおもはれけりやゝありてめゆい／のかたひらにしろきゆまきしたる女ゆとのゝ戸をしあけて参／りたり三位ちうしやうあれはいかにとの給へはこれはひやうゑ／のすけの御方より御ゆとの申せとて参らせられて候とて又／十四五はかりなるめのわらはのしろきに（ママ）袖うちかつきたるか／はんさうたらひにくしそへてもち参る二人かいしやくして／やゝはるかに御ゆひかせ奉りかみあらひなとしてあかり給ふ」（24オ）この女はうかへるとて何事にても思召れん事をは承て申／せとこそさふらひつれしけひら一人の子なけれは今生になに／事をかおもひをくへきたゝしちかくきらるゝ事もやあら／むす

らんかみそりたきとの給へはこの人参りてひやうゑのすけ／殿にこの由を申それ思ひもよらぬ事也よりともか親の／かたきと云なからてうてきなりぬる人をいかてかわたくしに／ははからひ申へきとその給ひける三位中将しゆこのふ／しにの給ひけるはさるにてもたゝ今の人はなさけ有つる／ものかななをは何と云やらんいかなるものそとの給へはあれは／きせ川の宿のちやうしやかむすめにて候かみめすかた心」（２４ウ）さまゆうに候間ひやうゑのすけ殿この三四年めしつかはれ候／かなをはせんしゆのまへと申なりとそ申けるひやうゑのすけ／は三位中将のかくの給ふよしをつたへ聞給ひて有時千しゆの／まへを花やかにいたしたてゝ三位ちうしやうの方へつかはさ／るそのくれしも雨すこしふりてなにとなく物あはれなる／折ふし千しゆのまへひはこと持せてまいりたりかのゝすけは三／位中将に酒をすゝめ奉る千手のまへしやくをとるかのゝ／すけもおとなしき家子らうとうせう〳〵召くして御まへに候／けり中将少うけいとけうもなけにみえられけれはかのゝすけ／か申けるはかつ聞召ても候らんあひかまへてよく〳〵なく」（２５オ）さめ奉られよけたいにてよりともうらむなとの仰をまかり／かふりて候へはむねもちか心のをよひ候はん程は御宮つかへ仕／らんするにて候それ〳〵一せい申てすゝめ申たまへと申／せは千手のまへしやくをさしをきて／

らきのてういたるなさけなき事をきふにねたむ／

といふらうゑいをしたりけれは三位ちうしやうこのらうゑい／せん人をは北野の天神の一日に三度かけりてまもらんと御／ちかひわたらせ給ふ也され共しけひらこむしやうにてはすてら／れ奉りぬちやうもんしてもなにかはせんたゝしさいしやうか／ろみぬへき事ならはしかるへうこそとのたまへはせんしゆの」（２５ウ）まへ又／

十あくといへ共猶いんせうす

と云らうゑいをし

こくらく／ねかはん人はみなみたのかうをとなふへし

といふいまやうをうた／ひすましたりけれは三位中将其時さかつきかたふけら／る千手のまへ給てかのゝすけにさすかのゝすけかのみける／時千手のまへことを引けるを聞て三位中将の給ひけるはふ／つうにはこのかくをは五しやうらくと申せ共しけひらかこゝろ／にはこしやうらくとこそくわんすへけれやかてわうしやうの／きうをひかはやとたはふれ給てひはをとりてんしゆをしめ／わうしやうきうをそ引すまされたる三位中将ひはかきならし」（２６オ）

灯くらふしてはすかうくしか涙夜更てしめんそかの声／

と云らうゑをせられけりこのしの心は昔かんのかうう（ママ）と位あ／らそひて八か年か間にかつせんする事七十余度たゝか／ひことにかううかちぬされともかううつゐにたゝかひま／けてほろひし時くしと申しさいあひのひしんのなこりを／おしまれたりし心也三位ちうしやうこれはこの世の思出なる／へし何事にても今一せい候はゝやとの給ひけれは千手のまへ／

一しゆのかけにやとりあひおなしなかれをむすふもみな／これ

せんせの契りなり

と云しらひやうしをかそへすました／りけれは三位ちうしやうをはしめ奉りてかの、すけ已下の武士」（２６ウ）もみなかんるいをなかしける三位中将あつまのおくにも／ゆうなる女は有けるものかなとて名残おしけにそ思は／れける明けれはせんしゆのまへいとま申てかへり参りたり兵衛／のすけはその朝ちふつたうに法花経よみておはしけるか千／手のまへかへり参りたりけるをめしてよりともはよくはいか／いはしたる物をこそ（ママ）たはふれられけるさいゐんのしくわんち／かよし御まへに物かきて候けるかふてをさしをき何事に／て候やらんと申たりけれはひやうゑのすけのたまひけるは／平家の人さはさいちのうけい世にすくれたりときくにあ／はせてちうしやうのひはのはち音口すさみ夜もすから立」（２７オ）聞つるかゆうにわりなうそおもひつれとの給へはちかよし申／けるはへいけの人さは代さのさいしんともにて候ようきもみ／な人にすくれておはしまし候一年小松のたいふをはしめとし／てこの人さを花にたとへ候しにこの人をはほたんのはな／にこそたとへて候しかたれもゆふへ承るへく候しかともいさ／さかいたはる事候てそのきなく候こののちはつねに立聞／仕り候へしとそ申けるひやうゑのすけは三位中将のひは／のはちをとらうゑいのきよくをつねはおもしろけにかんし／給ひけりせんしゆのまへはいつしかものおもひとやなりぬらん／

小松三位中将かうやさんけいの事」（２７ウ）

さる程にこまつ三位の中将これもりはその身はやしまに有／なから心は都へかよはれけりこきやうにと、めをき給ひける／おさなき人さの事をのみ給ひけるかこれよりうらつたひ／しまつたひにも都に上らはやと思はれけれ共さるへきた／よりもなかりけり寿永三年三月十五日のあかつきかたによ三／ひやうゑしけかけわらはいしとう丸舟に心えたりけれはとね／りたけさとこれ三人はかりを召くしてしのひつ、やしまの／たちをまきれ出あはの国ゆうきのうらより舟にのりてそ出ら／れけるそれよりなるとのをきををしわたりわかふきあけ／そとをりひめの神とあらはれ給ひし玉つしまの明神にちせんこむ（ママ）」（２８オ）けんの御前のなきさをこきすきてきのみなとにこそ付給／へこれより山つたひ里つたひにも都へ上らはやとは思はれ／けれともをちほん三位中将のいけとりにせられてはちをさ／らすたにもかなしきに我さへとらへられてち、のかはねにちを／あやさん事こそかなしけれとて心は千たひす、まれけれ／とも心に心をからかひてなく〳〵高野の御山へまいりつ、しり／たるひしりをたつね給ふ／

よこふえ事

三条のさいとうさゑもんの大夫もちよりか子にさいとうたき／くちときよりとてもとは小松殿に候けるか十三のとし本所」（２８ウ）へ参りたりけんれいもんゐんのさうしよこふえと申をんな／ありたきくちこれをいひよりてあさからすおもひてすきけ／れは人の親の子をおもふならひにてさても世にあるもの、子と／もにはあひなれすして云かひなきものにあひなる、てうもと／もふかうのいたりな

りなとさま〳〵にいさめけれはたきくちお／もひけるはせいわうほと聞えしも昔は有けりいまはなし／とうはうさくと云けるもなをのみ聞てめにはみす老少ふ／ちやうのならひはせきくはのひかりにことならすたとひ人長／命をたもつといへ共七十八十をすくされす其中に人のさかりな／る事わつかに廿余年をかきれりおもはしきものをみんとす」（２９オ）れはおやのめいをそむくににたり又親のめいにしたかひて／思はぬ世にすみて何かせんゆめまほろしの世の中そかしこ／れせんちしきなりしかしうき世をいとひまことの道に入なん／にはとて年十九にてもときりさかのおくわうしやうゐん（ママ）／なる所に念仏してこそゐたりけれよこふえこれをきゝわれ／をこそすてめさまをかへけん事こそむねんなれ人こそ心つよ／くともたつねてうらみはやとおもひけれはあるくれ程にたい／りをはしのひつゝまきれてさかのかたへそあくかれゆく此／は二月十日あまりの事なれは梅つの里の春風によそのに／ほひもなつかしくおほゐ河の月かけはかすみにこもりて」（２９ウ）おほろなり一かたならぬあはれさもたれゆへとこそ思ひけめ／わうしやう院とは聞たれとさたかにいつれのはうともしら／されはこのもかのもにたゝすみてたつねかねてそまよひ／けるその夜はしやかたうにつやしあかして又たつねゆくほとに／すみあらしたる僧はうにねんふつのをとのしけるを尋ぬ／る人のこゑにきゝなしてくしたる女をいれわらはこそ参りたれ／さまのかはりておはすらんをも一め見奉らはやと云たりけれは／たきくちむねうちさはきしやうしのひまより見けれはねくた／れかみのたえまより涙の露もところせくみとりのまゆすみ／みたれつゝこよひもうちとけねさりけるとおほしくておもや」（３０オ）せたるけしき尋かねたる有さまことにいたはしくていかなるたう／しんしやうも心よはくなりぬへしされ共やかて人を出して／またくこれにはさる事なしかとたかへにてそ候らんとて／つゐにあはてそかへしけるたきくち入道あるしのそうに／申けるはこれも心しつかにて念仏のしやうけは候はね共世に候／しときあひしりて候し女にすまゐをしられて候へはたとひ／一度こそかくれ候ともしたふ事あらはしゆきやうのさはり／とも成ぬへく候いとま申てとてわうしやうゐんをはまき／れ出かうやにのほりほうとうゐんのなしのはうと云ところに／ねんふつしてこそをこなひけれよこふえも都にかへりてなら」（３０ウ）のほつけしにをこなふよしきこえしかはたきくち高野の／御山より一しゆのうたをそをくりける／

そるまてはうらみしかともあつさゆみまことの道に／いるそうれしき

よこふえか返事には／

そるとてもなにかうらみんあつさ弓ひきとゝむへき心／ならねは

よこふえはそのおもひのつかれ（ママ）にや程なくうせに／けりたきくち入道はいよ〳〵をこなひすましてそゐたりける／ちゝもこれをはよろこひてやかてふけうをゆるしてけりし／たしきものとも高野のひしりの御はうとそもてなしける／

しうろんの事」（31オ）

三位中将たきくち入道にたつねあひて見給ふに都にあり／し時はほいにたてゑほうしゑもんをつくろひひんをな／て花やかなりし男なりしか出家ののちはけふそはしめて見／給ふにいまた三十にたにもならぬからうそうすかたにやせ／おとろへこきすみそめにおなしけさかうのけふりにしみかほ／りさかしけにおもひ入たるたうしんしやうらやましくおもはれ／けるしんの七けんかちくりんしかんの四かうかこもりけん／しやうさんのすまゐもこれにはすきしとそみえしたきくち／入道三位中将を見奉りてこはいかにさらにうつゝとこそお／もはせおはしまねはこの程はやしまにとこそ承り候つるになに」（31ウ）としてこれまてはつたはりおはしまして候やらんと申れは／三位中将されはこそ人なみ〳〵に一門にともなひて西国に／おち下りてありしかとも大かたうらめしさもさる事に／てふるさとにとゝめをきしさいしの事のみおもひゐたれは物／思ふ色のいはぬにしるくやありけんおほいとのも二位との／もいけの大納言のやうに二心やあるらんとうちとけ給はね／はいとゝ心もとゝまらすして何となうやしまのちをまきれい／てこれまてまよひ来れる也されともつゐにのかるへきみにも／あらねはこれにて出家入道をもし火のなか水のそこへもいり／なんと思ひさためてあるなりたゝしくまのへ参らむとおもふ」（32オ）しゆくくわんなりとのたまひもあへす涙にむせひ給へはたき／くち入道申けるはうき世の有さまはとてもかくても候なんな／かき世のやみこそ心うく候へそそ申けるやかてたきくち入／道をせんたちにてたうたうしゆんれいし給ひつゝおくの／ゐんへ参り給ふせきしつのやうをおかみたまふに心もことは／もをよはれすむかしえんきのせいたい御むさうのつけ有てひ／はた色御いをゝくり給ひしにちよくしちうなこむすけすみ／のきやうはんにや寺のそうしやうくわんけん二人この御山に／まいり給てせきしつの御とををしひらき御いをきせ奉らんと／したまふにきりあつくへたゝりて大師おかまれ給はす時に」（32ウ）僧正ふかくしうるいをなかしてわれひものたいないをいてし／しやうのしつにいりしよりこのかたいまたきんかいをほんせす／されはなとかおかまれ給はさるへきとて五たいをちになけ／ほつろていきうし給へはやうやくきりはねて山のはより月出／るかことくにて大しおかまれ給ひけりそうしやうすいきの涙／をなかし御くしの八尺はかりまておひのひさせ給ひたりけ／るをそりおろし奉りて御衣をきせ奉らせたまひけり彼／てし石山のないくしゆんゆう大しをおかみ奉らてふかくなみ／たにしつみておはしけるをそうしやう右のてをとりて大し／の御ひさのほとりにをしあてたまへはその手いきやうくんし」（33オ）て一こうせすそのうつりかはすなはち石山のしやうけうに／とゝまりて今にありとそ承る大し御かとの御返事に／のたまはく我昔さつたにあひてまのあたりいんみやうをつ／たへきむひのせいくわんをゝこしてへんちのいゝきにはんへり／ちうやうはんみんをあはれみてふけんのひくはんにちうす／よくしんに三まいをせうしてしゝの下しやうをまつとそかゝ／れたる白川院の御時寛治

二年正月十五日せんとうにてしゆ／〳〵の御たんき有けるに上くわう仰けるはたうしさいてん／にしやうしんの如来しゆつせし給ひてせつほうりしやうをと／き給ふに参りてちやうもんすへしやと仰られけれは公卿殿」（３３ウ）上人参るへきよし申されけれはそのなかにかうそつまさふ／さのきやうの申されけるは人〻は参らせ給ふともまぬさふさ／にをひてはかなひ候ましわかてうはよのつねのとかいなれはや／すきかたも候なん天ちくしんたんのさかいにりうさそうれ／いと云けんなんありわたりかたくしてこえかたき道なりま／つそうれいと云山あり西北は大せつせんとつゝき東南はか／いくにそひへいてたりかの山をさかひてひかしをしんたむといひ／南を天ちくとなつけたりにしをかし（ママ）といひ北をここくとな／つけたり道のとをさは八千より草もおひす水もなし／おほくのなんしよあるなかにことにたかきところ有そのなを」（３４オ）けいはうさい（ママ）なんとなつけたりきんとう（ママ）にのそむて日をゝく／りはくうんをふみて天に上るくものうはきをぬきさけて／いはのかとをかゝへつゝ廿日にこそ上るなれかの山に上りぬ／れは三千せかいのくわうくうはまなこの前にあきらかなり／一えんふたいのゑんきむはあしの下にあつめたりつきに／りうさといふ川ありひるはけいふうはけしくていさこを／とはして雨のことし夜はようきはしりちりて火をともし／てほしにたり河わ*をたりてかはらをすきかはらをすき川を／わたる事八か日か間に六百三十六度なりたとひわたると／云ともすいなんのかれはようきのかいのかれしかたしたとへ」（３４ウ）君（ママ）のふいをのかると云共すいはのへうなんさりかたしされはけ／んしやう三さうもかのさかひにして六とまて命をうしなひ／とりうのこけにくちにしかともつきのしやうにこそ法をは／わたし給ひけれされはさかの天皇の時せいりやうてんにして四／かのたいしようしうせ（ママ）きとくをあつめられけんみつのほう／もんをろむたんをいたす事まし〳〵きほつさうしうにけん／にん三ろむしうにたうしやうてんたいにきしんけこんに／たうおう一〻にわかしうのめてたきむねをたて申さるほ／つさうしうには源仁わかしうには三時しう（ママ）をたて、一代のし／やうをはんすいはゆるくう中是なり三ろんしうにたうし」（３５オ）やうわかしうにはしやうけうをたてゝ一代のしやうけうををふ（ママ）／二さうとはほさつさうしやうもんさうこれなりてんたいにき／しんわかしうには四けう五みをたてゝ一さいのしやうけうをを／ふさうつうへちえん（ママ）これなり五みとはにうらくしやうし／ゆくそたいこみこれ也けこんにはたうをうわかしうには五け／うをはんす五けうは小せうけうしけうしうけうとむけう（ママ）／これなりそのゝちしんこんのこうほうしはらくわかしうにはし／さうけうさうをきよとしてそくしんしやうふつのきをたて／申さるそのときけんにんをよそ一代三時のきやうもんをみ／るにたゝ三こう成仏のもんのみありてそくしん成仏のも」（３５ウ）むなしいつれのもむせうによつてかそくしん成仏のきをた／てらるゝやそのもむせうあらはつふさにいたされ候へしゆ／ゑのきまうをはらはるへしとの給へはそのとききほう（ママ）なんた／ちのしやうけうのなかには三こうしやうふつのもん

ありてそく／しんしやうふつのもむなし其時けんにんかさねてまこと／にそのもむせうあらはつふさにいたされよとの給へはもんせう／をひき給ふ／

にやく人くふつゑつうたつほたいしん／

ふもしよしやうしんそくせう大かくい／

これらもん(ママ)をはしめとしてそのかすすてにはんた也けむにむ」（36オ）もんせうはいたされたりこのもんのことくしうをえたる／そのしつせうたれ人そやそのしつせうとをくは大日こんかう／さつたこれ也ちかくはわか身すなはちこれなりとて手にみつ／ゐんをむすひくちにみつこむをとなへ心にくわんねんをこら／し給へはしやうしんのにくしむたちまちにてんしてしま／わうこんのはたへとなりしゆつけのかうへの上にはしねん五／ふつのほうくはんをけんしくわうみやうさうてんをてらし／て日りんのひかりをうはひてうていはりをかゝやかしてみつ／こむしやうとのきしきをあらはすその時くわうてい御さを／さりてらいをなさせ給ふしんかけいしやうかうふりのこしをか」（36ウ）たふけ南都六しうのしやう地にひさまつきてけいかくす／しやうふつきしんのりつはにはたうをうたうしやうしたをま／きほつしんしきさうのなんたうにはけんにんきしんくちを／とつ四しゆきふくしてつゐにもんようにましはりて一てう／しんかうしてはしめてほうりうをうく三みつ五ちの水四か／いにみちてくはくち(ママ)をあらひ六大むけの月一天にかゝや／きて長夜をてらし給へり御さいしやうの後もしやうし／ふへつとしてきねんのほうをんをきこしめす六しやうふ／たいにしてしそむ出世をまち給ふ／

かうやこかうの事」（37オ）

上くわう仰られけるはかほとの事を今まて思召よらさりけ／るよ明日御幸なるへきよし仰けれはきやうはう申されけるは／明日の御幸もそつしに存候しやかほとけせつほうのみきりに／十六の大国のしよわうのきやうかうのさほうはこん〳〵をも／ていしやうとしあんはをかさりしゆきく*よをましへてくわん／かいをかさりたまふこれなんくのおもひをこらし心さしをい／たし給ふところなり我てう高野の御山をはりやうしゆせんと／思召されしやうしんの大しをはしやか如来とおほしめして御／幸のきしきをひきつくろはるへくや候らんと申されけれは／五か日をそをくられける公卿殿上人れうらきんしうをたち重」（37ウ）ね高野へならせ給ひけるこれそ高野のこかうのはしめなるかの／まかせうのけいそくのほらにこもりてしつの春の風を／こし給ひけんも是にはすきしとこそみえしかの高野山と申／はていせいをさりて二百りきやうりをはなれむ人しやうせいこ(ママ)／すゑをならさすして夕日のかけしつかなり八ようのみね八の／谷かゝとしてそひへへう〳〵としてみねたかし花のいろりんふの／そこにほころひれいのこゑおのへのくもゝひゝけりかはらに／松おひかきにこけむしてまことにせいさう久しくおほ／えたり御入ちやうは承和二年三月廿一日のとらの一天の事／なれは三百よさい今より後も五十六し(ママ)そむのしゆつせ三ゑの」（38オ）あかつきをまたせ給ふらんこそ久しけれ／

小松三位中将出家の事

これもりか命はせつ山になくらんとりのやうにけふともあ／すともしらぬ事こそかなしけれとの給ひけるそいとおし／きその夜はたきくち入道かあんしつにと、まりてむかしいまの／事共かたりあかされ給ひけりひしりかきやうきを見給ふ／にしこくのしんしんのゆかの上にはしむりの玉をみかくらんとも／おほえこよひしんてうのかねのをとにはしやうしのねふりを／さますらんとも見えたりのかれぬへくはかくてもあらま／ほしくそ思はれけるあけければ三位中将かいしをしやうし」（３８ウ）て出家せんとし給ひけるによ三ひやうゑしけかけいしとう／丸をめしての給ひけるはこれもりこそ道せはき身にてかくな／なる（ママ）ともなんちはこれもりかゆくゑを見はて、都にのほり／いかならん人をもたのみて身をもたすけよかしとのたまけ（*イ）／れは二人のものとも涙にむせひてしはしは御返事も申さす／や、ありてよ三ひやうゑのせうか申けるはち、にて候しよ三／さゑもんのせうかけやすはさむぬる平治のかつせんに二条／堀河の御た、かひにこおほいとの、御いのちにかはりまいら／せてかまたひやうゑ正清にくむてあく源太にうたれ候ぬ／其時しけかけは二さいになり候けりは、には七さいにてをく」（３９オ）れ候ぬたれあはれみふひんと申ものも候はさりしかともこと／の、わかいのちにかはりたるもの、子なれはとてことに御／あはれみ候て九のとし君の御けんふくの候しにかたしけな／くももととりあけられまいらせてもりの字をは五代に／つけぬ重の字をはまつわうにたふとてさてこそしけかけ／とはめされしか又同名（ママ）をまつわうと申候事もむまれて五十日と／申けるにち、かいたきてまいりて候けれはこの家をは小松とい／へはいはひてまつわうとつけんとてことの、つけさせおはしま／して候けるなりされは御わうしやうの時この世の事をはみな／思召すてさせ給て一事も仰いたされ候はさりしか共しけか」（３９ウ）けは少将殿の御かたに候てみやつかひ仕れあひかまへて御／心にたかふなとさいこの仰せにも候きとりわきこの御方にて／すてに十七年うへしたなうあそひたはふれ参らせ候きさ／れはきみの神にもならせ給ひてのちわれらたのしみさかへ世／にあらは千ねんのよはひをのふへきかたとひ万年をたもつ共／つゐにはおはりのなかるへきかとてみつからもと、りをしき／りてたきくち入道にそらせてかいをそたもちけるいしと／う丸ももとゆひきはよりかみをきるこれも八さいよりつき／奉りてことしはすてに十二年それかしはたれにもをとらし／物をと申てそられける三位中将このものともさきたつを」（４０オ）見給ふになみたせきあへ給はす／

るてん三かいちうをんあいふのうたん／

きおんにうむゐしんしつほうをんしや／

と三たひとなへてそり給ふにつけてもこきやうにと、めを／きしおさなきものに今一度みえてかくならは心くるしく／ものはおもはさらましとのたまひけるそはかなき／

小松三位中将熊野さんけいならひに海に入る、事

その後又とねりたけさとをめしての給ひけるはなんちをは日／比は

都へ上さんとこそ云つれ共おさなきものともの聞て／なけかん事もふひんなれはこれもりか行ゑを見はて、」（４０ウ）やしまへまいりこのよしを申へしそも〳〵からかはと云よろ／ひこからすといふたちは当家ちやく〳〵につたはりてこれもり／まては九代なりしん三位中将にあつけをきたりもし当／家の代ともなる事あらは六代にたふへしと申へしとの給ひ／けるやかてたきくち入道をせんたちにてをの〳〵山ふしし／ゆきやうのまねをしおひをかたにかけ高野の御山をたちて／さむとうへこそ出給へふちしろの王子の御まへより王子〳〵ふし／おかみまいり給ふ程に千里のはまの北いはしろのわうし／の御前にてかりしやうそくしたるふし十四五きゆきあひ／奉るたゝ今これにてからめとられやせんすらんまことにさもあら」（４１オ）はしかいせんとてをの〳〵かたはらに立よりかたなのつかに／てをかけてあひまたれける程にこれら思ひのほかにみな馬／よりおりかしこまてそとをりける三位中将みしりたる／ものにこそたれなるらんとてあしはやにそ過られける東国（当）／の住人ゆあさのこんのかみむねしけかちやくし七郎ひやう／ゑのせうむねみつと申ものなりけりらうとうともたゝいま／のしゆきやうしやはいかなる人にて候やらんと申けれはあれこ／そ小松三位中将殿にておはしませ何として是まてつた／はらせ給ひけるやらんはや御さまかへさせ給ひけりよ三兵衛／のせういしとう丸もつき奉りて出家したりけるそや」（４１ウ）まいりてけさんにも入へかりつれとも御はゝかりもあるとお／もひつれはとをりたりつるなりいとおしの御有さま共やと／てみな袖をそぬらしけるいはた川をわたられけるに此／川のなかれを一度わたる（*も）ものあくこうほんなうむしのさ／いしやうみなきゆなる物をとてたのもしけにその給ひける／たきのしりたかはら十てうくませ河ゆのかはみこしかたけ／をも過けれはほつしんもんにそなりにけるやう〳〵さし／給ふ程にほんくうへつかせ給てをの〳〵おかみたまふに心も／ことはもをよはれす大ひおうこのかすみはゆやさんにたな／ひきれいけんふさうのしんめいをとなし川にあとをたれ一」（４２オ）乗しゆきやうのみねにはかんおうの月くまなく六こんさむけの／にはにはまうさうの露をむすはすいつれも〳〵たのもしか／らすと云事なしはるかに夜ふけしつまりて後せうし／やうてんの御まへにてけいひやくせられけりちゝのおとゝも此／御まへにして命をめしてこしやうたすけさせたまへと申さ／せ給ひし御事までも思召いたさせ給ひてほんちみた如来に／ておはしませはせつしゆふしやのほんくわんあやまり給はすは／九ほんあんやうのしやうとへいんせうしたまへと申されける／中にもこきやうにとゝめをきしさいしあんをんにとい」（４２ウ）のられけるうき世をいとひまことの道に入たまふとは申せ共／まうしうは猶つきせすとおほえてかなしけれあけけれ／は御せんのつより舟にのり新宮へ参り給ふかんのくらをおか／み給ふにかんせうたかくそひへて嵐まうさうのゆめをやふり／れうすいきよくなかれてなみほんなうのあかをすゝくらんと／もおほえたりあすかのやしろをふしおかみさのゝ松原さしす／きてやけいの露に袖ぬらしなちの御山へまいりた

まふ三の／御山はいつれもとり〳〵とは申せともなち山ことにすく／れたり三重にみなきりおつるたきの水数千ちやうまて／よちのほりくわんをんのれいさうは岩の上にあらはれてふた」（43オ）らくせんともいひつへし法花とくしゆのこゑはかすみのそこに／かすかにてりやうしゆ山とも申つへしくわん和のなつの比／花山の法皇十せんの御くらゐをすへらせ給ひてこの山にして九／ほんのしやうせつをいのらせ給ひし御あんしつのきうせき／には昔をしのふはかりにておひ木の桜のみそのこれるたきも／とにまうてつゝ千手のたうにてねんしゆせられけるになち／こもりのなかに此三位中将を都にてよくみしり奉りける／老僧の有けるかちうしやう見奉りてこゝなるしゆきやう／しやはたれやらんとおもひたれは小松三位ちうしやう殿にておは／しましけるそやこのほとはやしまにとこそ聞つるになにと」（43ウ）してこれ迄はつたはりおはしたるやらん出家し給ひけりあの人／そかしすきにし安元二年三月十五日に法住寺とのにして／りんしのほうをん経くやうにいそちの御賀のありしに／いまた四位少将とて十八か九かになられしか当家にもたけに／もめよきてん上人にえらはれてさくらをかさしせいかい／はをまはれしにかいかには関白已下大臣公卿ちやくしたまひた／りきその時ちゝのおとゝは大納言のさ大しやうをちむねも／りは中納言にてちやくせ（ママ）られたりしけいきたれかたをなら／ふる人もなかりき嵐にひるかへるまひのそて天をもてらし／地をもかゝやかすはかり也たゝいま大臣の大しやうまちうけた」（44オ）まふへき人よとこそ我も人もおもひあひたりしによのまにか／はる世のならひ程口おしかりける物あらしいとおしの御ありさま／やとて涙にむせひけれはさんろうのきやうしやたちもみ／なそてをぬらしける明けれははまの宮の御前より一よ／うの舟にさほさして万里のさかいにうかひ給ふこき行／船のあとしらなみ心ほそくそたちかへるかのなきさに出し／てみれは海の中に一のしまありほたてしまとそ申けるかの／島に船をよせふねよりあかり松のえたをけつりてゆひの／さきよりちをあやしめいせきをそかゝれけるそ　う（ママ）大（ママ）政大臣平／のきよもりこう法名しやうかいちやくし小松内大臣しけもり」（44ウ）ほうみやうしやうれん其ちやくし正三位の卿さこんゑの中将／これもりほうみやうしやうえん生年廿七さい寿永三年三月／廿九日なちのをきにしつみをはりぬとかきとゝめおくには／一しゆの歌をそかゝれたる／

ふるさとのまつ風いかにうらむらんそこのみくつと／しつむわかみを

又ふねにとりのりてうみにそうかひ給ひけるか／いろはるかに見わたせはあはれをもよほすと云事なし／あまのつりふねのうきぬゆらるゝを見給ふにつけても我み／のうへとそおほえけるころは三月のすゑの事也けり春もすてに／くれなんとすいのちはけふをかきりなれは春のなこりもさこそ」（45オ）はおしかりけめあるひはか（ママ）んにしせきして春の花にうたをゑ／いしあるひはきうゐんにしくやして秋の月にくはんけん／をそうしあるひはもしあかまのなみの上

にうきねして／からろのをとに夢をさましあるひはやしまのうらのあまの／とまやにたひねしてなみまの月に心をくたきすきにしか／かたのゑいすいはみなゆめとそなりにけるかりのくもゐにを／とつれゆくをみ給ふにつけてもこきやうへことつてせまほ／しくそふかここくのうらみまておもひ残せるかたそなき三位／中将西にむきさいこの十念となへ給へる念仏をとめてあは／れ人の身にさいしはもつましかりける物そやこんしやうに」（45ウ）て心をつくすのみならす後世ほたいまてもさまたけとなる／心うさよたゝ今も又思ひ出るそやおもふ事を心にこむれは／つみふかゝらんなれはさんけするなりとその給ひけるたきく／ち入道申けるはたかきもいやしきもをんあひのわかれは／ちからをよはぬことにて候なりなかにもふうふは一夜契り*の／をむすふも五百しやうのえんとこそ承り候へしやうしやひ／つめつゑしやちやうりはうきよのならひにて候へはたとひち／そくこそ候ともをくれさきたつ御わかれつゐになくしても／や候へきたい六天のまわうはよくかいをわかまゝにりやうし／てそのなかのしゆしやうのしやうしをはなれんとする事」（46オ）を大きにおしみあるひは親と成子となりあるひは女となり男／となりもろ〳〵のはうへんをめくらしてさまたけんとし候を／三世の諸仏は一さいしゆしやうを一子のことくにおほしめして／こくらくしやうとふたいのほうとにすゝめいれむとし給ふ／に人のみにはさいしと申ものかしやうしをはなれぬきつ／なとなるによりて仏の大きにいましめたまふはこれ也いよ／の入道らいきはさたたうむねたうをせめしに十二年のかつせん／の間に人のくひをきる事一万五十人（ママ）そのほか山野のけ／たものかうかのうろくすそのいのちをたつ事いく千万と云／かすをしらすされとも一ねんほたいしんをゝこすによりて」（46ウ）わうしやうすることをえたり御せんそ平将くむはまさかと／をほろほして八か国をなひけさせ給ひしにあひつきて又ち／やく〳〵九代にあたらせ給へは君こそ日本国のしやうくんとも／ならせ給ふへけれとも御うんつき給ひぬる上はちから及／はせ給はす出家のくとくははくたいなれはせんせのさいこう／もみなめつせさせ給ひぬらん百千さいの間百らかんをくやう／したとひ人有て七ほうのたうはをたてん事たかさ三十／三天にいたると云とも猶一日の出家のくとくにはをよはすとこそ／みえて候へつみふかきらいき心つよきによりてわうしやう／をとくさせるさいこうおはしまさねはなとかしやうとに生れ」（47オ）させ給はさるへきみたによらいは一念十ねんをもきらはす／十あく五きやくをもみちひかんといふひくわんましますなり／彼くわんりきにせうせんに何の御うたかひか候へき廿五のほさ／つはきかくかゑいしてたゝいま西方よりきたり給ふへし大／せいしほさつは百ふくしやうこんの御てをのへくわんせを／んほさつはこんれんたいをさゝけむりやうのしやうしゆと、／もに御てをさゝけてむかへ参らせさせたまふへしたとひ／今こそさうかいのそこにしつませおはしますともつゐには／しうんの上にこそさし給はんすれ成仏とくたつしてさとりを／ひらかせ給ひなはしやはのこきやうにかへりてわりなく思召」（47ウ）れし人

ゝをも道ひき参らせ給はん事御うたかひあるへから／すあひかまへて〳〵よねんをこさせ給ふなとてしきりにかね／うちならしねんふつをすゝめ奉る三位中将たちまちにま／うねんをひるかへし西にむきかうしやうのねむふつ数百へん／となふるこゑのうちになみのそこへそ入給ふよ三ひやうゑい／しとう丸もつゝきているとねりたけさともいらんし*トけるを／ひしりとりとゝめていかに御ゆいこんをはたかへまいらせんと／は仕そけらうこそうたてけれとてせいしとゝめけれはちから／をよはす舟そこにふしまろひおめきさけふもことはりなり／ひしりもあまりにかなしくてすみそめの袖をしほりあへすし」（48オ）はしはうきもやあかり給ふとて見けれとも三人なからなかく／しつみてみえさりけり猶もなこりはおしけれと日も入あひに／なりつゝ海上もくらくなりけれはむなしきふねをこきもと／すおつる涙かいのしつくいつれれともみえかたしさてしも有／へきならねはひしりは高野の御山へ立かへりたけさとはやし／まへ参りけり心中のかなしさをしはかられてあはれなり／たけさとやしまへかへり参りて此よしを申けれはおほい／とのをはしめ奉りいとおしやこの人日比は都の事をのみのた／まひしかは京へそのほりておはすらんとおもひたれはさて／はさやうになりたまひつらん事よとてみな涙をそなか」（48ウ）されけるおとゝ新三位中将すけもり新少将ありもりたんこの／しゝうたゝふさ三人一しよにさしつとひこおほいとのにをく／れ奉りし後は此人をこそ高き山ふかき海ともたのみ奉り／しか日比一所にてこそいかにもならんと思ひしにところ〳〵に／てしなん事こそかなしけれとてみな袖をそしほられける／

しゆとくゐんを神とあかめ奉らるゝ事

さる程に都にはしゆとく院を神とあかめ奉るへしとてさん／ぬる保元のかつせんのありしおほいの御門かはらにやしろを／たて四月二日せんくうこそ（ママ）聞えし其時はしゆ上ようちに／わたらせ給しかは法皇の御はからひにてたいりにはしろし」（49オ）めされすとそ承りし同き四日かいけん有て元暦元年とそ申／

いけの大納言かまくらけかうの事

そのころいけの大なこんよりもりをかまくらへよひくたし奉／る大納言やへいさゑもんむねきよをめしてよりもりをかまく／らへくたれと云はいかゝ有へきとの給へは御くたり候へしと申／むねきよをもくしてくたれと云なりとの給ふ身には今／度の御ともをは仕り候はしと存候そのゆへは西国の御ありさま／あさまくし（ママ）くそんし候と申せはさらはなとよりもりか／とゝまりしときはかくとはいはさりけるそとあれはいや御と／とまりをあしとには候はすひやうゑのすけ殿もいのちおはし」（49ウ）候へはこそ世にもたゝれ候へあの人をあつかり奉りて候し／とき仰をもてかゝみまてうちをくりたてまつりて候し／事をつねはの給ひいたされ候なるまかりくたりて候はゝきやう／おうひきて物にてこそ候はんすれかつはとうれい共のかへり／きかん所こそ口おしくそんし候へむねきよはと尋られ候は／はいさゝかいたはる事の有て今度はさむし候はぬよしを／仰候へ

しと申大なこん扨はる〳〵のたひのそらにおもむく／をは見をくらんとは思はすやさ候かつせんのにはなとへた／に御出候はゝまさき仕るへく候これはくるしからしと存候／とてうしろ迄うちをくり奉りてむねきよ都へ上りけり四月」（５０オ）五日都を立ておなしき十九日大なこんかまくらへ入たまふと／聞えしかは兵衛のすけ大せいひきくしてさかみ川のはた迄／むかひにきたり給へりひやうゑのすけ大なこんにたい／めんしてまつむね清は参て候やらんとの給へはいさゝかしよ／らうの事候てとの給へはひやうゑのすけむねきよにあつ／けられて候し時事にふれてはうしをいたして候しかつねは／こひしう存し候つるよ今度はいかさまにも御ともそ（ママ）候はん（ママ）／すらんとまちかけて候へはさんし候はぬ事よとて世にほ／いなけにこそのたまひけれ大なこんかまくらへ入奉りてさま／〳〵にもてなし奉るもとちきやうし給ひける所はしさいな」（５０ウ）きうへよきところ十かしよすくりて奉らるむね清もくたりた／らはしよりやうともたはんとてくたし文ともよういせられた／りけれ共くたらさりけれはちからをよはすそのほかかまくら／中の大名小名にふれられけるよりともをよりともとおも／はんする人さはこの人をもてなし申せとの給ひけれはきん／〳〵のたくひれうらきんしうかすをつくしくらをき馬五百ひ／きにをよひけり大納言今度かまくらへくたりていのちたすか／るのみならすとくつきてこそのほられけれ／

小松三位中将のきたのかた出家の事

さる程にこまつ三位中将の北の方は大覚寺におはしける」（５１オ）か西国へうての下るたひには三位ちうしやうの上にいかなる／事をかきかんすらんとやすき心もしたまはすなみの上舟／の中のすまゐときけは風のふく時はいつくのなみにかゆ／られたまふらんひまなきいくさと聞ときはもし矢にもあ／たり給ふらんと心をつくしたまひけり日比は月に一とのをとつ／れもありつるにこのほとはかきたえたるこそおほつかなけれと／てさいとうを御つかひにてやしまへつかはさるやかてかへり／上りて申けるはさんぬる三月十五日のあかつきよ三ひやうゑ／いしとう丸を御ともにて八島をしのひつゝ御出有てあはの／くにゆうきのうらより御ふねにめして|てきのみなとへつかせお」（５１ウ）はしまして候けるかそれよりかうやへ御まいり候てたきくち入／道にたつねあはせ給てその後三の御山の御さんけいと／けさせたまひて後なちのをきにてしつませおはしまし候／ぬ是は御とも申て候けるたけさとかくわしくかたり申候つ／るこれもやかてかやうの事も申へく候つれ共まいるへからすと／おほせ候し程に参らぬよし申せとこそ申候つれと申け／れはきたのかたされはこそこの程風のたよりのをとつれ／もなかりつるはさやうにはかなくなり給ひたるにこそとてふし／まろひてそなけかれけるわか君姫君女はうたち一所にさ／しつとひこゑをあけてそなきかなしむめのとの女房申け」（５２オ）るはさのみ御なけき有へからすほん三位ちうしやう殿のやうにい／けとりにもせられさせ給はすさやうに高野にて御出家候／てくとくうけさせたまひそのゝち三の御山へ御まいり有てなち／のをきにて御心しつかにしつませおはしまして

候はんはなけきの／なかの御よろこひにてこそ候へいまは御ほたいをこそとふら／ひ参らせ給はめと申せはきたのかたまことにたれもさ／こそおもへとて年廿五にてさまをかへ三位中将のこしや／うせんしよそいのられけるさる程に七月廿五日にも／なりしかはやしまにはへいけの人さおもひ〳〵にさしつとひてわれら／か都を出し日はこそのけふにてこそありしかとてあさまし」（５２ウ）かりし事たかひにかたりいたしてなきぬわらひそせられける／同き二十九日にかまのくわんしやのりよりみかはのかみに／なり九郎くわんしやよしつねさゑもんのせうにそなさ／れけるおなしき八月三日つかひのせんしをかうふりおなしき／六日五位のせうにそなり給ふ八月十日あまりにもなりし／かはやしまはおきのうはかせ身にしみてはきかしたはも／露しけしいつしかいなはうちそよき木のはかつちるけしき物を／思はさらん人たにもくれゆく秋はかなしかるへしいはんやへ／いけの人さの心中をしはかられてあはれなりむかしは九／重の内にして春の花をもてあそひ今はやしまのいそにして」（５３オ）秋の月にかなしめり／

ふちとかつせんの事

さるほとに都より数万きのせいを西国へさしつかはさると／そ聞えける大将くむには三河のかみのりよりふくしやうくむに／はあしかゝの蔵人よしかぬさふらひ大将にはとひの二郎さね／ひらゑまの小四郎よしとき法しむしやには一ほん房しやう／けんとさはう正しゆむをさきとしてつかうそのせい二万／よき九月六日都をたちておなしき十一日にははりまのむろ／につきにけりさる程にへいけはこれをせめんとて大しやう／くんには新三位中将すけもりこまつの少しやうありもりたん」（５３ウ）このしゝうたゝふささふらひ大しやうにて源たいふの判官す／ゑさたつのはんくわんもりすみをさきとしてつかうそのせい／三千よきひせんの国にをしわたりてこしまにちんをそ取／たりける源太（ママ）はこのよしを聞こしまのむかひふちとのわたり／にちんをとるけんへい海をへたてゝさゝへたりけんしはふね／かなけれはわたさす日かすをゝくり同しき九月二十三日の／また朝平家のさふらひとも小船にとりのりけんしこゝを／わたせとあふきを上てまねきけりその夜に入てさゝきの／三郎もりつなそのへんよりおとこ一人たつねいたしこのへんに／船なら（ママ）てはわたしぬへき所やあるしらせよとてしろきこそ」（５４オ）てにさやまきそへてひまきてものにそしたりけるさる事候か／はせのやうなる所の候か月かしらには東になかれ月の末には／西になかれ候たうしはさためてにしにそ候らんこのへんに／はこの男ならてはしりたるものもすくなう候とそ申けるいさ／やさらはわたりてみんとてはたかになりてわたる程にこ／しわきたつ所もありひんひけのぬるゝ所もありふかき所を／はをよきてあさき所へわたりつくこれよりあなたしたいに／あさくそ候らんかたきのちんのちかつき候に御あやまちせ／させなと申せはさてはとてとつてかへりけるか思ふやうはあ／すはこゝをもりつなかせんちんにわたさんするに下らうの」（５４ウ）心にくさは又人にもやしらせんすらんとおもひけれはやとの／こな

たへよれとて物いはんするやうにてとてひきよせてくひ／かきゝりてすて、けりおなしき二十四日のたつのこくに平家／のさふらひ共又小舟にとりのりけんしこゝをわたせとまねき／けれはさゝきの三郎もりつなしけめゆひのひたゝれに／かし鳥おとしのよろひをき五まいかふとのをゝしめあししろ／のたちはき二十四さいたるきりうのやかしらたかにおひな／ししけとうの弓のま中とり馬にうちのりいへのこらうと／う二十よきをあひくして海に入てそわたしける大将軍／三河のかみこれをみ給ひてさゝきはものゝつきてくるふか」（55オ）川をわたす事はあれ共うみをわたすやうやあるとゝめよと／の給へはとひの二郎さねひら御ちやうにて候そかへらせたまへ／〳〵と申けれともみゝにもきゝいれすたゝわたしにわた／しけれとひの二郎さねひら三百よきにておなしくうち入て／そわたしける馬のくさわきむなかいつくしにいたるところ／もありくらつめをこす所もありふかきところをはすこし／をよかせてあさき所にうちあかるへいけのさふらひとも小舟／をこきうかへさん〳〵にいけれ共事ともせすむかひのちんへ／わたりつゝさゝきこしまのちんにとりあかりて大音あけてな／のりけるはうたの天皇に十一代の御へうゑいあふみのくにの」（55ウ）住人さゝきの三郎もりつな藤戸の渡（ママ）りのせんちんそやとなの／りたるされはこしまをさゝきにたひたる（ママ）時も天ちくしんた／むはしらす日本わかてうには川をわたすふしはあれとも海を／わたすせんれいなしきたいふしきのものなりとそさた有けるかう／つけのくにの住人わみの八郎ゆきしけへいけの舟にの／りうつりさぬきの国の住人賀部のけんしにむすとくむわ／みの八郎をとりてをさへくひかきゝりてをきあからむとしけ／るをわみかいとこにこはやしの大郎たかしけおちあひてかへの／源氏（ママ）にむすとくんてうみへ入こはやしからうとうにくろ／たの源太くまてをおろしてさかしけれはしゆもかたきも」（56オ）ともにとりつきてそあかりたるかへのけんしをはふなはたに／とておさへくひかきゝりてすてにけりしゆをはひきあけて／たすけたりこれをはしめとして大せいうち入てそわたしけ／るへいけのさふらひともやさきをそろへてさしつめひきつ／めいけれとも大せいおもてもふらすをめきさけひてわた／しけれはへいけかなはしとや思はれけんこしまのちへひきしりそく／源氏つゝいてさん〳〵にせめけれはへいけみな船に取のり／てさぬきのやしまへわたりけりけんしはこしまにちんを取／馬のいきをそやすめけるさるほとに十月十日あまりに／もなりしかは八島にはしほかせはけしくていそこすなみも」（56ウ）たかけれはけんしのふねもよせきたらすしやうかくの行かふ／事もまれなれは都のつてもきかまほしとき〳〵ゆき／うちふりていとゝきえ入心ちそせられける／

御けいの事

同しき十八日みやこには御けいをこなはれけり治承四年の御／けいはふくはらにてそありけるその時は平家さきの右大／将むねもりせつかのあくやにつかれたりしかふりのきゝは／より袖のかゝりたれかたをならふへしともみえすへいけ／の一もんのくきやうてん上人

みなしつ(ママ)しせられけりこんとは／とく大寺の内大しんしつていこうそせつかの大臣とは聞え」（57オ）たまふ九郎大夫判官しらはのやおひてくふせらるきそよりは／みやこなれたる人なれはゆうなるところもありしかともへい／けの人〻のえりくすにはなをおとれりとそ申けるとうこ／くさいこくのにんみむ百しやうらあるひはけんしにわつら／はされあるひは平家にななやまされて春はとうさくの思ひ／を忘れ秋はせいしゆのいとなみにもをよはすみな家〳〵を／すてさんりんにましはるうへはかゝる大れいをもいかてか思／召たゝせ給ふへきなれともさてしもあるへきならねはか／たのことくそとけられけるけんしつゝきてせめたらは／へいけはその年にほろふへかりしを大しやうくん三かはのかみ」（57ウ）をはしめ奉りてむろたかさこにやすらひてゆうくむゆう女／ともにあそひたはふれておはしけるうへはつはものすゝむに／をよはすたゝ国のついへたみのわつらひのみそありけるそ／のとしもくれて元暦も二年になりにけり／

（以下、六行分余白）　」（58オ）

平家物語巻第十一目録

一九郎大夫判官ゐんさんの事

一しよしやくわんへいの事

一両大将へいけついたうのためはつかうの事

一九郎たいふ判官いくさひやうちやうの事

一ちかいへ源氏かたへめしとらるゝ事

一さくらはたいちの事

一平家八島のたいりとうをやきはらはるゝ事

一やしまのいくさの事

一なすのよ一あふきをいる事　」（1オ）

一田内さゑもんのりよし召とらるゝ事

一判官とかち原とこうろんの事

一たんのうらかつせんの事

一せんていをはしめ平家めつはうの事

一平家の一そくいけとりの事

一ないし所御しゆらくならひにほうけんの事

一女ゐん御しゆつけの事

一おほいとのゝわかきみきられ給ふ事

一おほい殿ふしちうせられ同おほちをわたさるゝ事

（以下、一行分余白）　」（1ウ）

平家物語巻第十一

九郎大夫判官ゐんさんの事

元暦二年正月十日九郎たいふ判官よしつねゐんの御しよ／に参りて大蔵卿やすつねの朝臣をもて申されけるは平家／はしゆくうんつきて神明にもはなたれたてまつり君にもす／てられまいらせて都の外へいて波の上にたゝよふおち人と／なれりしかるをこの三か年かあひたえせめおとさすし／ておほくの国〳〵をふさけぬること口おし

く存候こんと／よしつねにをいてはきかいかうらいてんちくしんたんまても／平家のあらんかきりはせむへきよしをそ申されけるその丶ち」（2オ）院の御所を出くに〳〵のさふらいともにむかひてのたまひけ／るはよしつねはかまくら殿の御代官としてちよくせんを承り／平家ついたうのために西国へまかりむかふされはくかはこまの／ひつめのをよはん程舟はろかいのた丶んかきりはせめんする／なりこれはむやくの命そおしきさいしそかなしきと思ひ／あはんする人はこれよりみなかまくらへくたらるへしとそのたま／ひけるやしまにはひまゆくこまのあしはやくして正月もたち／二月にもなりぬ春のくさくれては秋の風おとろき秋／の風やんては又春の草となれりをくりむかつて（ママ）三年／にもはやくなりにけり」（2ウ）

しよしやくわんへいの事

おなしき十三日都には伊勢岩清水をはしめ奉りて廿二／社にくわんへいありこれはしんしほうけんないしところ三しゆ／のしんきことゆへなく都にかへし入たてまつるへき御きせい／のためとそおほえたる／

両大将平家ついたうのためはつかうの事

同き二月十四日源氏みかはのかみのりより七百よそうのひやう／せんにとりのりて津の国かんさきよりせんやうたうへは／つかうす九郎大夫判官よしつね二百よそうの舟にの／り東（ママ）国東川わたなへよりなんかい道におもむくわた」（3オ）なへかんさきりやう所にて此日ころそろへつる舟のともつ／なけふそとく折ふし北風木をおりいさこをあけて吹けれは／舟を出すにをよはすあまさへ大なみに舟ともたゝきわられて／しゆりのためにその日はとゝまる／

九郎大夫判官いくさひやうちやうの事

去程にわたなへには大名小名大将くんの御まへにてそも／〳〵今度船いくさのやうはいかゝ有へきとひやうちやうありなか／にも梶原申けるは舟にさかろを立候はゝや判官さかろとは／なにものそかち原申けるは馬はかけむとおもへはかけひか／うと思へはひき弓手へもめてへもまはしやすし舟は」（3ウ）まはしやすからねはともへにかちをたてさうにろをたてなら／へてへへもともへもをさせ候なり判官は門出あしゝいくさ／のならひ一ひきもひかしとやくそくしたるたにもあはひあし／けれはかたきにうしろを見するならひあるましてさやうに／かねてにけしたくをせんはなしかはよかるへき人の船には／さかさまろとかやもかへさまろも百ちやうも千ちやうもたて／よよしつねか船には一ちやうもたつへからすとそのたまひ／けるかち原申けるはよき大将と申は身をまたうして／かたきをほろほし候さやうにかくへき所をもひくへきと／ころをもしらぬをはいのしゝむしやとこそ申候へといへは」（4オ）よし〳〵よしつねはゐのしゝかの鹿をはしらすかたき／をはたゝひらせめにせめてかちたるそ心ちよきとの給へ／はかち原すへてこの殿につきていくさせしとそつふや／きけるそれよりして判官をそむき奉りけるとかや日も／やう〳〵くれけれは判官いまは舟ともせう〳〵つくろい／たつらんそ一しゆものせよやわかたうとていとなむやうに／て物の具ふ

ねへはこはせ馬とものせていまはとう〳〵／舟をいたせとの給へはかんとりともか申けるは此風は沖／はなをつよく候らん御あやまちせさせ給はんすと申／判官ゐんせんを承て平家ついたうのためにむかふよ」（4ウ）しつねか下知をそむくをのれらめこそてうてきよいかなる／野山のすゑ海川にてしぬるもせんせのしよこうなりそのきなら／はしやつはら一さいにころせとのたまへはうけ給てあふしう／のさとう三郎ひやうゑつきのふ同き四郎ひやうゑた／たのふ伊勢の三郎よしもりむさしはうへんけい已／下のつはものともかた手にやはけ御ちやうにて有そさて／をのれらは一ちやう舟をいたすましきかそのきならはいころさん／と云てむかひけれはこれら矢にあたりてしなんもおな／し事風つよくははせしに、しねやとて二百よそうの／船の中にたゝ五そうそ出したる五そうの舟と申は判」（5オ）官の舟たしろのくわんしやのふつなか舟ことうひやう／ゑさねともか（ママ）船さとうきやうたいか舟よとのかうないたゝ／としかふねなりけりたゝしたゝとしは舟のふきやうたる／によて也のこりの舟ともはあるひは風にをそれある／ひは梶原かめいにしたかひて出さす判官の給ひける／は今は平家のくんひやうとも四国の浦〳〵へさしむけ／たるらんそ舟ともにかかりたきてかたきにふな数はし見／すなよしつねか船を本舟としてかゝりをまほれとて／とりかちをもかちにはしりならへて行程にあまりに／風のつよきときは大つなおろしてひかせけり十六日の夜」（5ウ）のうしのこくにわたなへふくしまを出てをすに三日に渡る／所をたゝ三ときにあくる十七日のうのこくにはあはのかつ／浦につき給ふ／

ちかいへ源氏かたへめしとらるゝ事

夜のほの〳〵と明けるにみきはにあかはたさし上たりはん／くはんあはやこゝにもわれらかまうけはしてけるは舟／共ひらつけにつけてかたきのまとになしていらるなみ／きはちかくならは馬とも海へふなはたへひきつけ〳〵を／よかせよくらつめひたるほとにならはうちのつてかけよと／てみきは三ちやうはかりになりしかは舟とものりかたふ」（6オ）けて馬共海へをひおろしひきつけ〳〵をよかせてくら／つめひたるほと也しかはひた〳〵とうちのり〳〵くかへむ／きてをめいてかけられけり五そうの舟に馬五十ひきたて／られたりかたきも五十きはかりありけるかこれをみてかな／はしとやおもひけん二ちやうはかりさとひきてそのきにける／そのとき判官伊勢の三郎吉守をめして此やつはらは／けしかるものともとおほゆるそあの中にしかるへき者／やあるめしてまいれとの給へは承りて五十きはかりひ／かへたるかたきのなかへたゝ一きあゆませよせていかゝ申／たりけんよはひ四十はかりなる男のふしなはめのよろ」（6ウ）ひきたるをかふとをぬかせ弓はつさせのりたりける馬をは／下へにひかせてくして参る判官なにものそとのたまへは東（ママ）／国の住人はんさいのこんとう六ちかいへと申ものにて候な／りとそ申判官よし〳〵なにいへにてもあらはあれやかて／やしまのあんないしやにくしてゆけよしもりにあつくるそ／ものゝ具はしぬかすなにけてゆかはいころせとそのたまひ／けるその後ちかいへをめしてこゝ

をはいつくと云そと／とひたまへはかつうらと申よしつねかとへはしきたいな／まことのかつうら候もんしよはかつうらとかき候を下らう／ともか申やすきま、にかつらとは申也判官これ聞」（7オ）たまへやとのはらいくさしにきたるよしつねかかつ／浦に着めてたさよさてたうしやしまにせはいか程／かある千きはかりは候らんなとすくなきそさん候かやう／に五十き百き四国の浦〳〵へさしむけられ候あはの／みんふしけよしかちやくし田内さ衛門のりよし河野／をせめに三千きにていよの国へこえて候間やしまの／御せいはすきて候と申す／

さくらはたいちの事

さてこのへんに平家のうしろ矢いつへきものはなきかとの／給へはしけのうかおと、にさくらはのすけよしとをと申」（7ウ）ものこそ候へ判官さらはよしとををうつていくさ神のま／れとてさくらはかうちによせ給ふさくらはのしやうと／申は三方はぬま一方は堀なりけり堀のかたより源／氏の時をつくりてをしよせたれさくらはさん〳〵に／たゝかひてくきやうの馬をもちたりけれはうちのりて／そはなるぬまよりそ落にけるふせく所の家子らう／とう二十よ人かくひをとりよろこひのときをつくりて／いくさかみとそまつられける又ちかいへをめしてこゝより／八島へはいか程の道とそのたまへは二日ちと申さらは／かたきのしらぬさきによせよやとてかけあしになりて」（8オ）うつ程にはんとうはんさいうちすきてあはとさぬきの／さかひなる大さかこえにかゝりてよもすからこそこえ／給へあくる十八日のまたあしたさぬきの国ひけたといふ／所におりて馬のいきをそやすめ給ふにゐのやしらと／りたかまつのかうをうち過〳〵よせ給ふほとに京の／かたよりとおほしくてみのかさらうれうふみともせう／〳〵したゝめもちたる男二人ゆきつれたり判官これは／いつちよりいつかたへ行そ京よりやしまへ参り候八島／へはいつれへ参るそ都に御わたり候女はうの御かた／よりおほい殿へ参り候判官これもあはの国の御下」（8ウ）人にてあるかけふはしめてめされて参る程にいまた／ふあんないなりさらはわとのあんないしやせよかしとの／たまへはこれはたひ〳〵罷りくたりて候程に八島のあん／ないはよくしりて候と申判官なに事の御つかひに／てか有らんとの給へは下らうはたゝ御つかひ仕るはかり／にてこそ候へなに事とはいかてかしり候へきと申せはそれ／はさそあるらんとておはしけれはやゝありてほしい／ひくはせなとしてさるにてもなに事か有らんとと／ひたまへは別のやうは候へきたゝしかはしりにけん／しのおほううかひて候事を申され候にこそ候めれ」（9オ）さてこんとの源氏の大将をは誰とか聞一人は三河／のかうの殿一人は九郎判官殿とこそ承り候へさて／わとのは判官をは見しりたるかさ候はんくはんは／せいちさきおとこの色しろきかむかはのさしあらはれて／しるうまし〳〵候とのこそはんくはんとのにまいらさせ／給て候へと申せはとこなるやとのみやうかはかさんとの／たまひつゝその後文はへしやつしはれとてふみをはい／とりこのおとこをしはりてこなたへもかなたへもゆるか／ぬやうにはからへとの給

へはうけ給て大道より一ちやう／はかりひき入て大きなる松の木にしめつけてそとを」（9ウ）られける判官此文をひらいて見たまへけ（ママ）にも女はうの／文とおほえて九郎はきす（ママ）ゝどものにてさふらふなれは／かゝる大風大波をもきらひ候ましきそあひかまへて御／せいをちらさせたまはてよく〳〵御ようしん有へしなと／ありその外の事ともこまやかにそかゝれたるこれ見た／まへ人さこれこそよしつねに天のあたへたまへる文よ／かまくら殿に見せ申さんとてふかくおさめ給ふ判官ちか／いへをめして八島のしやうはいかにとゝひ給へはむけにあ／さまに候しほのひく時は馬のふとはらもつかり候はす／と申さらはしほひかたよりよせよやとてうちけるに」（10オ）

平家八島のたいりとうをやきはらはるゝ事

此は二月十八日とりのこくはかりの事なれはけあくるし／ほのかすみとともにしくらうたる中よりけんしうちむ／れてよせけるを平家は軍（ママ）のきはめにやこれを大勢とこ／そ見てけれ八島にはてんないさゑもんのりよし河野を／せめにいよの国へこえたりけるか河野をはうちもら／していへのこらうとう百よ人がくびをとりてやしまへ参ら／せたりけれはおほいとのの御宿所にてしつけんありもの／ともせうまうありとてさはきけるよく見てせうまう／にてはなかりけりあはやかたきのよせて候そやと申も」（10ウ）はてぬに源氏時をとゝつくりてをしよせたり大勢に／てそ有らんいそき御舟にめさるへしとてくかにをしあけ／たる五百よそうの舟どもにはかにをめきさけひてをし／おろす御しよの御舟には女院北のまんところ二位との／已下の女はうたちめされけりおほいとのふしは一船にその／り給ふ平大納言平中納言新中なこんしゆりの／たいふい下の人さもをの〳〵舟にのりてあるひは渚よ／り一ちやうはかり七八たんをしいたしみれは源氏百き／はかりにてをしよせたりその中にむしや五きすゝみ／たりまさきにすゝみたるは大将軍とみえたりあか」（11オ）ちのにしきのひたゝれにむらさきすそこのよろひを／き五まいかふとのをゝしめこかねつくりの太刀をはき二十／四さしたる大なかくろの矢かしらたかにおひなしぬりこ／めとうの弓のまなか取てくろき馬のふとうたくましき／にきんふくりんの鞍をきてそのりたりけるあふみふみ／はりたちあかり一ゐんの御つかひ大夫判官みなもとの／よしつねそや平家のかたに我とおもはん人〳〵はす／すめやむかへけんさんとそ沖のかたをにらまへてそひか／へたる平家のかたにはこれを聞大将軍にて有ける／そやいおとせやとてさしやにいる舟もありとをやにい」（11ウ）る船もあり又つゝきてなのるはたしろのくわんしやのふ／つなことうひやゑさねもとかねこの十郎いへたゝしやてい／よ一ちかのりいせの三郎よしもりとそなのつたるつゝひ／て名のるはことうひやうゑさねもとかしそくのしんひやう／ゑもときよあふしうのさとう三郎ひやうゑつきのふ／同き四郎ひやう衛たゝのふ江田の源三くまゐの太郎／武蔵坊弁慶なと云一人当千のつはもの共こゑ〳〵に／なのつてはせきたり平家の中にはこれを見てあ／れいとれやいとれとてあるひはとをやにいる船もあり／ひはさしやにいる舟もあり源氏のつはもの共是を事共」

（12オ）せす弓手になしてはいてとをりめてになしてはいてとを／るあけをいたる舟のかけを馬やすめ所としてをめきさけん／てせめたゝかふことうひやう衛さねもとはふるつはものにて／有けれはいそのいくさをばせずまつたいりへみたれ入手〳〵／に火をはなつてへんしのけふりとやきはらふ大臣殿さ／ふらひともにけんしのせいはいかほと有そとゝひ給へ／は七八十きにはよも過候はしあな心うやかみのすちを一／筋つゝわけて取ともこのせいにはたるましかりつる／物をなかにとりこめうたすしてあはてゝ舟にのつてたい／りをやかせつる事こそ口おしけれのと殿はおはせぬか」（12ウ）くかに上て一いくさしたまへかしとの給へは承り候とて越／中の二郎ひやう衛もりつきかつさの五郎ひやう衛たゝ／みつ悪七ひやう衛かけきよをさきとして五百よ人小／船ともにとりのつてやきはらひたるそう門の前の汀／にをしよせて陣をとる判官も八十よきやころによせて／ひかへたり平家のかたより越中の二郎ひやうゑ舟の／やかたにすゝみ出て大をんしやうを上けそも〳〵いせんに／なのり給ふとは聞つれとも海上はるかにへたつ（ママ）てその／けみやうしつみやう分明ならすけふのけんしの大将軍／はたれ人にてましますそ名のれやきかんとそ申たる」（13オ）伊勢の三郎よしもりあな事もをろかや清和天皇の／御すゑかまくら殿の御しやてい九郎判官殿そかしもり／つき大きにわらひてあなこと〳〵しさてはそれは／かねあき人かしよしうこさんなれさんぬる平治に父よし／ともはうたれぬ母ときはかふところにいたかれてやま／と山城にまよひありきしをこ入道殿尋出させ給てお／さなけれはふひんなりとてすてをかせ給ひたりしか／その後金あき人からうれうせおふせておくのかたへま／よひありきたりしこくはんしやにこそと申ければはいせ／の三郎したのねのやはらかなるまゝにさやうの事な」（13ウ）申そさてしらぬ事かわきみは一年北国となみ山の／かつせんにうちまけてこつしきしてのほりけるとこそき／けそれをはよもあらかはしなといひけれはようせうより／君の御をんあくまてかうふりたれはなにのふそくにてこつしき／をはすへきわきみこそ伊勢の国すゝかの山の山たちして世を／わたりけるとはきけそれをはよもあらかはし物をと云けれは／武蔵国の住人かねこの十郎いへたゝすゝみ出て申けるはさ／うこんむやくなりとのはら我も人も口のきゝたるまゝに／有事なき事いひあはんには夜は明日はくるゝともよも／つきし去年二月つの国一の谷にてはむさしさかみのわか」（14オ）とのはらの手なみはよく見たるものをといひもはてぬにゆん／てにひかへたりけるおとゝのよ一ちかのりよくひいてひやうと／いる盛次かよろひのむないたうらかく程にいさせてその後／ことはたゝかひはやみにけりのととの舟いくさはやうある／ものそとてわさとひたゝれをはきたまはすからまきそ／めの小袖にくろいとおとしのよろひをき五まいかふとのをゝし／めて三尺五すんのいかものつくりの太刀をはき二十四さし／たる大中くろの矢かしらたかにおひなししけとうの弓／のま中取て源氏の大将をいおとさんとそうかゝはれけ／る能登殿は聞えたる大ちからつよゆみせいひやうやつきは」（14ウ）やのて

き、にておはしけれは判官をその矢さきにかけ奉らしと／源氏のつはもの共やおもてにはせふさかりてそたゝかひける／能登殿大将のまへなるさうひやうとも見くるしのけやとてさし／つめひきつめさん〳〵にい給ふにくきやうのむしや五きいをと／されにけり中にも判官の身にもかへて思はれけるあふしうの／さとう三郎ひやう衛つきのふはくろかはおとしのよろひを／きあしけなる馬にのりて判官の御前にむすとふさかる／所をよろひのひきあはせうしろへつとい出されてまさか／さまにとうとおつ能登殿わらはにきくわう丸とて生年／十八さいになりけるかもえきのはらまきに三まいかふとの」（15オ）緒をしめてしら柄の大長刀のさやはつし舟よりとひお／りかたきかくひをとらんとするところに三郎ひやう衛かお／と、四郎ひやう衛たゝのふよひいてひやうといる是もは／らまきのひきあはせをくといぬかれていぬゐにこそま／ろひけれ能登殿わらはかくひかたきにとられしときくわう／をひさけて船にのり給ふきくわう丸かたきにくひはとられ／ねともいたてなりけれはつゐにはかなくなりにけりこのきく／わうと申はのとゝの、御あに越前の三位のわらはなりし／を三位うたれ給て後はかたみにもと思はれけるをうたせ／て世の中あちきなくや思はれけんその後はいくさもし」（15ウ）給はす船をは沖へをし出す判官は手おひたるつきのふをぢんの／うしろへかきいたさせて馬よりおりつきのふか手を取ていかに／〳〵とのたまひけれは今はかう候と申この世におもひをく事あ／らはよしつねにいひをけとの給ひけれはいきの下にて申けるは／なにか思ひをく事のなふては候へきまつあふしうにとゝめをき／候し老母を今一度見候はぬ事さてはきみの御世にわたら／せたまはんを見まいらせすしてさきたち奉り候事こそよ／みちのさはりともなりぬへく候へとこれをさいこのことはにて年／二十一と申し二月十八日のとりのこくにはつゐに八島のいそに／てはてにけり判官なのめならすなけき給てこのへんに僧や」（16オ）ある尋よとて手にてをわけてたつねさせられけるにちかき／所よりそう一人たつね出してそ参りたる判官かのそうにあひて／の給ひけるはたゝ今おはるておひのために一日きやうかきて／後世よくとふらひ給へとてこその春つの国一谷のひえとりこ／えをのりておとされたりし馬をこのそうにこそひかれけるはん／くはんあまりにこの馬をひさうして五位のせうになられし時／五位をはこの馬にゆつるなりとて大夫くろとそめされける／かやうにひさうせられけるをいまつぎのふかためにひかれけれは／諸国のさふらひ共これを見て此きみの御為にしなんする／いのちはさらにおしからすとかんしてみなよろひの袖をそ」（16ウ）ぬらしける

なすのよ一あふきをいる事

去程にこの日ころあはさぬきに平家をそむきて源氏をまち／けるものともかしこのほらこゝの谷よりはせ来りてくはゝ／るあひた源氏のせいほとなく三百よきになりにけりけふは／日暮ぬせうふはけつせしとて源平たかひにひきしりそく／所にをきのかたよりしんしやうにかさりたる小舟一そうな／きさへよす渚一ちやうはかりへた

て、舟をよこさまになす舟／の中よりあかきはかまにやなきの五きぬきたる女はうの／十七八に見えてまことにゆうなるかみなくれなゐのあふき」（17オ）のつまに日いたしたるを舟のせかいにはさみつゝくかへむけて／そまねきたる判官是を見給ひてことうひやう衛さねもと／をめしてあれはいかにとの給へはいよとにこそ候めれたゝしはか／り事とおほえて候大しやうくんさためて矢おもてにすゝみい／てゝけいせいをみんすらんそのときてたれをもていおとさんと／にや候らんさるにてもあふきをもいさせらるへく候かと申せは／いつへきものはなきかいかてか候はては候へきつよ弓せいひやう／いくらも候へともしもつけの国の住人なすの太郎すけたゝ（ママ）／か子によ一すけむねこそこひやうにては候へともてはきゝ／て候へせうこはあるかさん候かけ鳥をも三の矢に二はたやすく」（17ウ）仕り候と申さらはよ一めせとてめされけりよ一その比十八／九の男なりかちのあかちのにしきをもて大くひはたけて（ママ）／いろゑたるひたゝれにもよきにほひのよろひきてあし／しろのたちはき中くろのやその日のいくさにいすててせう〳〵／のこりたりけるにきりふにたかの羽はきませたるぬための／かふらをそさしそへたる二所とうの弓わきにはさみかふと／をはぬいてたかひほにかけ馬よりおりて判官の御前に／かしこまる判官いかによ一あのたてたるあふきのま中／いて人に見物せさせよかしとの給へはよ一かしこまて申け／るは此あふき仕りおふせん事はふちやういそんせん事は」（18オ）けつ定に候もしいそんして候物ならはなかくみかたのゆみやのき／すて候へししよの人におほせつけらるへうや候らんと申けれ／は判官いかりての給ひけるはよしつねは鎌倉殿の御代官と／して平家ついたうのうつてにまかりむかふたりされはよしつね／か下知をはそむくへからすそれにしさいを申さん人はすみやかに／本国へくたらるへしとの給ひけれはよ一かさねてしゝ申てはあし／かりなんとや思ひけんはつれんはしり候はすつかまつりてこそ／み候はめとて御前を立てつきけふちなる馬のくろくらをき／たるにうちのりてみきはのかたへしつかにあゆませて行はつは／もの共おさまに見をくりて一ちやう此わかものつかまつりつとおほ」（18ウ）え候と申けれは判官も見をくりてたのもしけに思はれたり渚／にうちのそみけれはやころすこしとをかりける間そこしもとを／あさなりけれは馬のふとはらひたる程にうち入て見れはそ／のあはひ六七たんはかりあるらんとみえたり折ふし風ふひて／舟ゆりあけゆりすへしけれはあふきもやつほさたまらすひ／らめきたりをきには平家一めんに舟をならへて見物すみ／きはにはみかたのつはものともくつはみをならへて是を見るいつ／れも〳〵はれならすといふ事なしよ一めをふさきなむきみやう／ちやうらい御方をまほらせおはします正八幡大ほさつ本国／の神明日くわうこんけんうつのみやの大明神ことには氏神」（19オ）なすのゆせん大ほさつはうちこ一人をは千きんにかへしとこそち／かひ給なれもしこれをいそんしぬる物ならはやかて弓きりおり／て海にしつみ大りうのけんそくとなりてなかくふしのあたとならん／する候今一度本国へむかへて御らんせんとおほし

めされ候はゝ／あふきのま中いさせ給へと心中にきせいしてめを見あけ／たれは風すこしやみてあふきはいよけにこそ見えたりけれは／よ一はこひやうといひなから十二そく二ふせありけるかふらをと／てつかひよひきしはしたもちてひやうとい る弓つよかりけれは／うらひゝく程になりわたりてあふきのかなめより上一すんは／かりをいてひをふつといきりたれはあふきこらへす三にさ」（１９ウ）けて空へ上り風に一もみ二もみもまれて海へさとそちり／たりけるみなくれなゐのあふきの夕日にかゝやきてなみに／うきてゆられけるを見てをきには平家舟はたをたゝ／いてをめきたりなきさには源氏のせいゑひらをたゝきて／ほめあひたりこれをかんするとおほしくて舟の内より大の／男のふしなはめのよろひきたるかしらえの大長刀のさやは／つしてあふきのさしきに出ておれこたれてそまふたりける／いせの三郎よ一かうしろへあゆませよせ御ちやうにてあるそに／くいやつか二のまひかな仕れといひけれはよ一あふきをた／にもはつさすなしかはいそんすへき今度はなかさしとりて」（２０オ）つかひよひいてひやうといるまふ男か首のほねひやうふつと／いぬかれてまひたふれにこそしたりけれ源氏のつはもの共は一／度にとゝわらひけり平家のかたにはめんほくなけれは音／もせすこれをほいなしとや思ひけん又小船一そう渚へよす／ゆみもて一人たてついて一人なきなたもちて一人三人くかへあか／りてけむしよせよとそまねきける判官是を見給てに／くきやつはらかな馬つよからんもの共むかふてかけちらせと／の給へは承りて武蔵の国の住人みをのやの四郎同き藤／七同き十郎かうつけの国の住人につたの四郎しなの、／国のちう人木曽のちうたあひともに五きつれてそかけたりける」（２０ウ）たてのかけよりぬりのにくろほろはいたる大やをよひきては／なちたりけれはまさきにすゝみたる三をのやの十郎か馬のひ／たりのむなかいつくしをはすのかくるゝはかりいこまれて馬／こらへすひやうふを返すやうにまろひけれはぬしはあしをこ／して馬のかしらにおりたてやかて太刀をぬいたりけりたて／のかけよりしらえの大長刀うちふりていてたりこのなきなたに／わか（ママ）うちにてはかなはしとや思ひけんかいふいてにけて／ゆくをなかんするかとみれはさはなくてにくるみをのや／の十郎かかふとのしころをつかまうつかまれしとそはし／りたる三度はつかみはづして四たひにあたる時しころ」（２１オ）をむすとつかうてしはしはたもてそ見えたりけるみを／のやもつよかりけりひかへたるかふとのしころふつとひき／りてみかたのせいの中へそにけ入たるをひてたちと、／まりて長刀をはひたりのわきにはさみ右の手にてひ／ききりたるかぶとのしころをさしあけ大をんあけて／なのりけるは日比はをとにも聞けんいまはめにも見るらん／きやうわらはへかいふなるかつさのあく七ひやう衛かけきよ／となのりすてゝそかへりける判官あく七ひやう衛ならはあ／ますなもらすなうちとれとてわれも〳〵とかけ出けり／中（ママ）にも平家是を見てかけきようたすなとて小舟」（２１ウ）五十そうはかりなきさへよすたてをめとりはにつきならへて／さん〳〵にいるみきはには源氏の馬のりむしや我さきとか／くる間

平家のかたのたてともさんをちらしたることくにかけ／なされてかなはしとや思ひけん又舟にとりのりて沖のかたへ／こきしりそく判官あまりにふかいりをしてせめ給ふ程に／弓をなみにとりおとしむちのさきにかけてとらん〳〵とそ／し給ひけるへいけのさふらひ共是を見て小船をこき／よせくまてもちたるものとし判官（ママ）のよろひかふとにか／けん〳〵としけるをいせの三郎よしもり武蔵はう／弁慶以下のつはもの共はせふさかりて打はらひ〳〵」（22オ）そたゝかひける渚よりはそのまゝすてゝあがらせ給へと／こゑ〳〵に申けれとも耳にも聞いれ給はすつゐにむち／にかけて取てあかり給ひけりつはもの共たとひ千きん／万きんとおほしめす御弓なりともいかてか御命にかへ／させ給ふへきと申せは判官またくゆみのおしきにては／なきそとよなのおしきにてて（ママ）こそあれをち八郎ためとも／なとのゆみならはわさともなみにうかへて見すへけれとも／よしつねかわうしやくたる弓をすてたらん程に平家の／ものとも是こそ源氏の大将九郎かゆみよつよくて／よはくてなとてうろうせられん事の心うさに命にかへて」（22ウ）とりたるなりとの給へはつはものともこの御ことはをそかん／しける今は日暮ぬせうふは明日たるへしとて源平とも／にひきしりそく平家はたうこくの中しとのたうしやうにこ／もられけれはけんしはむれ高松のさかひなるのはらにちん／をそ取たりけりへいけその夜けんしを夜うちにせんと／きせられたり大将くんには新中納言とももりのと／のかみのりつねさふらひ大将には越中の二郎ひやう衛／盛次みのゝ国の住人ゑみの二郎もりかたをさきと／して都合そのせい五百よきにてうつたゝれけり二／郎ひやう衛とゑみの二郎といくさの先ちんをあらそ」（23オ）そひてその夜のようちはなかりけりその夜よせたらまし（ママ）／かはけんしこと〳〵くほろふへかりしをようちなかりける／事はへいけのうんのきはめとそおほえたるけんしは去ぬ／る十六日のうしのこくにわたなへ福島をいてきのふかつ／うらのいくさけふたゝかひくらしたれは前後もしらすそや／すみけるそのなかに判官といせの三郎はかりそねさりける／判官たかき所にうちあかりて敵やよするととを見し／給へはよしもりは木かけにかくれゐてやはすをとり／かたきよせは馬のふとはらをいんとそまちかけたる／

田内さゑもんのりよしめしとらるゝ事」（23ウ）

あけけれは判官よしもりをめしててんないさゑもんか八／島にいくさありと聞てのほるらん行むかひてなにともこ／しらへてくして参れとのたまへはさ候はゝ御はたを給てむ／かひ候はんと申判官しらはた一なかれをそたひたりける／吉守しう〳〵十六きしらしやうそくにてむかふつはもの／とも是を見て三千よきか大しやういけとりにむかふ十六き／のしらしやうそく心えすとそわらひけるあんのことくのりよし／やしまにいくさはしまりぬと聞ていそきて参る程にい／よとさぬきのさかひにてそゆきあひたるのりよしあかは／たさしあけたり吉守は給たりつるしらはたをそさゝせ」（24オ）たるよしもりししやをたてゝ申けるは是は判官殿の御内／にいせの三郎吉守と申ものにて候いくさのれうにて／は候す大将に申へき事あり

て参りて候なりといはせけ／れはのりよししよのしんはかなふまし大将はかりをと／ていせの三郎をそよひ入たる吉守のりよしにあひて／いひけるはかつき、給ひつらん御へんのをちさくらはと／のは一昨日かつうらにてうたれ給ひぬきのふやしまにて／平家こと〳〵くほろひさせ給ひ候ぬなかにも新中納言／との能登殿こそゆうに見えさせ給しかのと、のは御／しかい御へんのち、みんふとのはいけとりにせられて吉」（２４ウ）守かあつかり申て候今夜よもすからあののりよしかさうな／く参りて一ちやううたれ参らせなんす何としてか此由を／しらせ候へきとなけかせたまひつるかいとおしさにつけ申／さんかためなりみんふとのを今一度見奉らんとや思ひ／給ふ又うちしにせんとや思ひ給ふといひけれはのりよし／父いけとられぬと聞て平家のうんのかたふきやううたかひ／なしさそあるらんと思ひけれはさうなく弓をはつしかふと／をぬきてかう人にこそなりにけれ大しやうのかやうになる上は／三千よきのつはもの共おめ〳〵といけとられけるは平家の／うんのきはめとそ見えし吉守かへり参りてこのよしを」（２５オ）申せはいせの三郎にあつけらるのこりのものともにいかにと／おほせらるれはたゝ御世をしろしめされんをきみとそんす／へしとそ申けるしかるへしとてめしくせらるさる程に九国／の住人をかたの三郎これよしうすきの二らうこれたか／五百よきにてはせ来り源氏のせいにくはゝる河野／の四郎みちのふ三百よきにてはせ参るくまの、別当／たんそうゆあさの七郎ひやう衛むねみつひやうせん五十よ／そうにて参りたりその後わたなへにありける大名小名も／参りたり八島のつはもの共是を見てゑにあはぬ花の／ちのあふひ六日のしやうふかなとそわらひける同き十九日に」（２５ウ）住吉のかんぬしつもりなかもちたいりにはせ参りて去十／六日のねのこくに住吉の第三のしんてんよりかふらやのこ／ゑ出て西をさしてなりて行候きとそうもんしたりけれは／法皇もきこしめしてなのめならす御かつかう有てやかて／いろ〳〵のへいはくをさゝけしな〳〵のしんほうをと、のへて／大明神の御ほうてんにそこめられける昔もしんくう／くわうくうしんらをせめ給ひし時いせ大神宮より／二しんのあらみさきをさしそへらる二しん舟のとも／へにたちいこくのいくさをたやすくたいらけさせ給て／後一神はしなの、国におはしますすはの大明神」（２６オ）これなり一神はつの国なにはにいはゝれ給ふ住吉の／大明神とそ申す上このせいけつ（ママ）を思召わすれすして／今又てうのをんてきをしりそけさせ給ふへきにやと／ありかたかりし御事なり／

判官と梶原とこうろんの事

去程に平家は九国の内へは入られすさぬきの八島をも／をひ出されなみはた（ママ）、よひ風にまかせていつちともなく／ゆられつゝいまたせんやうさいかいのしほちにまよひ給／ひけりおなしき二十四日もしあかまたんのうらにてやあは／せとそ聞えけるけんしの舟三千よそうへいけの舟」（２６ウ）は千よそう源氏のせいはかさなれは平家のせいは／おちそゆく平家の舟の中にはたうせんも有とかや去程に／九郎判官すはうのちにわたりてしやきやうみかわのかみ／と一手

になるけんしすてになかとのおいつにつくと聞え／しかは平家はたうこくひくしまにこそつき給へ爰に／判官とかちはらと又としいくさせんとする事ありけり／かち原判官に申けるは今度のいくさのせんちんを／はさふらひ共の中へおひ（ママ）候へと申せは判官の給ひけ／るはよしつねかなくこそ（ママ）よしつねこそせんちんよかち／原まさなや君は大将軍にてこそ御わたり候へはん」（27オ）くはんかまくら殿こそ大将くんよしつねはいくさのふ／きやうを承る身なれはたゝわとのはらとおなし事そと／その給ひけるかち原いくさのせんちんをしよまうしか／ねててんせいこのとのはさふらひのしうにはなりかた／しとつふやくを判官聞もあへたまはすかち原は日／本一のをこのものにてありけるやとの給ふかち原す／こしも所をもをかすこはいかにかけときはいまたかまくら／殿より外は二人のしうはもたぬものをといふ判官け／しき大きにかはりて見えられけれはいせの三郎吉／守さとう四郎ひやう衛たゝのふむさしはうへんけい」（27ウ）以下のつはものとも弓とりなをしやたはねをしくつろけて／かち原にめをかくかち原かかたには子とも三人太刀のつかをにき／りて判官をめにかけ奉るすてにかうとそ見えたりけるは／むく（ママ）はんの御馬にはみうらのすけよしすみとりつきかち原／か馬のくちにはとひの二郎とりつきてけふかく事いてき候／なはかたきのつよりにこそなり候はんすれかつはかまくら殿の／かへりきこしめされん所こそをんひんならす候へと申けれ／はけにもとや思はれけん判官しつまり給ふかち原も／すゝむにをよはすそれよりして判官御なかたかひたて／まつりてつゐにかまくら殿にさんけんしてそうたせ奉り」（28オ）けるとそうけたまはる／

たんのうらかつせんの事

同き二十四日のうのこくに源平たんの浦にてよせあは／すたかひに舟はたをたゝいてときをつくるもしあかまたん／の浦と申はたきりてはやきしほなれはけんしの舟は心／ならすしほにむかふてひきおとさる平家の舟はしほに／つれてそをふたりけるをきはしほのはやけれはみきは／についてかちはら行ちかふかたきの舟にくまでをがはと／なけかけてふし四人家の子らうとう十よ人かたきの舟／にのりうつりうちものゝきさきをならへてともよりへ」（28ウ）へせ（ママ）よりともへさん〳〵にきてまはりけるにおもてをむかふる／ものもなしその日のいくさのかうみやうはかち原一の筆に／そつけられける新中納言とももり立出ての給ひけるは／いくさは今日そかきりなるへきさふらひともあひかまへて／しりそく心あるへからすてんちくしんにもならひなきめいしやう／ようしといへ共うむのきはめはちからなしされ共なこそ／おしけれ東国のやつはらによはけ見ゆないつのように／命をおしむへきとの給へはひたの三郎さ衛もんのせう／かけつなすゝみいてゝやあさふらひ共この御ちやう承／れとそけちしける越中の二郎ひやうゑ盛次か申」（29オ）けるは中はんとうのやつはらは馬の上にてこそくちは／きゝ候とも船いくさにはいつかてうれん仕り候へきたゝ／うをの木にのほりたらんするやうにこそ候はんすらめ何程／の事か候へき一さにとりて海につけ候は

んとそ申けるか／つさの悪七ひやう衛か申けるは九郎はいろしろき男の／せいちいさかんなるむかはの二さしあらはれてことにしる／かんなるそ心こそたけくともその男いかはかりの事か有へき／ひつくんて海にしつめよとそ申ける新中納言おほい／とのゝ御前に参り給てけふはさふらひともこそ事から／よく見えて候へたゝ、ししけよしはかりこそ心のかはり」（２９ウ）て候やらんとみえ候へあはれきやつをめしいたしてきてす／て候ははやと申されけれはさるにてもあはのみんふめせと／てめされけるしけのうもくれんちのひたゝ（ママ）れにひおとし／のよろひきて御まへにかしこまるおほい殿なとしけよしか／けしきは日比にはにぬそ心のかはりたるかおくしたるかさ／ふらひ共にいくさのけちをもせよかしとの給へはなに事／によてかおくし候へきとむ返事にて御まへをまかり／たつ新中納言あはれきやつをきらはやとはおもは／れけれとも大臣とのゝゆるし給はねはちからをよはす／その後平家千よそうの舟を三手にわかたれけり」（３０オ）せんちんは山かのひやうとうしひてとを五百よそうにて／むかふ二ちんはまつらたう三百よそうにてつゝきたりこ／ちんは平家のきんたち二百よそうにのり給ふなかにも／せんちんに候けるひやうとうしひてとをはきうしう一／のつよ弓せいひやうなりわれにをとらぬつはもの五百よ人／をすくりて舟にたてさしつめひきつめさん〳〵にいける／にけんしの兵たてもたまらすよろひもかけすいとをさ／るけにもけんしふないくさにはてうれんせさりけり／いしらまされてこきしりそく平家のかたにはいくさか／ちぬとてせめつゝみをうてよろこひのときをつくるさ」（３０ウ）れとも源氏のかたにはくんにぬけてたゝかふものそお／ほかりけるなかにも三浦のわたの小太郎よしもりはふ／ねにはのらすくかにてとをやをいけるに一二ちやうかうちに／はめにかゝるものをいとゝめすと云事なししけめゆひの／ひたゝれにあかかはおとしのよろひをきかけなる馬／にのりてなかさし取てつかひはひいてひやうといる三／ちやうおもてをいわたし新中納言のうかみておはしけ／る舟のへにしらの、大やをいたて、和田あふきをあ／けてその矢返し給はらんとそまねきたる新中納言／このやをめしよせて見給ふにしらのにくゝいの羽にて」（３１オ）はきたるか十三そく二ふせのなかさしなりのまき一そくは／かりをきてわたの小太郎平のよしもりとうるしを／もてうかきつけたるいよの国の住人にゐのき四郎親（ママ）／家をめしてこのやいかへせとの給へは承て我弓にとて／つかひよひいてはなちこれも三ちやうよをいわたしてわた／かうしろ二たんはかりへたて、ひかへたる武蔵の国の住人／いしさかの小次郎か弓手のこかいなにくつまきせめてそ／いこみたる三浦の人さわたとのは我程とをやいる人は／なしと思ひ給へとはちかき給ひぬとわらはれてわたや／すからす思ひて馬よりとひおり小船にのりこきいたさせ」（３１ウ）て平家の舟のあたりををしまはしさしつめひきつめいける／にものともおほくいころさる又判官の舟のへに大きなるや／をいたて、わたがやうにその矢かへし給ふらんとそまね／きたる判官のやをめしよせて見給ふにしらのにつるの／もとしろにてはきたるか十

四そく二ふせありけるにゐのき／四郎たちはなのちかいへといふ(ママ)つけたり判官ことうひやう衛／さねもとをめしてこの矢いかへしつへきものみかたにはた／れかあるとの給へはつよ弓あまた候中にもかいけんしあ／さりのよ一とのこそ御わたり候と申さらはとてよ一をよ／はせらるあさり小舟にのりて出きたり判官いかにあさ」（３２オ）りとのこの矢いかへし給てんやとの給へはたまわりてみ候／はんとて我手につまよりて見てこれはのもよはく候／うへやつかもすこしみしかく候よしなりかわたくしのやを／もて仕りけさんに入候はんとてぬりのにくろほろは／きたる十五そくの中さしをぬりこめとうの弓にとて／つかひよひいてちやう(ママ)とはなちたる四ちやうあまりをつとい／わたして新中納言の舟のへにすゝみてたちたりけるに／ゐのき四郎かうちかふとをうしろへいぬかれて舟へさか／さまにそまろひいる／

せんていをはしめ平家めつはうの事」（３２ウ）

去程にあはのみんふ重能はこの日比(ママ)にちうをいたしたりけ／るかちやくし田内さゑもんた(ママ)ゝよし源氏にいけとられて／をんあいの道のかなしさはこをみんとや思ひけんたちまち／に心かはりしてんけりみかたのあかはたあかしるしきりす／てかなくりすてしらはたしろしるしになりて源氏のせい／にそくはゝりけるおほいとのも新中納言もねたいかれ／をきるへかりつる物をとこうくわいし給へとかひそなきこゝ／に白雲一むらこくうに見えけるかくもにてはなかりけりぬ／しなきしらはた一なかれまひあかりまひさかりけんしの舟／にさほつけのをのつく程に見えて又空へそあかりける」（３３オ）源氏のつはもの共かほとに八幡大ほさつ御やうかうあらん／うへはなとかいくさにかたさるへきといさみをなしてそたゝか／ひけるその後いるかと云うを三千はかりはみてとをりけ／りおほい殿都よりめしくせられけるこはかせはるのふを／めしているかはつねにおほけれとかゝるためしはいまた／なしきとうらなひ申へきよしおほせられけれはかんかへ申／ていはくこのうをはみとをり候はゝけんしめつはうし候へし／はみかへり候ははみかたのいくさあやうく候と申もはて／すいるかは平家の船のしたをこと〳〵くこそはみかへ／れさてこそおほいとのも新中納言もけふをさいこと」（３３ウ）はしられけれ平家はかりことにたうせんにはさう人をのせ／ひやうせんにはきんたちのり給ふけんしさためてたうせん／をせめんすらんその時ひやうせんをもて中にとりこめて／うたんときせられたりけれともあはのみんふしけよし／けちしてたうせんをないそやたうなによき人ものらぬ／そひやうせんにかゝれとをしへけれはたうせんをはいすて／てひやうせんをなかにとりこめてさん〳〵にせめけれは／したくさういしてんけり去程に四国九国のつはもの共／皆平家をそむいて源氏にこそつきにけれかのうら／によらんとして(ママ)給へはなみたかくしてかなひかたしつゝ(ママ)の」（３４オ）きしにあからんとし給へは源氏矢さきをそろへて待／かけたり日比は身にかはらん命を奉らんとちきりし／もの共君にむかひて弓をひきしうにたいしてたちを／ぬくすいしゆかんとり共ふなそこにいふせられきりふせら

／れおめきさけふ事かすしらす源平の国のあらそひけふを／かきりとそ見えし新中納言御所の御船に参り給ひて見／くるしきものとも海に入させみつからはきのごひなとし給／ひけれは女はうたちいくさはいかにとゝひたまへはかうにこそ候／えけふよりは誰も〳〵めつらしきあつまおとこ御らんせら／れんすらんとうちわらひたまへは女はうたちかくなりぬる世」（３４ウ）に何の御たはふれそやとておめきかなしみ給ひけり二位殿／われ女なりともかたきの手にはわたるましきとてにふい／ろのきぬにねりはかまのすそたかうはさみせんていをいた／き奉りおひにて二ところゆひつけ奉りこれは後の世ま／てもたからなるへしとてしんしをはわきにはさみほうけん／をこしにさしつゝ今は君の御供に参るなりをの〳〵きみ／の御めくみにしたかひまいらせんと思ひたまはん人〻は／いそき参りたまふへしとてふなはたへこそ出られけれせんて／いは今年八さいにならせ給ひけるか御年のほとよりも／はるかにおとなしく御くしくろ〳〵として御せなかすこ」（３５オ）しすきさせ給ふ程なりこれはいつちへそあゆ(ママ)ませとおほ／せける御かたことのいまたをはらせ給さるにこの世は物／うきさかひにてさふらへは西方のしやうとへ参らせ給ふ／へしとてうみにそとひ入給ひけるかなしきかなやむし／やうの春の風花の御すかたをさそひ奉りなさけなきか／なやふんたんのあらきなみかたしけなくもきよくたい／をしつめたてまつるてんをはちやうせいとなつけもんをは／ふらうとことよせしにいまた十さいにたにもみたせた／まはてくもの上のりうくたりてたちまちにかいていのう／をとそならせ給ふ大ほんかうたいのかくのうへしやくたい」（３５ウ）きけんの宮の内昔はくわいもんきよくろうにきうそくを／なひかしいまは舟のうちなみの下に御いのちをほろほし／給ふそあはれなる／

平家の一そくいけとりの事

女院も海へいらせたまひたりけるをわたなへの源五／むまのせうつかうと申ものくまてをおろして御くし／にうちまとひとりあけ奉る女院たちのちかくとらはれ／ておはしましけるかあなあさましそれは女院にてわ／たらせおはします物をと申されけれはをそれをなし／てしりそきぬ御いのしほのれさせおはしましたり」（３６オ）けれはよろひからひつよりしろき小袖一かさね取出／してめしかへさせ奉りて御所の御船へ入参らせけり／大納言のすけ殿もないし所の御からひつをとりて海／にいらんとし給ひけるかはかまのすそをふなはたにい／つけられてとらはれたまひにけりつはものともないし／所のいりておはしますひつのしやうをねちきりてふた／をひらかんとしけれはたちまちにめくれはなちたる平／大納言のとらはれておはしけるかあれはないしところとて／神にてわたらせ給ふそほんふはちかつき参らせぬ事／なりとの給ひけれは九郎判官さる事ありとて兵を」（３６ウ）のけときたゝのきやうに申てもとのことくにおさめ奉りて／大なこんにあつけ申されけり代末(ママ)なれともかくれいけん／あらたにましすすこ(ママ)めてたけれかとわきの中納言／たゝも(ママ)りのきやうはしやていしゆりのたいふつねもりと／てを取くみよろ

ひのうへにいかりをかけてうみにそしつ／み給ひける新三位中将すけもり小松の少将ありも／りいとこにさまのかみ行盛三人ともにてをとりあはせ／一所にそしつまれける人さはかくなり行給へともおほ／い殿はさるへきけしきもみえ給はすふなはたに立て四／方を見はるかしてそおはしける平家のさふらひ共」（３７オ）あまりの心うさに御そはをはしりとをるやうにて海へ／つき入奉る御子ゑもんのかみつゝきて入給ふゑもんの／かみしつまは我もしつまんと思はれけりゑもんのかみ／はおほい殿しつみ給はゝ我もしつまんとたかひにしつ／みもやらてたゝよひ給ひけるをいせの三郎吉守／小船をこきよせくまてをおろしてまつゑもんのかみ／をひきあけ奉るおほい殿はいとゝしつむへきけしき／もなくておはしけるをおなしくくまてにてとりあけ／奉るひたの三郎さゑもんかけつねなにものなれは／我君をはとり奉るそとて大たちぬきてうてかゝる」（３７ウ）伊勢の三郎かわらは中にへたゝりて三郎さゑもんに／うちあひたりかけつねかうつ太刀にわらはかくひをうちおと／さるやかていせの三郎にすきもあらせすうちてかゝるすてに／あやうく見えたるにならひの舟にたちたりけるほりのや／太郎よひいてひやうといる三郎さゑもんかうちかふとし／たゝかにいさせてひるむところにほりいせか舟にのり移り／て三郎さ衛もんにむすとくむほりからうとうおちあい／てかけつねかくひをはとりてけりおほいとのさしもふひん／にし給ひつるかけつねかめのまへにてかくなり行を見給／ふにそいとせんかたなうこそ思はれけれのとのかみのり」（３８オ）つねはけふをさいことおもはれけれはあかちのにしきの／ひたたれにくろいとおとしのよろひをき五まひかふ／との緒をしめてかたてには三尺八すんの大たちをぬき／かたてにはしらゑの長刀のさやはつしてかたきの舟／にのりうつり〳〵へよりともへきりてまはりともより／へへなきをきよりいそにつきいそよりをきにうつ／りさん〳〵にふるまひ給ふにおもてをむかふるものそ／なき新中納言ししやをたてゝいたうつみなつくり給ひ／そしやつはらよきかたきにもあらすとの給へは大将」（３８ウ）にくめとこそあるなれいてさらはくまんとて源氏の舟／をつくして大将をたつね給ふ程にあやまたす判官／の舟にのりうつり給ふ能登殿くまんとかゝられけ／れは判官せんなしとや思はれけん二しやうはかりへた／てたりけるみかたの舟につんとゝひて乗うつり給ふ／能登殿はやわさやをとりておはしけんつゝきても／のりたまはすこれ程うんつきぬる上は甲をぬきて／海へなけ入こくそくきりすてかなくりすてゝとうはかり／きて大てをひろけてそたゝれたる源氏のかたに／われと思はんものともはよりてのりつねいけとりて」（３９オ）かまくらへくしてゆき頼朝にあひて物一ことはいはん／するによれやよれとの給へともあたりをはらひてよ／るものなし爰にとさの国の住人あきのかうをちきやう／しけるあきの大りやうすけみつか子に太郎さねみつ二／郎としみつとてともに三十人かちからもたるもの有らう／とうの中にもしうにもをとらぬ大ちから一人ありけりかれ／らかいひけるはのと殿たとひたけ十ちやうのおににてもお／はしませ我ら三人よりたら

んするになにとかくみ奉／らさるへきとてうち物をはさやにおさめすきもあらせ／すのとゝのによりあひたり能登殿これを見給ひて」（39ウ）にくいやつはらかなとてまさきにすゝみたるらうとうをは／すそをあはせて海へたふとけ入らるあきの太郎を弓／手のわきに二郎をはめてのわきにかいはさみて二しめ三／しめしめられけるかいささらはおのれらしての山ちのと／もせよとて年十六と申にはうみへそ飛入給ひけ／る新中納言とももりはさふらひいかのさゑもんのせう／家仲をめして今はみるへき事はみなみつ日比のや／くそくはいかにとの給へはそんち仕りて候とてしうに／もをもよろひ二りやうきせ奉り我身も二りやうかさねて／御手をとりくみうみへそとひ入にける中納言のさふらひ」（40オ）二十よ人のこりたりけるも一しよへそしつみける／

平家の一そくいけとりの事

むなしき舟はなみにひかれ風にまかせていつちともなく／ゆられゆくあかはたあかしるしきりすてたれは立田川／にあらねとも紅葉はなかるといひつへし渚さによるなみ／もうすくれなゐにそなりにけるいけとりの人さはさきの／内大臣むねもり平大納言ときたゝさ衛もんのかみきよ／むね内蔵のかみのふもとさぬきのちうしやうとき（ママ）さね／には僧（ママ）には二位そうつせんしんちうなこんのりつしちう／ちうくはいほつせう寺のしゆきやうのうはんきやうしゆ（ママ）」（40ウ）はうのあちやりゆうゑんなとをはしめとして都合三十／よ人とそ聞えし女房たちにはかたしけなくもこくも／けんれいもんゐん北の政所らうの御かたそつのすけと／の大納言のすけとのちふきやうのつほね已下四十三人／なりさふらひには源大夫判官すゑさたしゆめの判官／もりくにつの判官もりすみきちないさ衛もんすゑやす／藤ないひやうゑすゑくにをさきとして以上百六十三人／としるせり元暦二年の春の暮いかなる年月なりけれは／一しんかいていにしつみつゝ百くわんなみの上にうかふらんこ／くも女くはんはとうゐせいしうのてにいたりしんか」（41オ）けいしやうはなんはんほくてきのとらはれ人となりて／二たひきうりへかへり給ひしにあるひはしゆはいしんか／にしきをきてこきやうにかへりけん事をうらやみあるひ／はわうせうくんかゑひすのてにわたされてここくへを／もむきけんうらみまてもいまこそ思ひしられたれ／

ないし所御しゆらくならひにほうけんの事

同き四月三日西国よりのはや馬都につく源八ひろつな／とそ聞えし法皇御つほにめしてちきにきこしめ／す平家のいけとりともならひにしんしないし所入まいら／するよしそうもんしたりけれは御かんのあまりにやかて」（41ウ）ひやうゑのせうにそめし仰せける法皇なを御ふしんをさん／せられむかためにそう判官のふもりを西国へくたさるのふ／もりしゆくしよにもかへらすれうの御馬を給てむちを／あけてはせくたる同き十四日にかへり参りて事の／よしをそ申ける十六日に九郎判官平家のいけとり／あひくしてはりまのあかしにつき給ふその夜も月こと／にさえておもしろかりけれは人さかかるなけきのなか／なれとも月をなかめてなくさみ給ふ中にも平大

納言／の北のかたそつのすけ殿なく〳〵かくそよまれける／
なかむれはぬるゝたもとにやとりけり月よくもゐの」（４２オ）
物かたりせよ
判官おなしあつまの人さ（ママ）は申なからなさけ／をしれる人なれはゆうにたへなる心ちして身にしみてそ／おもはれける同き二十五日にないし所鳥羽へつかせ給ふ／御むかへの人さ公卿には中御門中納言むねいへか／てのこうちの中納言つねふさ土御門のさいしやうちう／しやうみちちか殿上人にはたかくらの中将やすみちゑなみ／のちうしやう公有たしまの少将のりよしこんの左中へ／むかねみつ蔵人さ衛もんのこむのすけ親正なとそ参ら／れけるさいこくより御供のふしには九郎大夫判官よし／つねあしかゝの蔵人よしかぬさふらひにはとひの二郎さね」（４２ウ）ひらさ衛門のせうありたねとそ聞えし神しと申はしる／しの御はこ二位殿わきにはさみて海に入たりしかなみに／うかみておはしましけるをかたをかの太郎ちかつねとり／あけ奉るほうけんはなかくうせてそなかりけるそも〳〵此／ほうけんと申は昔神代よりつたはれる三のれいけん／ありあまのはやきりのけん十つかのけむくさなきのけ／むこれなりあまのはやきりのけむはおはりの国あつた／のやしろにこめられぬ十つかのけむは大和の国ふるのや／しろにありとかやなかにもくさなきのけんはたいりにと／とまりて代さの御門の御たから今のほうけん是也」（４３オ）このくさなきのけんと申は昔そさのをのみことといつも／の国へなかされ給し時そかのさとなつきのむらといふ所に／宮つくりありしにそのところに八いろのくもおほへりみ／こと是を御らんして／
八雲たついつもやへかきつまこめにやへかきつくるその／やへかきを
これを三十一しのはしめとしてくにをいつも／といへりとそれよりしてはしまれりその国のひのかは／上の山に大しやありおかしらともに八あり八のみね八の谷／にはひはひこれりせなかにはこけむしてもろ〳〵の木／おひたりまなこは日月のひかりのことし年〳〵に人をの」（４３ウ）む親のまるゝものは子かなしみ子のまるゝものはおやかな／しむそむなんそんほくにこくするこゑたえさりけりみ／こと是をあはれみて大しやをほろほさんために八の舟／にさけをたゝへてたかきゆかをかきみことの御さいあ／ひのいなたひめと申しんしよをしやうそかせてゆかのうへ／にたてられたりしかはそのかけ八のふねなるさけにうつ／ろふ大しや是をのまんとあくまてさけをのみてゑいふ／せるそのときみことはき給へるつるきをぬきて大／しやをつた〳〵にこそきり給へ八のおの中にお一つきれ／さりけりこれをわりて見給へは一のつるきありとりて」（４４オ）天照太神に奉らせたまへはこれは我たかまのはらにてお／としたりしつるきなりとてその後御なかなをらせ給ひ／けり此つるきしやの尾の中にありし程はその所に／くろくものつねにおほふて雨ふりけれはあまのむらくも／のけんとそつけられける天そんあまくたらせ給ひし／時三しゆの神きゆつり給へるその一なり第十代の御／門しゆしん天皇の御ときれいゐにをそれ参らせ給／ひてさらにつるきをつく

りあらため給ひてかのつる／きをはいせ大神宮へ返し入参らせさせ給ひけり第／十二代の御門けいかうてんわうの御時とういおほくを」（44ウ）こりて関の東おたしからさりしかは御門のたい二のみ／こやまとたけの御こととて御心もかうに御さいかくもゆ／ゆしくわたらせ給ひしをとういせいはつのためにさしむ／け参らせさせ給ひけりみことまつ伊勢太神宮へ参らせ／たまひて御いもうといつきのみやしててんわうのちよく／めいを承りとういせいはつのためにまかりむかふよし申させ／給ひたりしかはてんせう太神つゝしんておこたる事／なかれとてあまのむらくものけんをみことにさつけ参らせ／させたまひけりみことするかの国まてくたらせ給ひ／たりしにかの国のけうとらみことをあやまちたて」（45オ）まつらんはかり事にこの国さは鹿おほくはんへるから／せらるへきよしを申みこと野へいてたまひたりけれは／四方の草に火をかけたりみことはきたまへるつるきを／ぬきてうちふりたまへは四方のくさ一里まてこそなかれ／たれおりふし風いそくのかたへふきおほひけうとおほ／くやけしにぬそれよりしてぞくさなきのけんとはなつ／けられけるかくて三か年にとういをこと〳〵くせめした／かへいそくらをいけとりて都へかへりのほらせ給ひ／けるかおわりの国にて御やまひつかせたまひしかはいけ／とりのけうとらをは御子たけひこのみことして御門へ」（45ウ）たてまつらせ給ひ御身はあつたのみやにしてつゐにかくれさ／せおはしますやかてこのつるきをはかのやしろにこめ／奉りけり御たましゐはしろき鳥となりて西へむき／てとひゆきけるかさぬきの国にいはゝれ給ふしらとり／の大明神これなりてんち天皇の御宇しゆてう元／年にしんたんよりしやもむたうきやうと申もの我／朝にわたりてこのつるきをぬすみきたうせんとしけ／るになみ風あらくして舟すてにうちかへさんとし／けれは我ほんいとけかたしとて返てかのやしろ／におさめ奉るとそ承る上こにはかくこそゆゝしく」（46オ）おはしましに今は平家とりて都をいて二位殿こ／しにさして海にしつみたまひし後は龍神やとりて／りうくうにふかくおさめたりけんつゐにしつみて二たひ／見えさりけるこそあさましけれ二宮も都へいらせ給／ふこの二宮こそ都（ママ）をわたらせ給はゝ御くらひにもつか／せ給ふへかりしかとも平家まうけの君にし参らせ／むとて西国へくたし奉りぬされともしさいなくかへりの／ほらせ給ひけりならはぬたひのそらにおもむかせ給／ひてやせくろませたまひたりけれ共へちの御ことなか／りけれは御ほき七てうの女院も御めのとちみやうゐん」（46ウ）のさいしやうなともいかはかりかうれしく思されけんやか／て女院の御所七てうはうしやうとのへ入参らせられ／にけりおなしき二十六日平家のいけとりとも都へ入た／まふとそ聞えけるおほいとのゝ御くるまつかうまつり／けるは年来めしつかはれし三郎丸とそ聞えしお／ほいとのにや二郎まろ三郎まろとて二人めしつか／はれけるかや二郎まろ一とせ木曽か車やりそんし／て法師になされ行かたしらすなりにけり三郎まろ／はかり男になりて西の京なるところに候けるかおほい／とのけふ都へ入給ふと聞えしかは鳥羽へくたりて判」（47オ）

官の御前に参りこれはおほいとの、年来めしつかは／れ候し三郎まろと申ものにて候しかるへく候は、御／ゆるされをかうふりておほい殿のさいこの御ともをつかう／まつり候はんと申けれは判官とう〳〵とてそゆるさ／れけるおほい殿にはしやうえをきせたてまつり車／のさうのもの見をあけせんこのすたれをあけたりけり／ふしろ（ママ）とつくるまにのり給ふ／御子ゑもんのかみはなみたに／むせひてうつふしておはしけれはおほい殿は四方を見ま／はして思ひ入たるけしきもなしときたゝのきやうの車／も同くやりつゝけたり三郎まろはなみたにむせひて」（47ウ）行さきもさらにおほえすくらのかみのふもともとうしやして／入給ふへかりしにしよらうの心ちとてかんとうよりいり／給ふさぬきの中将ときさねはきすをかうふられたり／けれはこれも別の道よりいられけり平家のいけとりけふ／都へいり給ふときこえしかはけふ中ならひにきんけふ／よりきたりあつまる上下諸人とはの北の門より東／寺の南の門まて所もなくつゝきてくるまはなかえ／をめくらさす人はかへり見る事をえすさんぬる治承／養和のききんゑきれいに人たねはみなつきぬと／思ひしになをのこりはおほかりけり仏の御ちゑならて」（48オ）はかすへつくすへきやうそなきさふらひにはしゆめの／判官盛国をはしめとして百六十三人にしろきひた／たれをきせくらのまへわにしめつけ〳〵わたしけり／六条を東へわたしたてまつるくわうこんにをよひて／判官のしゆくしよ六てうほり川へ入奉るしゆこのふしに／はかたをかの太郎親経いせの三郎吉守えたの源／三源八兵衛なとそ候けるものまいらせたりけれとも御／はしをたにもとりあけ給はす夜に入けれはともし／やうそくをもくつろけ給はすさてしも有へきならね／はおほい殿よりふし給ひけるゑもんのかみも御そはちか」（48ウ）くふしたまひたりけれはおほい殿しやうゑの袖をうち／かけ参らせ給ひけりしゆこのふしともこれを見奉り／てあはれをんあいのみち程かなしかりける事あらし／あの御そてをうちかけ参らせ給ひたらは何程の事／かあるへきとてたけきものゝふなれともみな袖をそ／ぬらしける同き二十八日にかまくらのひやう衛のすけし／ゆ二位したまひけりさんぬる治承にしゆ下の五位よ／り正下の四位にうつり給ひきをつかいとて二かいをあ／かるたに有かたきにこれはすてに三かいをこえたまへ／り三位こそし給ふへかりしかともよりまさのきやう」（49オ）のれいをいみてなりいまはかまくらの源二位殿とそ／申けるその夜ないし所大しやうくはんのちやうより／むめいてんへ入給ふやかてきやうかうなりて三か夜御／かくらありうこんのしやうけんおほいのよしかたへつち／よくを承りてゆたて宮人と云かくらのひきよくをつ／かうまつりけるそありかたきこのきよくはよしかたかそふ八／てうの判官すけときか外はしれる人なしあまりにひ／してしそくちかかたにもさつけすほり川の天皇御さ／いゐの時さつけ奉りてしにゝけりあるときないし所／の御かくらありしに主上御れんの中にてひやう」（49ウ）しをとらせ給ひつゝちかかたにさつけさせおはしまし／けり親にならはん事こそよのつねなるにいやしき身／なし子にてかゝるめんほくをほとこしけるこ

そめてた／けれみちをたゝしとおほしめしたる君の御心さしのかた／しけなさたくひなくそきこえけるそも〳〵ないし所と／申は昔天せう太神あまの岩戸をとちふさかせ給ひ／て天下こと〳〵くとこやみとなりたりしに百万の神た／ち岩戸の前にあつまりてかくらをせさせ給ひしに天／せう太神これにやめてさせ給ひけんいはとを少あけ／て御らんせられけるに八百万の神たちのおもての」（５０オ）しろう見えけれはかみたちよろこひてあなおもてし／ろやとの給ひけりおもしろしと申こととのはこのとき／よりそはしまれるそのときたちからをの神と申大ちか／らのかみよりていはとをかはとをしひらき給ひし後は／又はたてられす日月せいしゆくあらはれたまひてんか／こと〳〵くあきらかなり天照太神のたまはく我しそ／むたらん人はこのかゝみを見てわれをみるかことくに思／ひ給へとて三のかゝみに御すかたをいうつさせたまひ／けりこの三の御かゝみと申は一つはきのくにゝわたらせ／たまふ日せんの宮これなり一つはたいりにとゝまりて」（５０ウ）百王の御まほりとならせ給ふないし所の御事なりかい／くは天皇の御宇まてはてんをおなしくしゆかをな／らへてすませ給ひしか第十代の御門しゆしん天／わうの御ときへちのてんにうつし奉らる中比よりそ／うむめいてんにはわたらせ給ふせんと百六十年の後／むらかみの天わうの御宇天徳三年九月二十三日の／夜たいりせうまう有ひもとは大たいの中の衛さひやう／ゑのちんなりけれはないしところのわたらせ給ふそむめい／てんもちかかりけりその時のくわんはくをのゝ宮とのいそ／きはせ参りて見参らせたまへは女房夜半の事なれ」（５１オ）はおりふしないし所に女くわんもさふらひあはすしてな／いし所をいたし奉る人もなし関白殿こはいかかしたてま／つるへきとさはかせ給ひけるにしんきやううんめいてんを／とひいてさせ給ひて南殿のさくらのえたとひそうつ／らせ給ひけるくわうみやうかくやくとしてあさ日の山の／はをいてたるかことしそのとき左大臣殿かうへをちにつけ／給ひて百王おうこの御ちかひあらたまらせたまはすは／しんきやうさねよりかそでへうつらせおはしませと申／給ひたりけれはたちまちひたりの御袖にとひそうつ／らせ給ひけるをのゝみやとのすいきのなみたをなかし」（５１ウ）つゝみつから御さき申させ給て主上の御さいしよ大し／やうくわんのあひたところへ入参らせ給ふいにしへは／かくこそめてたくおはしましけれ今は世の末になりて／ないしところもとひうつらせ給ふましうけ参らせ給ふ／しんもたれかわたらせ給ふへきたゝ上ここそありかた／く末代こそかなしけれ去程に平大納言ときたゝの／きやうは判官のしゆくしよちかくおはしけるかあるとき／しそくさぬきの中将ときさねにあひての給ひける／はいかゝすへきちらすましきふみをかうよしつねにと／られたるそとよこのふみかまくらへくたりなは人も」（５２オ）おほくそんし我身もたすけらるましとの給へはちう／しやううちあんして申されけるは判官はおほかたもな／さけふかく候うへ女はうなとのうちたへなけく事をはき／き候よし承り候今はなにかはくるしく候へきひめきみあ／またおはしますうちいつれにても一人みせさせ給ひて

／したしうなりてさやうの事をもおほせられ候へかしと申／されけれは大納言日比はむすめともをは女御きさきに／とこそ思ひしにいまさらなみ〳〵の人に見すへしとはか／けても思ひよらさりしかとその給ひけるちうしやうの／心ちにはたうふくのひめきみのことし十七になり給ひける」（52ウ）をと思はれけれとも猶これをはゆるし給はすせん／ふくの御むすめ二十三になられけるをそしのひて判／官に見せられける判官はもとのうへかはこえの太郎／かむすめも有けれ共是をはへちの所しんしやうに／しつらひてすませ奉りたまふ有時この女はうく／たんのふみの事を仰せいたされたりけれは判官／いとやすきことなりとてふうをもとかすして大納言の／もとへをくられける大なこんなのめならすよろこひ／給ひてすなはちやきすてられけるとかや平家の／あくきやうは一かうこの人こうきやうせられけるにやさ」（53オ）やうの事きせられたる物にやおほつかなしとそ人申ける／

女院御出家の事

さる程にけんれいもんゐんは東山吉田のへんなる所／にたちいらせ給ひけり中納言の法印きやうけんと申／なら法師のはうなりけりすみあらして年へにけれは／庭には草ふかくのきにはあやめしけれりすたれたえ／ねやあらはにて雨風たまるへうもみえさりけり花は／いろ〳〵にほへ共あるしとたのむ人もなく月は夜な〳〵さし／入ともなかめてあかすとも、なし昔はたまのうてなを／みかきにしきのちやうにまとはれてあかしくらさせ」（53ウ）給ひしにいまはありとしある人にはみなわかれはれてさせ／たまひてあさましけなるくちはうにたちいらせ給ひけん／御心のうちをしはかられてあはれなりみちの程つきま／いらせられたりける女はうたちも是よりみなちり〳〵に／なり給ひぬうをのくかにあかれるかことし鳥のすをはな／れたるよりもなをかなしさるまゝにはうかりしなみの／上舟の内の御すまゐもいまは御こひしくそ思召され／けるおなしそこのみくつともなるへかりしみのつれなくな／からへぬるとおほしめしなけかせ給へともかひそなき天上／の五すいのかなしみは人間にもありける物をとそ見えし」（54オ）元暦二年五月一日女院御くしおろさせ給ひけり御かいの／師には長楽寺の別当あせう上人（ママ）せいとそ聞えし御かいの／御ふせにはせんていの御なをしなり上人これを給てなにと申／ことはをは出されねともこれをかほにをしあててすみ／そめの袖をそしほられけるそのこまてもめされたりし／御いなれは御うつりかもいまたつきさせたまはす西国／より御かたみにもとてはる〳〵もたせ給ひたりけれ／はいかならん世までも御身をはなたしとこそおほしめされ／けれとも御かいのふせになりぬへき物のなきうへ御ほたい／のためにもとおほしめしてなく〳〵とり出させ給ひけり」（54ウ）上人御いをやかてはたにぬいちやうらく寺のしやうめんにかけ／られけるとそ承る女院十五にてうちへ参らせたまひ十六にてこ／うひのくらゐにそなはり給ふくむわうのかたはらに候はせ給／てあしたにはあさまつりことをす、め奉り夜は夜をもは／らにせさせ給ひき廿二にて王子御たんしやう程なくく／わうた

いしにたゝせ給ひしかは二十五にてゐんかうかうふらせ／たまひてけんれいもん院とそ申ける天下の国母にてま／しますうへ入道相国の御むすめなれは世のおもくし／奉る事なのめならす今年二十九に（ママ）てそならせ給ひける／たうりの御よそほひなをこまやかにふようの御かたち」（55オ）いまたおとろへさせたまはねともいまはひすいの御かんさし／をつけてもなにかはせさせ給ふへきなれはつゐに御／さまをかへさせ給ひけりうき世をいとひまことのみち／にはいらせ給ひぬれとも御なけきはつきさせ給ふへくも／あらす人さの今はかくとて海にしつみし有さませんて／いの御おもかけなしかはわすれ参らせさせたまふなにゝ／かかりて御命けふまてもきえやらさるらんとおほしめす／につけてもつきせぬ御なみたやむときなしさ月はみ／しか夜なれ共あかしかねさせ給ひつゝをのつからうち／もまとろませたまはねは昔の事をゆめにたにも御」（55ウ）らんせられすかへにそむけるのこんのともし火かけうす（ママ）／かによもすからまとうてくらき（ママ）雨のをとしつかなり上やう／しんか上やうきうにとちこめられたりけんひしも（ママ）／これにはすきしとそおほしめす昔をしのふつまとなれとて／やもとのあるしかうつしうへにをきたるのきちかくはなた（ママ）／ちはなのありけるに風なつかしくかほりける折ふし山時鳥／ちかくをとつれてすきけれは女院ふるきことのはをおほ／しめし出て／

ほとゝきすはなたちはなのかをとめてなくはむかしの／人やこひしき

女院たち二位殿の外はさのみたけく海にも」（56オ）しつみたまはねはわかきも老たるもあるにもあらぬ心ち／してさまをかへかたちをやつし思ひもかけぬたにのおく／岩のはさまにてそあかしくらさせ給ひけるすまゐし宿／はみなけふりとたちのほりしかはむなしきあとのみの／こてしけき野辺とそなりにける日比みなれし人のと／ひくるもなしせんかより帰て七世のまこにあひけんもかく／やとおほえてあはれなり三位ちうしやうしけひらの／きやうのきたのかたと申はこ五条大納言くにつなのき／やうの御むすめせんていの御めのとこ大納言のすけとの／と申西国よりたけきものゝふにとらはれてふるき」（56ウ）都にかへりのほり給ひてはあねのたいふの三位ととうし／ゆくして日野と云所にてそおはしける三位中将の露／の命草葉の末にすかりつゝいまたきえやらぬよし聞／えしかは今一度かはらぬすかたをも見もしみえ奉らは／やとおもはれけれともさるへきたよりなかりけれはなく〳〵／あかしくらさせたまひける／

おほい殿のわかきみきられ給ふ事

平家ほろひて後は国さもしつかに人のかよふにわつら／ひなく都もおさまりにけれはあはれ判官程の人こそ／なけれ鎌倉の源二位は何事かしいたし給へるかう」（57オ）みやうあるたゝ判官の世にてあらはやなと申あひけり源／二位このよしを聞給ひてこはいかに頼朝かゐなからは／かりことをめくらせはこそ平家はたやすくほろひぬれ／九郎一人してはいかてか世をもしつむへきかく人のいふ／に

をこりて我まゝにしたるにこそいつしかさはかりの／てうてき平大納言のむこになるてう心えられす又／大納言のむことりもしかるへからすいかさま今度くたり／てはくわふんのふるまひしてんすとて内さ心よから／す聞えける同き七日九郎大夫の判官よしつねお／ほいとのふしをくし奉りてかまくらへこそくたられけれ」（５７ウ）その六日おほいとの人して判官のもとへの給ひをくら／れけるは明日すてに関東へくたるへしとやらん承り候／それにとりてはたんの浦のいけとりの中に八さいの／わらはとしるされて候しはいまた候やらん候はゝあは／れかまくらへくたらぬさきにかれをいま一度見候はゝ／やとありけれは判官別のしさい候はしとてあつかり／申たるかはこえの小太郎しけふさかもとへこのよ／しの給ひつかはしけりこのわかきみにはかいしやくの／めのととて女はう二人そつきたりける二人の女はう／わかきみを中にをき奉りてつゐにいかなる御ありさ」（５８オ）まにかみなし奉らんすらんとてなくよりほかの事／なしかはこえ人の車かりてわか君女はうおほいとのゝ／御かたへ入奉るはるかにちゝを見奉らせ給はて（ママ）世にう／れしけにていかにやこれへとの給へはいそき御ひさ／へ参らせ給ひけりおほいとのかみかきなてゝしゆこの／ふしにの給ひけるはこれ見たまへ人さこの子か母はこ／れをうむとてなんさんをしてしにぬさんはたいら／かにしたりしかともやかてうちふしてなやみしかいか／ならんはらにきんたちいてきたりともあひかまへてこ／れをはわらわかかたみに御らんせよめのとなとかもと」（５８ウ）へもさしはなちてつかはすなといひしかふひんさ／にあのむねきよ（ママ）は天下にひやうかくあらん時大将く／むにてこれはふくしやうくんさせんすれはやかてなを／ふくしやうといはんといひしかはなのめならすよろこ／ひてすてにかきりの時まてもなをよひなとしてあひ／せしか七日といひしにつゐにはかなくなりしそとよ／これを見るたひにはわすられぬそとてなみたにむせ／ひたまへはしゆこのふしもなみたをなかしゑもんのかみも／なかれけり日もやう〳〵暮けれはうれしうみたりさらは／ふくしやうとう〳〵かへれとの給へはわかきみ父の」（５９オ）しやうゑの袖にとりつき給ひていなやかへらしとそ／なかれけるゑもんのかみたちてこよひはこれに見く／るしき事のあらんするにかへりて又あすまいるへし／との給ひけれ共猶もたちたまはす二人の女房もさて／しもあるへきならねはわかきみいたき奉りてくる／まにのるおほいとのわかきみのうしろをはる〳〵と見をく／り給ひて日比の思ひなけきは事のかすならすとて／そなかれけるはゝのゆいこんかふひんさにめのとかもとへ／もつかはさすつねは我前にてそたて給ふ三さいに／てかうふり給ひてなをはよしむねとそ申けるおひ」（５９ウ）たち給ふまゝに心さま世にすくれておはしましせれ（ママ）は／なのめならすてうあひして西海のたひの空まてもつ／ゐにかたときもはなれたまはぬ人のいくさやふれて／四十よ日にならんするにけふそはしめて見給ひけ／るはさてあのわかきみをはなにとしたてまつるへ／き人にて候やらんと申けれは判官たうしはあつき／なかにおさなきもの共ひきくしてかまくらまてくた／るにをよはすこ

れにてよきやうにはからへとの給へは／かはこえよきやうにはからへとはうしなひ奉れなりと／心えついまた夜のうちなれはわかきみは二人の女」（60オ）はうとね給へりかはこえ女房に申けるはおほい／殿けふすてにかまくらへ御くたり候しけふさも判官の／ともにくたり候へはわかきみをはけさよりきくちかも／とへ入参らすへきにて候御車よせて候とう〳〵と申／せはけにそと心えていまたね給へるわかきみををし／おとろかせ奉りて御むかひに人の参りてさふらふいさ／させ給へと申せはわかきみ又きのふのやうにおほい／とのゝ御かたへまいらんするかとのたまひけるそいとおし／きわかきみくるまにのせ奉りて六てうを東へや／りてゆくかはらにくるまをやりとゝめてしきかはしき」（60ウ）て若君いたきおろしたてまつらんとす二人の女房／日比よりかゝるへしとは思ひまうけし事なれ共さし／あたりてはかなしくてこゑをあけてそをめきけるわ／かきみ大きにあきれ給ひておほい殿はいつくにわたら／せ給ふそとのたまへは只今これへ入せたまはんするに／こゝにてまちまいらせ給へとてしきかはの上にいたきお／ろし奉るかはこえからうとうたちをぬきてうしろへ／たちまわりけれはわかきみ太刀のかけをそれ給ひてめの／とかふところにかほさし入てそなき給ふかはこえをそ／しとめを見あはせけれはたちにてはかなはしと思」（61オ）ひてめのとかふところにいたきつきておはしけるを／ひきはなち奉りてこしのかたなぬきわかきみの御／くひをそとりてけることしは八さいにそなり給ふ首／をは判官に見せんとてもたせて行はむくろをはむ／なしくかはらにすてをきたり二人の女房かちはたし／にて判官の前にきたりしかるへくさふらはゝわかき／みの御くひを給て後の世をとふらひ参らせんと／申けれは判官よろつになさけふかき人にてもとも／しかるへしとてゆるされけり女はう御くひをふとこ／ろに入ていつるとそみえしその後五六日有てかつ」（61ウ）ら川に女はう二人身をなけたるかありけり一人はおさ／なきものゝくひをふところに入てしつみたりこれは／めのとなりけりめのとか身をなけんはいかゝせんかいしや／くの女はうさへおなしくしつみたるこそあはれなれ／

おほいとのふしちうせられ同おほちをわたさるゝ事

元暦二年五月七日九郎大夫判官はおほいとの親子／くし奉りて関東へけかうせられけり判官なさけ有／人にて道すからもやう〳〵になくさめ奉るおほい殿／はむくはんにふしか命を申てたすけ給へかしとのた／まへは判官の御返事には今度のいくさのくむか」（62オ）うにりやうしよの御命をは申てたすけまいらせはや／とこそ存候へいかさまにもおくのかたへなかし参らせ候は／むすらんと申されけれはおほい殿ろ（ママ）くろつかるとは／まゑそかすむなる千島なりとも親子かひなきいの／ちたにあらはと給（ママ）ひけるそあさましき国さ宿ささ／しすきてくたり給ふ程におはりの国のまのうつ／みにもなりしかはこゝはこさまのかみ義朝のはかなり／けれはおほいとのふしを馬よりおろし奉りてはかの／前をかなたこなたへ七度わたし奉りその後判／官はかのまへにかしこまてくはこしやうりやうかならす」

（62ウ）この心さしをもて九ほんあむやうのしやうとのいんせ／うにあつかりたまへと申されけるとかやその後おほい／とのふしを馬にのせ奉り下かうし給ふ程にするか／の国うき島かはらにもなりにけりおほい殿／

しほちよりたえす思ひをするかなるなみうきしまに／身をはふしのね

衛もんのかみ／

我なれや思ひにもゆるふしのねのむなしき空の／けふりはかりは

日かすふれははこねちうちこえてかま／くらちかくそなりにける判官三日ちより人をさき／にたて、鎌倉へあむ内を申されけれは源二位殿」（63オ）かち原をめして九郎かきんみやうかまくらへ入なんする／そさふらひ共めすへしとの給へはかけとき承りはせ／めくりてもよほしけるにさいかまくらをよひきんき／やうの大名小名われも〳〵とはせさんしてをの〳〵／しゆこし奉るかねあらひさはにせきすへさすへきよ／し仰せらるかちはらかねあらひさはへはせむかひて／大臣とのふしをはうけとり奉り判官をはそれより／こしこえへおつかへし奉るおほい殿ふしかまくらへ入／奉りて源二位殿のつねにすまはれける所よりつ／ほをへたて、たいのやにいれたてまつる二位殿ひき」（63ウ）の藤四郎よしかすをもての給ひけるは頼朝また／く平家にいしゆ思ひ奉らす其故はこいけのせんに／いかにたすけんとし給ふともこ入道相国の御ゆるし候／はてはいかてかよりともか首をつき候へきさてこそ／二十よねんの春秋ををくりむかへても候つれされ／ともてうてきとならせ給ひぬる上はゐんせんを給て／こと〳〵くついたうし奉り候ぬかやうにけんさんに入へし／とこそ存候はさりつれとの給ひをくられけれはよし／かすおほいとの、御前に参りてこのよしを申に／ゐなをりかしこまてきかれけるこそくちおしけれ」（64オ）鎌倉うちの大名小名その外平家にほうこうしける／ともからも命たすからんとておちくたりて候けるか／このていを見奉りてあな心うやあの御心にてこそ西／海のなみのそこにもしつみたまふへき人のこれまてもく／たり給ふ只今ゐなをりかしこまてきゝたまはゝ御いの／ちのたすからせ給ふへきかはとてをの〳〵つまはし／きをしてあさみあへりその中に有もの、申けるは／れうこしんさん（ママ）に有時ははくしゆうふるひおつといへ／共かんせいの中にある時はおをうこかしてしよくをも／とむといへりいかにたけきしやうくんなれ共かたきの」（64ウ）てにとらはれぬれは心はかはるならひなりされはおほい／とのの只今わろひれ給へるもことはりなりと申てこそ／はちをはすこしきよめけれ判官はかまくらへ入られぬ／事を大に心えす思はれけれはまたく御ため二心なき／よしをたひ〳〵ちんし申されけれともあへて御返事も／なかりけりその時大せんの大夫ひろもとのいまたいなは／のかみと申しにつきてきしやうもんをかきしよしやう／をそへてそたてまつられけるそのしやうにいはく／

義経つしん（ママ）てこん上すそのいしゆは御代官の一ふ／むとしてゐ

んせんを承りてすてにてうてきをほろ」（65オ）ほしくわいけいのはちをきよめをはんぬくんしやうに／をこなはるへき所に思ひの外にこゝうのさんけんに／よてむ二のくむちうを持せらるおかすことなくして／とかをかうふるこう有てあやまりなしといへ共御かん／たうをかうふる間むなしくこうるいにしつむつら〳〵／事の心をあんするにさんしやのしつふをたゝされす／かまくら中へ入られさるあひたしさいをのふるにあた／はすいたつらにしうるいをのこてりよくはんにと／うりうすこのときをんかんをはいし奉らすは何の／日かうつねんをさんすへきをやこつにくのきなかく」（65ウ）たえとうたいのよしみむなしかるへしはうふそむれ／いさいしやうせしめたまはすはたれの人かれんみんをた／るへきをや今さらの申しやうことあたらしきににたり／といへともよしつねしんていはつふをふもにうけいくはく／のしせつをへすこかうの殿御たかいのあいたつゐにみな／しことなて母のふところのうちにいたかれ大和の国／うたのこほりれうもんのまきにおもむきしよりこ／のかた一日へんしもあんとの思ひにちうせすわつかに／一めいをそんするといへともさい〳〵所さにかくしへん／とをもてすみかとしとみん百しやうにむかてひ」（66オ）さをくつすこゝにしゆくはうしゆむこしゆくして平／氏ついたうのきめいをかうふり上らくせしむるきさみ／にまつ木曽よしなかをちうりくしをはんぬ平家を／ほろほさんため西国へはつかうのときあるひは馬を／かゝたるたかき岩ほにすゝめかはねをしやくにくた／かん事をかへりみすあるひは舟をまん〳〵たる大海／にうかへかはねをはたうにしつめむ事をはゝから／すさいらうのくちをまぬかれけいけいのあきとをの／かる千しを出て一生にきす三四かねんのあひた／身にかつちうをはなさすきうせんをけうとするほん」（66ウ）いしかしなからおほせのおもむきをゝもむし奉り／かつははうこんの御いきとをりをやすめたてまつらん／ためなりあまさへよしつね五位のせうにふにんしをは／むぬすてにもてひしつをたていよ〳〵ちうきんをぬき／むてんとほつするところにかへつて御ふしんをのこ／さるゝてうせんこうのしよかむかなけいてあまり／あるものなり更にやしんをそんせさるむね諸寺諸／社のこわうほういんをひるかへして日本国中の大小／の神祇みやうたうをしやうしおとろかし奉りすつ／うのきしやうもんを書しんするところなりきてん」（67オ）しうたんのをもむきをさつし御かんきを申なためし／め給はゝた、かんしんむくうのさんこうをけすのみに／あらすたうけはんたいのよけいを残さるへきもの也／しよしにつくしかたしかしなからせいりやくせしむ／よしつねきようくわうつしんて申／

六月五日　　さ衛門の小せうよしつね／

しん上　　いなはのかみとのへ／

とそかゝれたるひろもとしきりにとり申されけれ共／二位殿きよゝ

うし給はす判官の給ひけるは今度／下向したらは所さのかつせんまいとの高名たつね」（６７ウ）かんせられんするとこそ思ひつるに思ひの外にかま／くらへたにも入られぬこそいこんのしたいなれこれは／しかしなからかち原かさんけんなりおなし親の子にて／先にむまれたるをあにといひ後にむまれたるをお／とうと、いふにこそ有なれ世をしらんにたれかはおとる／へきなとつふやき給へ共かひなし同き六月十日判／官又おほいとのふしを請取奉りて都へかへりのほり／給ひけりおほいとの今度かまくらにてそいかにもなら／むすらんとおもひたれは思ひの外に命いきて二た／ひ都へかへりのほるこそうれしけれとの給へは衛門のかみ」（６８オ）なにとてかたすけられ候へき道にてそきられ候はんす／らんとてくつろく心ちもし給はすおはりの国になり／ぬれはこの国はこさまのかみのうしなはれし国なれは／こゝにてそきられんすらんと思はれけれ共それもやうや／うすきけれはさてはかひなき命はかりをはたすけ／られんするにこそとの給へは衛門のかみたうしはあつき／比にて候へはくひのそむせぬやうをはからひて都ちかう／なりてそきられ候はんすらんとて我身もしきりに／念仏をとなへおほいとのをもすゝめ奉られけり同き／二十一日には近江の国しのはらにこそ付給へつきの」（６８ウ）日のあしたよりおほいとの衛門のかみをひきはなちて／所さにをきたてまつりけるにそ親子の人さけふをさ／いことはしられける判官万になさけ有人にて一日よ／り人をさきたてゝ都へいれせんちしきのひしりをむ／かへられけり大原のほんしやうはうたんかうとそ聞え／し大臣殿せんちしきのひしりにむかひての給ひ／けるは我西海のなみのそこにもしつむへかりしみの／いのちいきて京ゐなかひきしろはれはちをさらす／もあの衛門のかみ故なりされはたとひ首こそとらる／ともむくろは一しよにふさんとこそ思ひつるに思ひの外」（６９オ）に所さにてしなん事こそかなしけれとの給へはひし／りさな思召れ候そさいこの御ありさまを御らんせん／につけてもたかひの御心のうちいよ〳〵かなしかるへし／このところはもとよりしやうしやひつめつのさかひなれは／むまるゝものはかならすしゝあふものはさたまてわか／るゝならひなり今年は三十九にならせ給ふなりその間／の事をおほしつゝけて御らんせられ候へたゝ一夜の／ゆめのことしたとひ又この後七十八十まてたもた／せ給ふともそれも程やは有へきしやくそんいまた／せんたんのけふりをまぬかれたまはすいはんやゑむふ」（６９ウ）ふちやうのさかひにをいてをや君は御門の御くわいせき／にてせうしやうのくらゐにいたらせ給ひぬるうへは御ゑいく／わのこるところ候はす今又かゝる御めにあはせ給ふも／せんせのしゆくしうとおほしめされて世をも人をもう／らみさせ給ふへからすたのしみはこれかなしみのもとい／生はさたまてしのこなりされはしんのしくわうのをこ／りをきはめしもつゐにはりさんのつかにうつまれかん／のすていのちやうせいをねかひしもいたつらにとれうのこ／けにくちにき天人なを五すいの日にあへりとこそ見／えて候へさてこそほとけも／（７０オ）

かしんしくうさいふくむしゆ／

くわんしんむしんほうふちうほう／

ともとかれて候へ何事もつねとな思召れ候そいかなれ／はみたはをこしかたきくはんををこして我らをいん／せうし給ふにいかなる我らそやおく〳〵万こうの間／生しにるてんしていまたしゆつりのこをしらさる今／度たからの山に入て候をむなしくせさせ給はん事は／をろかなるなかのくちおしき事とはおほしめされ／候はすやあひかまへてよねんをゝこさせ給ふなとて／かいさつけ奉りしきりに念仏をすゝめ奉る大臣との」（７０ウ）たちまちにまうねんをひるかへし西にむきかうしやう／のねんふつ数百へんとなへてさらはとうきれとの給ひて／くひをのへてそまたれけるきりてたちはなの馬のせう／ともなかたちひきそはめうしろへたちまはりけれは大／臣とのたゝ一め見給ひて衛門のかみもすてにかとの給ひ／もあへすくひは前にそおちにけるせんちしきのひし／りもきりてともなかも皆袖をそぬらしけるこのとも／なかと申は新中納言知盛に朝夕しこうのさふらひ／なり今一度世にあらんとて鎌倉へおち下りて候ける／かさこそ世にしたかふならひとはいはんからに一家のしうの」（７１オ）くひをうちけるともなかをにくまぬものそなかりけるその／後ひしり又御子衛門のかみの御方へ参るゑもんの／かみひしりにむかひて大臣殿のさいこの有さまはいかに／との給へはいしうありかたうこそみえさせたまひ候つれ／と申されけれは衛門のかみなのめならすよろこひて西／にむかひかうしやうに念仏二三へんとなへてさらはと／うとてくひをのへてうたせらるきりてはほりのや／太郎ともひろなり衛門のかみおしかるへきよはひ生／年十七にそなられけるくひをは判官持せて都へ／入むくろをはせんちしきのひしりときりてのとも」（７１ウ）なかゝさたにて一あなにうつみそとはをたてゝそのほ／りける同き二十三日けひいし三条川原に行むかひ／ておほいとのふしのくひを請取けり大ちをわたして／こくもんにかけらるへしとさたありしかは法皇も／三てう東のとうゐんに御車をたてゝゑいらむあり／公卿てん上人の車もおなしくたてならへたりほうわう／御心よはくもれうかんに御なみたせきあへさせ給はす／大臣已上のくひ大ちをわたしこくもんにかけらる／る事てんちくしんたんはしらす日本我朝には／これはしめとそ承る西国よりいけとりにせられて」（７２オ）二たひ都へのほりてはいきて六てうを東へわたさ／れ東国より帰りてはしゝて三てうを西へわたさ／るいきてのはちしゝてのはちくおしかりし事／ともなり／

平家物語巻第十一終

（以下、五行分余白）　」（７２ウ）

平家物語巻第十二目録

本三位中将日野にてきたのかたにたいめんの事
ほん三位中将きられ給ふ事
大地しんの事
けんششゆりやうの事
平家のいけとりるさいの事

女院吉田よりしやつくわうゐんへ入御の事
かまくらの右大将舎弟をちうせらるゝ事
とさ房正しゆん判官の宿所によする事
判官ほつらくの事　」（1オ）
ひせんのかみ行家ちうせらるゝ事
六代御せんの事
大原こかうの事
六代御せん出家の事
右大しやう上らくの事
ほうしやう寺かつせんの事
もんかくるさいの事
六代御せんちうせらるゝ事
（以下、二行分余白）　」（1ウ）

平家物語巻第十二

本三位中将日野にてきたのかたにたいめんの事

去程にほん三位中将しけひらのきやうをはいつの国の住人／かのゝすけむねもちにあつけられてこそよりいつにそおは／しけるならをほろほされたるからんのかたきとて大しゆしき／りに申けれはさらは渡すへしとて源三位入道のはつしいつ／の蔵人の大夫よりかぬうけとり奉りてなんとへわたし奉るよ／しさらはこきやうの月を二たひみんすらんとうれしきかた／もおはせしにせめてのつみのふかさにや都の内へはいれられ／す山しなよりたいこちにかゝられけれはひのゝへんをそす」（2オ）きられけるこのきたのかたと申はとりかひの中納言これさね／のきやうの御むすめなりこ五てう大なこんくにつなのきやう／おさなきよりやしなひ奉りて三位中将をむこにとり／申されたりけるせんていの御めのと大なこんのすけとのとそ／申西国よりかへりのほり給てはあねのたいふの三位ととう／うしゆくしてひのと云所にそおはしけるさんみちうしやうし／ゆこのふしにの給ひけるはをの〳〵にこの日比なさけをかけ／られてその心さし申つくしかたくおほゆまた今一度さ／いこそのはうをんをかうふらはやと思ふはいかにとの給ひけれは何／事にて候やらんと申しけひらは一人の子なけれは今生に」（2ウ）おもひをく事はなきか年来あひなれし女房のひのといふ／所にありと聞うちすきさまにたちよりてこせの事をも／申をかはやとおもふはいかゝ有へきとの給へはやすき事なり／とそゆるし奉る人まいりてこれに大なこんのすけとのと申／人の御わたり候やらん三位中将とのゝならへ御とをり候かこの／つま戸にてたちなから御見参にとていらせおはしまし／て候と申たりけれはきたのかたおもひたによらぬ事なれは／いつくや〳〵とあきれつゝ出てみたまへはあゐすりのひたゝ／れにおりゑほしきたるおとこのやせくろみたるかえんにより／ゐたるぞゝなりけるめもあてられすなからなく〳〵是へと」（3オ）のたまひけれは中将みすうちかつきてゐ給へりたかひにて／にてをとりくみなみたにむせひてしはしは物ものたまはす／やゝ有て三位中将涙をゝさへてのたまひけるはさてもこ／その二月つのくに一の谷にていかに

もなるへかりしみのせめて／のつみのむくひにやいけとりになり京かまくらひきしろはれ／はちをさらすたにも心うきにはてはならをほろほしたり／しかはとてけふすてにいたされ（ママ）候なりいかはかりか人にすく／れてつみふかくも候はんすらんしけひらこの世になきものと／きゝなしたまひ候はゝいかなる御すまゐにてもおはせよしけ／ひらかこせとふらひ給へかみをもそりてかたみに奉るへけれと」（3ウ）もそれもゆるされぬなりとてそなき給ふきたのかたたれ／もこその二月六日のあか月をかきりともしらすしてわか／れ奉りしかはゑちせんの三位の上のやうにみつのそこへも／いらんとこそおもひしをおほいとのも二位とのもいかてか君をは／すて参らすへきとさりかたくせいせられしうへまさしく／此世におはせぬ人とも承はらさりしかはいま一度かはらぬ御／有さまをも見もしみえ奉る事もやと思ひてこそけふまても／有つるにすてにたゝいまをかきりにわかれ奉らん事こそ／かなしけれとこしかた行末の事共かきくときてなかれける／はまことにさこそとおほえてあはれなり三位中将の給ひ」（4オ）けるはわれも人もむかしのすかたをあらためすしてたかひに／みみえ奉りたれはいまはしての山ちをもやすくこえ行なん／と思ふのみこそなによりもうれしけれなこりは夜をかさね日を／をくるともつきすましならへも程とをし日もはるかにた／けぬふしのまへも心なしさらはいとま申てとていてられけれ／は北の方三位の袖をひかへてめしたる物のあまりにしほたれ／てみえさふらふにこれをめせとてしやうゑにあはせの／こそてをそへて奉らる三位これをきかへ給てもとき給へ／る物をはかたみにみたまへとてうちをき給へは北の方これも／さる事なれともふてのあとこそなき世まてのなかきかた」（4ウ）み共なれとてなく〳〵御すゝり取いたさせたまへは三位中将／

せきあへすなみたのかゝるからころもののちのかたみに／ぬきそかへぬ（＊ル）

きたのかた／

ぬきかふるころももいまはなにかせんけふをかきりの／かたみと思へは

さらはとていてられけれは北の方猶今しはし／との給てけれともさのみはいかゝとて心つよくふりきりてそい／てられける北のかたはしりつきていかにもならまほしくは思／はれけれ共それもさすかにかなはねはみすのきはにふしま／ろひかなしみ給へともかひそなき三位中将心つよく出られけ／れ共馬をもさらにすゝめやらすひかへ〳〵なかれけれはしゆ」（5オ）このふしとも、みなよろひの袖をそぬらしける／

ほん三位中将きられ給ふ事

さるほとに南都の大しゆ三位中将をうけとり奉りて東大こ／うふくりやう寺の大衆しゆゑしてせんきしけるはそも〳〵／このしけひらの卿と云はちうほんのあく人たるうへ五けい三千／のきやくさいにもすきしゆいんかんくはのたうりこくしやう／せりせんする所りやう寺の大かきをひきまはしそののちく／ひをはのこきりにてやひく

へきほりくひにやすへきとそせん／きしけるそのなかに老憎ともの申けるはまことにからんを／はめつせし時やかていけとりにもしたらはもともさるへけれ」（5ウ）ともはるかに程へて後ふしかからめていたしたるをうけとりて／しえたりかほにせん事そうとのはうにをんひんならすた／たふしにつかはしてこつのへんにてきらすへしとて又ふしの／手へそわたしけるそのていめいとにてさい人ともかつみのき／やうちうによりて七日〳〵に十王の御前へわたるらんもこれ／にはすきしとそみえし八条の女院にむくむまのせう政時と／申ものあり三位ちうしやうけふこつ川のはたにてきられ給ふ／へしと聞えしかは今一度かはらぬ御ありさまをみ奉らはやと／おもひけれはむちをあけてはせけるかこつ川のはたにはせ／ついて馬よりとひおり人の中ををしわけ〳〵参りて見奉」（6オ）けれはすてにたゝ今とそみえ給ふ三位中将まさときを／みつけ給ていかにあれはまさときかうれしくもたゝ今まい／りたる物かなとの給へはさいこの御ありさまみ奉らんとてま／いりて候と申心さしこそかへす〳〵しんへうなれさいこに仏／をおかみ奉らはやと思ふはいかゝ有へきとのたまへはふし／にしはらくの御いとまをこひのへたてまつり仏をたつねて奉／るあるたうに入てみけれはさいはひにみた三そむの三しや／くのりうさうにておはしましけるをたつねいたして参り／たりすなこの上に東むきにたて参らせてまさときかひたゝ／れのさうの袖のくゝりをときて仏の御手ゆひつけ奉り三位」（6ウ）中将にひかへさせ奉るちうしやうこれをひかへ給てなのめならす／よろこひ給ひわれはからざるにからんせうしつのよやうをう／けてこくちうこんほんのきやくさいとなれりすゑのつゆもと／のしつくとなるためしなれはしけひら一人かとかにてなかく／あひ大しやうのそこにしつまん事たゝいまなりたゝしつた／へ聞たつたか三きやくを、かしあしやせわうのちゝをかいせ／しもなをによらひのきへつにあつかりきいはんやこくちあく（ママ）／人むはうへんゆいせうみたとくしやうこくらくの御ちかひあり／すみやかに日比のあくこうをひるかへして九ほんあんやう／のしやうとへいんせうし給へと申されけるそあはれなる」（7オ）その後かうしやうの念仏す百へんとなへ給てくひをのへて／そうたせられける日比のあくきやうはさる事なれとも／きりてのふしも数千大しゆもみな袖をそぬらしけるくひ／をはたちのきつさきにさしつらぬいて法花寺の鳥ゐのも／もとにしはしさしあけて治承のかつせんのときはこゝに／うつたちてこそいくさの下知をもし給ひしかとてそのゝちはん／にや寺の大そとはにくきつけにこそせさせけれきたのか／たはあはれ中将はたとひ首こそとらるともむくろはむなしく／かはらにすてをきてこそあるらめあれをむかへてほたいをも／とふらひ奉らはやとてくわんをんくはんしやちさうくはんしや」（7ウ）十りきほんしなと申ものにこしをかゝせてつかはされたりまこ／とにむくろはかはらにすてをきたりこしにかき入奉りひの／へかへりまいりたれれきたのかたむなしきしかいに取つきてか／なしみ給へとかひそなきさて有へきならねは野へにをくり／奉らんとしけるにくひをは南都のしゆせう上人（ママ）

大衆にこひ／てひのへつかはされたりければひとつたきゝしにつみこめてけふ／りとなし奉りてこつをひろひかうやへをくりはかをはひのにそ／たてられけるそのゝちきたのかたはほうかい寺といふてらよ／りたつときひしりをしやうしたまひ御さまかへて三位中将／のこしやうほたひをそいのられける」（８オ）

大地しんの事

去程にてうてきほろひてのちは国はこくしにしたかひし／やうはりやうけのまゝなりしかは上下あんとの思ひをなし／たりし程に同しき七月九日大ちおひたゝしくうこきて／時うつるほとなりせきけんのうち白川のほとり六せう寺九ちうの／たうよりはしめてさい〳〵所〻のたうしやふつかくくわうき／よみんおくあるひはたふれかたふきあるひはやふれくつれま／たきは一宇もなかりけり一天くらふして日のひかりもみえす／らうせうともにきもをまとはしてうしゆこと〳〵く玉／しゐをうしなひ都の内は申にをよはすきんこくをんこくも又か」（８ウ）くのことし海かたふきてみねひたし大地さけて水をいたす山／くつれて河をふさき岩くたけてたにをうつむ浦こく舟は／なみにたゝよひくかを行ひつめはあしのたてとをまとはす／りうにあらされはくもにも入かたく鳥にあらされはてんを／もかけりかたしこそ（う）すいみなきりきたらはたかきみねに／のほりてもなとかたすからさるへきたゝ心うきは大地しん也／けりほうわうはいまくまのへ御幸なりて御はな参らせさせ給／ひけるか御あんしつゆりたふれ（ママ）人あまたうちころされてしよ／くゑいてきにしかはいそきくわむきよ成にけり女院宮〻も／御車はなをあやうけれは御こしにめしつゝいつちともなく」（９オ）出させ給ふおんやうのかみやすちかたいりにはせさんしてそう／もんしけるはゆふさりのいねのこくあすのみむまのこくには／大ちすてにうちかへすへしなと申けれはそのときに／いたりて家なりしとみつまとしやうしのなる音をきゝては／あはやたゝ今こそかきりとておとなしきかなきけれはおさ／なきもともにをめきさけひけりもんとく天皇の御宇さ／いかう三年三月三日の大地しんには東大寺の大仏の御くしおちさせ／給ひけるなりしゆしやく院の御宇天慶九年四月七日の大地／しんには主上御殿を出させ給ひて大こくてんの南しやうね／いてんの前に五ちやうのかり屋をたてゝすませ給ひけりそれは」（９ウ）四月より七月までゆりけるなと聞えしかともそれは上この事／なれはしりかたし七八十ないし九十のものまてもいまたかゝる／事おほえすと云世のめつするなと云事はきけともさ／すか昨日けふとはしらさりつる物をこれはへいけのをんりやう／か又世のそむすへきせんへうかとそ上下さはきける女院吉／田の御所にわたらせ給ひけるか今度の大ちしんについちも／くつれ御しよもみなやふれぬりよくいのかんしのきうもんを／まはるたにもなし心のまゝにあれたるにはのまかきはしけ／き野へより猶露けくよもすからすたくむしのねもことに／ものあはれなり夜もなかくなり行まゝには御ねさめかちなるに」（１０オ）秋のあはれをうちそへてあかしそかねさせ給ひける／

けんししゆりやうの事

おなしき八月十四日にかいけんありて文治元年とかうす／おなしき廿日けんし六人しゆりやうになさる竹田の太郎のふ／よしとうたうみのかみかゝみの二郎とをみつするかのかみやす／たの三郎よしさたさかみのかみ一条の二郎忠頼武蔵の守大／うちの太郎これよししなのゝかみいたかきの三郎かねのふ／いつのかみとそ聞えし／

平家のいけとりるさいの事

同しき九月二十三日へいけのいけとりともくに〳〵へわかちつ」（10ウ）かはさる平大納言ときたゝのきやうのとのくにくらのかみのふ／もとさとの国さぬきの中将時さねいつもの国ひやうふの／せう正明（ママ）さとの国二位とのそうつせんしんむさしの国中な／こんのりつしちうくはいさかみのくにほつせう寺のしゆきやう／のうえんいつの国きやうしゆ房のあしやりゆうえんあま（ママ）／の国とそ聞えしなかにも平大なこんときたゝの卿はけんれ／いもんゐんのわたらせ給ひけるよしたの御所へ参り給ていま／はあるかひなき身にては候へとも都に候つる程はつねに御／行ゑをも承り候つるにせめてう〳〵してすてにはいしよ／へをもむき候さてもいかなる御ありさまにてかわたらせおは」（11オ）しまし候はんすらんとゆくそらもおほえすこそ候へと申された／りけれは女院まことに昔のなこりとてはかくておはしつる／はかりにてこそありつるに今はたれかはとふらふ人もある／へきとて御涙にむせはせおはしますこのときたゝのきやうと／申は出羽のせんしとものふかまこひやうふのこんのたいふときのふ／の朝臣の子也けりけんしゆん門院の御せうとたかくらの／上くわうの御くわせ*イきにておはしますされはちゝときのふ／のあそむはそむしやうの時はわつかに中納言までこそ／いたり給ひしにせいきよののちそ左大臣のくわんをゝく／られけるかのやうきひかさいわひしときやうこくちうかさ」（11ウ）かへたりしかことし入道のきたのかた八てうの二位殿にも御／おとゝにておはしけれは入道大小事をも一かうこのきやうに／の給ひあはせられけり天下の万きを心のまゝにしきやう／せられけれは世には平関白とそ申けるされは正二位大納／言までなりあかりしそく時家ときさねも中将少将を／へられけりけひいしの別当にも三か度迄なりたまひけるとそ承る／この人のちやうむのときはせつたうかうたうもなかりけりさや／うのものをはめしとりてひたりのかいなをうちきり〳〵をひは／なされけれは人悪別当とそ申けるさせる弓やを取家にて／はなけれとも心たけくおはせしかはせんちやうにうち立てかつ」（12オ）せんをこそしたまはさりしかともはかりことをいちやうの内／にめくらす事一かうこの大なこむのしわさなりへいけのやし／まにおはしせしときゐんせんの御つかひはなかたかほに／なみかたといふかなやきをせられたりしもこのきやうのしわさ／なりほうわうこ女院の御事をおほしめさるゝにつけても／此きやうをたすけをかはやとはおほしめされけれ共日ころの／ふるまひあまりにはうしやくふしんにおはせしかは法皇も／御いきとをりふかりけり判官もしたしくなりておはせし／かはいかにもして申さはやとはおもはれけれ共法皇の御いに／そむきぬるうへはちからをよひ給はすとした

けよはひかた」（12ウ）ふきぬる身に一まともつきしたかひ奉る人一人もなかりけ／り北のかたそつのすけ殿も日比よりおもひまうけし事な／れは今さらおとろくへきにもあらすとはの給ひけれ共さしあた／りてはかなしかりけり二たひかへり給ひつる都を又たち出て行／程にかたゝのうらにもなりにけり大なこむこゝをはいつく／と云そとゝひ給へはかたゝのうらとそ申けるまん〳〵たる／をきにひくあみをみ給てなく〳〵かうそのたまひける／

かへりこん事はかたゝにひくあみのめにもたまらぬ／わかなみたかな

日かすふれはのとのくにそつき給ふおは／しける所の岩の上に松の一本そひへたるを見給て」（13オ）

しらなみのうちおとろかすいはのうへにねいらてまつの／いく代へぬらん

きのふはさいかいのなみの上にしてをんそうゑく／のおもひをへんせんのうちにつみけふは北国の雪のしたに／うつもれてあひへつりくのかなしみをこきやうのくもにかさ／ねたりその後大なこんたうこく大たといふ所にてつゐにうせた／まひぬとそ聞えし／

女院吉田よりしやつくわうゐんへ入御の事

さる程にけんれいもん院は東山のふもとよしたのへにわ／たらせ給ひけるかこゝは猶都ちかくてたまほこの道行人の人め／もしけけれは露の御いのち風をまたんほともいかならんやまの」（13ウ）おくにも入なはやと思召せともさるへきたよりもなかりけ／りある女房の参りて申けるは大原のおくせれうの里しやつ／くわう院と申ところこそ世はなれしつかにめてたき所にてさ／ふらへおほしめしたてかしと申せは女院これもしかるへき仏の御／つけにてそわたらせ給ふらん山さとは物さひしき事社（コソ）／あるなれとも世のうきよりはすみよかんなる物をとて／なく〳〵思召たゝせ給ひけりなに事も昔にかはりはてぬ／れは事とひ奉る人もなしれんせいの大納言りうはうの卿の／きたのかた七条のしゆりの大夫のふたかのきやうのきたのかたよ／りそ御のり物なとはさたしたて参らせ給ひけるころは文治」（14オ）元年長月廿日あまりの事なれはよもの木すゑの色さな／るを御らんしてはる〳〵とわけすきさせ給ふに山風（ママ）なれは／にや日もすてにくれにけり野寺のかねの入あひのこゑすこく／そらかきくもりいつしかうち時雨このはみたりかはし鹿のね／かすかに音つれてむしのこゑ〳〵たえ〳〵なり女ゐんしやつく／わう院に参らせたまひて御らんすれは本そむはみたの三そん／にてそまし〳〵ける天子しやうりやう一もんゆうきとんせう／ほたいしやうとうしやうかくとこそ申させ給ひけれきのふ／は東にむかひて天せう太神にきよくたいあんをんと御／いのりありしそかしけふはにしにむかひてみた如来にわうし」（14ウ）やうこくらくと申させ給ふそあはれなるにしの山のはを御／らんすれはした紅葉所さにみえたりりよくらのかきもみ／ちの山ゑに書ともふてもをひかたし（*よ）ひかしにはほそ谷河なか／れて岩にこけむして物さひたるところなれはあらまほし／くそおほしめされけるにはの荻はら霜かれてまかきの／きくの

かつ〳〵うつろふいろを御らんしても我身のうへと思召すこゝ／にかたのことくの御あんしつをむすはせ給ひて一まをは仏／しよにしつらひ一まをは御しんしよにこしらへてちう夜朝／夕の御つとめちやうしふたんの御念仏おこたる事なくて／月日をゝくらせたまひけりかくて神無月なかの五日のくれかた」（15オ）にはにちりしくならのはをふみならす音の聞ゆれは女院／ひるたにも人めまれなる所にたゝ今何ものにてかあるらんし／のふへき物ならはしのはゝやとおほせけれは大なこんのすけ殿／立出て見給へは人にてはなかりけり世にうつくしけなる／小鹿の三つれたるかわたるにてそ有ける大なこんのすけ／とのかへり参りたまひて／

いはねふみたれかはとはんならのはのそよくはしかのわたる／

なりけり

女院なく〳〵まとの御しやうしにあそはしそつけさ／せ給ひけりかゝりける御つれ〳〵のなかにもおほしめしなすらふ／る御事ともおほかりけりのきにならへるうへ木をは七ちう」（15ウ）ほうしゆにかたとりいはまにつもる水をは八くとくすい／とおほしめすちやうしうきうにはなをもてあそひしあ／した風立てにほひをさそひせいりやうてんに月をなかめ／しゆふへくもおほてひかりをかくむかしはきよくろうきんて／んのたへなる御すまゐなりしか共いまはしばひきむすふいほ／の中よそのたもともしほれけり／

かまくらの右大将舎弟をちうせらるゝ事

九郎判官はわつかにいよの国一こくもつくわんりやう廿か／所さふらひ十人つけられたりしかそれも源二位殿心をあはせら／れけれはみなかまくらへにけくたる去程にはんくわんうたる」（16オ）へしなと聞えけれははんくわんの給ひけるは関より東はお／もひもよらすせんやうせんをんなんかいにてもあつけられ九国／のそうついふくしにもなされんすらんとおもひつるにこれ／はされは何事のとかそやゆみやとりのならひ親のかたき／をうちつれは是にすきたるおもひてなに事かあるへきなれ／ともかゝる聞えありしかはそのうらみふかゝりけりきやうたい／なるうへことにふしのちきりをなして一天四海をすますいか／なるふしきにてかゝるきこえあるらんと上一人より下万みんに／いたるまてふしんをなさすと云事なしさるほとにけん二／位とのよりともかかたきになりぬへきものはいまはおほえ」（16ウ）すおくのひてひらそあるとの給へはかちはらはんくわんとのも／おそろしき人にてこそまし〳〵候へうちとけさせ給ふましと申／せはよりとも、内さはさ思ふなりとその給ひけるこれはこの／春わたなへにてふねのさかろをたてんと云事をかちはらと／ろむしたりしによてかけときはむくわんをにくみ奉りつゐ／にさんけんしうしなひ奉りけるとかやかまくらとのうて／をのほせられける三百よきをそろへておと、三河守をよひ／奉り御へん都へのほりて九郎うち給へと仰られけれはしき／りにしたい申されけりさては九郎にとうしんこさむな／れとの給ひけれはそのきにて候はすきやうたいなるうへ西国に」（17オ）て平家せめ候しときもことに契りふかく候しかは一たむ申／にてこそ候へさ候はゝまかりむか

ひ候はんと申されけれ共／なをもちいたまはさりしかはまたくやしんをさしはさむ／へきとまい（ママ）日に七まいのきやう（＊シ）もんをかきて百日か間し／んせられけれ共そうしてもちいたまはすやかていつのほう／てうへつかはされてしゆせん寺といふ所にてちうせられ／けると聞えし／

とさ房正しゆん判官の宿所によする事

その後かちはらをめしていかゝして九郎をうつへき大／せいのほりては天下の大事となりなんすひそかにこせいにて」（17ウ）のほるへきものはたれかあるとの給ひけれはとさはう正しゆ／むそ候らんさらはめせとてめされけり都へのほりてふ／つけいするやうにてうかゝひて九郎うちてんやとの給へはかし／こまて承り五十きはかりにてはせのほる六条むろ町へん／にてしゅくしけるはんくわんのたち六条堀河辺なりけ／れ共それへもさんせすしやうしゅんかのほりたるよしきゝ／給て武蔵はう弁慶をししやにてめされけりやかて弁慶／につれて参りたりいかに御はうかまくらとのよりの御ふみは候はぬ／かさしたる事も候はぬあひた御文は候はすたゝし西国に／何事も候はぬはさて御わたりのゆへとおほえ候とはかりこ」（18オ）そ御ちやう候つれはんくわんよもさはあらしかまくらとのはかち／はらかさんけんにつかせ給てよしつねをはにくませ給ひ／てちうせんとおほしめすか大勢のほせては天下の大事なる／へしわそうのほりてうてといふはかりことにてそあるらん／しやうしゅんけしきかはりておもひもより候はす親にて候も／のゝ十三年のけうやうのために七大寺まうて仕り候はんとて／上らく仕りて候またくうしろめたなき事さふらはすとて／御前にて三まいのきしやうをかきはんくわんに奉るあるひは／やしろにをしやさ（ママ）てのみなとする間よし〳〵さらはかへれと／てかへし給ひぬはんくわんその比いそのせんしかむすめにしつ」（18ウ）かといふしらひやうしを思ひてをきたりけるか是をみて申／けるはいかにもこのきしやう法師めかやうあるものとみえ候御ま／へにてこそやう〳〵にきしやうもんをはかきて奉りたれとも／いてさまにうちとのさふらひを見まはしてみまやのけしき／よく〳〵見候つれはいかさま程のへてかなふましとおもひ／てゆふさりなと夜うちによする事もや候はんすらん御よう／い候はてとそ申けるその日もくれぬしつか申けるはなに／となくこよひはせけんもそう〳〵なり馬のあしをとたかし／これはいかさまひるのきしやうほうしかし事とおほえ候人／をつかはして御らんせられ候へと申せはわらはをつかはされ」（19オ）けりこのわらはあそここゝにたゝすみて見ける程にやかて／さしころしてすてにけりわらはをそかりけれはかやうの／所へは女こそよく候へとて又女をつかはしたりけれはほとなく／たちかへりてこれの御つかひとおほしくてもんせんにころさ／れて候なり門をさして中門に大まくひきまくのうちに／は物のくしたるもの五十人はかりみえ候くらをき馬共こうち／にひきたてゝたゝいまうちたゝんするやうに候と申もは／てぬにしやうしゅん五十きはかりにて六条堀河の宿所に／をしよせてときをつくるはんくわんその比折ふしきうぢし／みたし給ひ

たりけれ共よろひ取てき給へはしつかこかねつくり」（19ウ）のたちとてはかせ奉るやかきおひゆみとりちうもんへ／出給へはとねり男馬*御にくらをきえんのきはに引たてた／りひたとうちのりてかとをひらきうちいて給ふ夜打／にてもひるうちにてもてんちくしんたんはしらす日本我／朝にはよしつねてこめにしつへきものはおほえぬ物を何者そ／なのれとの給へともなのらす判官の御内にはいせの三郎武蔵／房あふしうのさとう四郎兵衛えたの源三くまゐの太郎鈴木／の三郎をはしめとしてみな馬にはのらさりけりくきやうのつ／はもの二十よ人御馬のまはりにすゝみ出てさん〳〵にたゝか／ひけり文治元年十月廿日夜半の事なりけれはくらさはく」（20オ）らし雨はつよくふりたりけりしやうしゆんはあんないをしらすの／こりすくなにうちなされけりはんくわんの方にはくまゐの／太郎うちかふとをいさせてしにゝけりしやうしゆんもこゝを／さいこと（ママ）たゝかひけるかむまのはらをいさせてしきり／にはぬれは弓つえつきておりたちたりあしにまかせておち／ゆきけるうしろよりかたきをひかくれは物くきりすてゝり／うけこえにかゝりて北国の方へと心さしけるかくらさはくら／しいつくともなく行程にくらまのおくそうしやうか谷へそかく／れたる鞍馬法師ははんくわんに日比よしみ有けれはかうりよ／くしてたつぬる程にしやうしゆんをからめとりてたてまつる」（20ウ）つきの日はんくわんの御前にひきすへてえんに立給ていかに／わそうはきしやうにはうてたるそとの給へはしやうしゆんすこし／もさはかすにことうちわらひて申けるはある事に書て／参らせ候へばうてゝ候なりとそ申けるわそうかふるまひま／ことにしんへうなり命をしくはたすけんとの給へは君の／仰せともおほえすおほくのさふらひとものなかよりえらはれ／奉りて上らく仕りて君を思ひかけ参らせてかやうにまかりな／り候うへは二たひ関東へまかりくたる事あるましく候たゝ御／をんにははやく首をめされ候へと申あひたさらはとて六条／かはらにてきられにけり」（21オ）

判官ほつらくの事

又あたち新三郎清親を九郎かふるまひみて申せとての／ほせられたりけるか夜を日につきて関東へはせくたりこの／よしを申ければしやうしゆんはしそむしたりけりとて北／条に仰あはせらや*レかてほうてう大将くむにて六万きを／のほせらるおなしき廿五日ちんせいの住人おかたの三郎これ／よし上らくしへいけ九国のうちをつゐしゆつし奉りたるよし／ちうしやう申さんとてくわんとうへ下向すへきよし申け／るを関東より大勢のほるときこゆよしつねにたのまれよと／の給へは御内に候きくちの九郎高家を給てくひをきりてた」（21ウ）のまれ奉るへき由申けれはやすき事とて六条かはらにてき／られけりさてこの（ママ）よしはんくわんに付奉るおなしき十一月一／日判官院の御所へ参りて大蔵卿やすつねをもて申されけ／るはかつはきみもしろしめされても候らん源二位なのめなら／すよしつねをついたうすへきよし申候て大せいをさし上／する由承り候きやうとにていかにもなるへく候へ共君の御ため／世のためあしく候へしよ

しつねか日ころのくむこういかてか御／わすれ候へきちんせいのものともにし、う見はなたす／心を一にしてちからをあはすへきよしのゐんのちやうの御くた／し文を給はり候は、やと申ければくきやうせんきありを」（22オ）の〳〵申されけるはらくちうにてかつせん仕り候は、朝家の／御大事にて候へしきやくしん京とをまかりいて候はんはめて／たき事にてこそ候はんすらめと一とうに申あはれければさらは／とてやかて申うくるね（*む）にまかせてちやうの御くたしふみを／そなされける同しき三日京中のわつらひなくして三百／よきにて出られけりをちひせんのかみ行家したの三郎せんし／やうよしのりおかたの三郎これよしらをあひくしていてら／れけりつの国けんし大をかの太郎てしまのくはむしやこれ／をき、関東の聞えもありわれらかや一もいかけすしてと／をさむ事あしかるへしとてかはつと云所へをひかけてうち」（22ウ）奉る判官にくいやつはらかなそのきならは一人もあますなと／てかへしあはせてさん〳〵にかけ給へはいへのこらうとう皆う／たれてひきしりそくくひせう〳〵きりかけさせかと出よし／とてよろこひのときをつくりてくさ（*イ）神にまつられけりさて／大もつの浦よりふねにのり給ひけるにわかに西の風はけ／しくふきてむねとたのまれたるよしのりゆきいへこれよしな／との舟共も行かたしらすうせにけりはんくわんの舟は住吉／のなきさへ打あけらる関東へ心さしある兵ともをひきた／る由聞えけれは今はいかにもかなふましとて都よりひきく／した女はうたちあまたおはしけり平大納言の姫きみかはこえ」（23オ）の小太郎かむすめをはこ、にすてをきてしつかと云しら／ひやうしはかりをくし給ふ吉野のおくにそこもり給ふすてら／れたる女はうたち袖をかたしき松のもとにたふれふしなきかな／しみ給へはみる人あはれみ奉りて都へそをくりける吉野法／師ともくわんとうへの聞えのためとてをひ出し奉るへきよし／聞えけれはひそかに出給ふ北国にか、りておくひてひら入道／をたのみておちられけりおなしき七日ほうてうの四郎京ち／やくすやかてゐんさん仕りかし（ママ）つね行いへつゐにたうすへき／よし院せんを申されけり去ぬる一日よしつね申うくるむ／ねにまかせてよりともつゐたうのちやうの御くたし」（23ウ）文をなされおなしき七日はよりとものきやうのそうもんによ／りてよしつねついたうのゐんせんを下さるあしたにかはり／夕へにへんするせけんふちやうのならひこそあはれなれほう／てう殿このついてにしよこくにしゆこ人を、いてしやうえむ／にちとうをなすへきよしを申その上しやうりやうこくりや／うをいはすひやうらうまいあてをこなふよしきこしめさる／をんてきをしつむるものははんこくを給と云事はむりや／うき、やうにみえたりされとも我朝にはいまたそのれいな／しこの申しやうくわふむなりと思召されけれとも源二位の／申されけるうへはとてよしたの大なこんつねふさのきやうその」（24オ）比かてのこうちの中納言と申（マ）ておはしけるをけん二位院へ申／されけるは向後にをきてはとうちうなこんにて大少事そう／もんすへきよし申さるへいけの時も大小事をはこの／人に申あはせられけり法皇を鳥羽殿にをしこめ参らせ

／て後院の別当をゝかれしときは八条ちうなこんなかかたのきやう／とこの大なこんと二人を別当になされけりいまけんしの世にな／りてかくたのまれ給ひけるこそありかたけれへいけにむす／ほふれし人さも源氏の世になりしかはあるひはえんゆかりを／たつねあるひはいかにもしてむつひちかつかんとこそせられけれ／ともこの大なこんはいささかもへつらふ事もなかりけるとそ」（２４ウ）きこえしされはこ白河院のけんきう二年の冬のころより／ふれいの事ときこえし程に同しき三年正月のすゑ／にたのみすくなき御事におほしめしてやう〳〵事共おほ／せをかれけるに御こうけんの事かの大なこんにふきやうすへ／きよしうけたまはられきしつしにて花山院の左大臣兼（カネ）／雅（マサ）おはしききんしゆにてさ大へんさいしやう候はるこの人さの／申さたせられんなに事かをろそかなるへきに思召入て仰を／かれけるそかたしけなきこの大納言はこん右中へん光房の朝／臣の子なり十二さいと申ける時より君にめしつかはれてした／いのせうしんとゝこほらす正二位の大なこんにいたり給ふ人を」（２５オ）はこえ給へ共人には一ともこえられ給はす君もしんもおも／くおほしめされける人のせんあくはきりふくろにたまらさ／るかことしといへりまことにかくれなかりけり／

ひせんのかみ行家ちうせらるゝ事

ひせんのかみ行家はいつみの国たかいしのうらへうちあけられた／りけるか判官にははなれぬ人さにはすてられぬしよ国は／みな関東に心さしありと聞えけれはかなふましとてはまと／をりに天王寺のれい人うたのかみかねゆきかもとへおはしけ／るかねゆきかむすめ二人あり二人なからゆきいへのおもひものな／り行家こゝにおはすと聞え北条殿ひたちはうしやうめい」（２５ウ）に御へんかしこへむかひてひせんのかみうてけさんに入たまへ／との給ふあひたさらは御せいを給候はんと申間ほうて／うとの馬屋の大源二をさきとして三百よきの勢をつけら／る是をあひくしてしやうめいかね行かもとへをしよす行いへ／うてむかふ（フ）と聞えしかはそこをおちてかはちのなかのゝしや／うへおもむきけりしやうめい天王寺にをしよせてときをつ／くりかけたれ共いへの内にはをともせすうち入てたつぬるに／人もなし二人のおもひものをとらへてとひけれはあねはいも／うとにとへと云いもうとはあねにとへと云いつれもつゐに／いはつしやうめいちからをよはてありける所にかはちのくに」（２６オ）なかのゝしやうに有よし聞えしかはこゝをは打すてゝなか／のゝしやうへをしよす行家うてむかふと聞えしかはそこを／もおちていつみの国やきといふ所にひそかにしのひて有／と聞えしかはしやうめい中〳〵大せいにてはあしかりなんとて／思ひきりたるつはもの廿よ人めしくしてみのかさきてか／しこへゆきむかひてたつねけれともしかるへきところもな／かりけれはむなしく帰る所に下女のあひたりけるにこ／の辺に落人の有かと云いつくにそとゝへはこの女しらす云（ト）な／んてうしらさるへきそのきならはきりころさむといはれて／ゆひをさしてあそなる（ソコ）小家にこそおち人とてしんしやうなる人」（２６ウ）はこの程かくれゐたれと申けれはさらはをしよせて

をしま／きたりされとも人〻さうなくもうちへいらすしやうめい四尺／二すんのたちをぬきひきそはめてつと入て見けれはその／へんの国人とおほしくて四十はかりなる男のあさきのひたゝ／れきたりけるか行家にさけをすゝむとおほえてさかなと／りちらしたりけるかとりすてゝにけてゆくしやうめい行いへ／そと思ひてをひかくるつはものともつゝいたりゆきいへかなは／しとやおもひけん行家をたつぬるかそれはあらぬそ爰／にあるそとの給へはしやうめいとてかへすひせんのかみ右の／手にはしやうめいかにもをとらぬたち左の手には二尺五寸」（27オ）のこかね作りの太刀を持てうちいてしやうめいによりあひて／たゝかひけりつはもの共入かへ〳〵たゝかふ大てよりはいかにも／かなふましかりけれは小やのうしろをやふりてをし入けり大／手からめてとりこめてたゝかひけれは行いへはくきやう／のうちものゝしやうすなりしやうめいまさきにすゝみて／しころをかたふけてうち入ける所を行いへ大たちをもて／かふとのまつかほ（う）をちやうと打てこたちをもてすねを／なくすねあてのはつれひさ口をなかれたりされ共ちとも／ひるますよりあひて太刀をすてゝむすとくむ上になり下に／なりしけるを大源二つとより石をもて行いへのひたいをち」（27ウ）やうとうつなんちは下らうなれかたきをは弓やたちかたなにて／こそせうふをすれ石にてうつやうやあるとの給へはしやうめいあ／しをゆへと云けれは大源二ゆきいへの足はかりをはいはて四の足て／をそゆうたりけるされとも兵あまたおちあひて行いへをい／け取にしけれしやうめいはうち物の上手といへ共たち四十二か所／きられけり行家のたちは一かしよもきられすさる程に／ゆきいへひたいのきすゆひなとして馬にのせ奉りさきに／おつ立てゆきけれはゆきいへ水かほしきとの給へは水をすゝ／めなとしてのほりけるかあるかはらにてちうせられけると／そ聞えしたの三郎せんしやうよしのりをはいか国（ママ）の住」（28オ）人はつとりの六郎時定に仰つけらるときさたにとりこめ／られてしかいしてんけりこのやう関東へ申されけり今頼朝かか／たきになるへきものはおほえすとの給ひなからほうてうのもと／への給ひのほせられけるはへいけは一門ひろかりしかはしそむさ／ためておほかるらんよりともか末代のかたきになし給ふな一／人もあらんをはたつねいたしてうしなふへしと仰られつかは／されたりけれはへいけの君たちたつねいたしたらんものには／そせうもしよまうもこふによるへしとひろうせられけり京／中の上下あんないそしりたりしよまうはおほしけんしやうか／うふらんとてたつねもとめおとなしきをはくひをきりおさ」（28ウ）なきをはみつにいれ土にうつむあまりの事にははらをさかすな／ときこえけり色しろくみめよきおさなきものをはこれは／なにの中将のわかきみかれかの（ママ）少将のきんたちなといひてた／つねとりて奉るちゝはゝかなきかなしめはあれはめのとか／申かいしやか（ク）申なと云て一ちやう平家のきんたちにてなき／をもめしとりけるあさましともおろかなり／

六代御せんの事

かまくらとのより仰られけるは小松三位ちうしやうのしそく六／代

とて年もおとなしきうへ平家のちやく〳〵正とうなりよく／〳〵たつねとりてうしなふへしとのたまひけれはほうてう」（２９オ）いかにもしてたつねいたさはやとさかしけれとももとめ／かねてつゐにくたらるへきにて有けるに人の心のうたてさ／はあるくれほとに女房一人六はらへ参りて申けるは是よりに／しへんせう寺のおくをくら山のふもと大覚寺と申所にこそ／小松の三位中将とのゝ北の方わかきみ姫君ひきくしてこ／とし三年すみたまふとそをしへたるほうてう大きよろこ／ひてやかて人をそつかはしける男はあしかりなんとてしんしやう／なるねうはうにて見せらる女はうかしこにゆきてかたは／らにたゝすみてみる共しらすわかきみしろきゑのこのみ／すの内よりはしりいてたりけるをとらんとてつゝいて出給ひたり」（２９ウ）けれはめのとの女はうおなしくはしりいてあなあさましや／たうし関東の源二位のたいくはむ北条とかや申もの上り／て平家のしそんをたつねいたしおとなしきをはくひをきりおさ／なきをは水に入候なりわかきみはへいけのちやく〳〵にておはし／ませはさこそたつねも参らすらめ人めもそらおそろしうちへ／いらせ給へとていたき入奉るなか〳〵はうへんのものにいひしら／するかとおほえしつかひかへりてこのよしを申おなしき／廿一日のさうてうにほうてうか五百よきはかりにてゆき／むかひ四方うちかこみまつ人を入てくわんとうのたいくわんほう／てうの四郎と申ものにて候これに小松の三位中しやうとのゝ」（３０オ）わか君六代御せんと申人のわたらせ給ふよし承て御むかへ／にまいりて候と申けれはゝうへ上下のねうはうたちさい／とう五さいとう六とてきやうたいありけるもあまりに／あさましさにつや〳〵物をたにも申さすはゝ上めのとのねう／はうはたゝ我をさきにうしなへとてもたへ給ひけりことし三と／せこゑをたにもたかふわらはす物をたにもはか〳〵しくい／はさりつる人〻の今はありとしあるものともこゑをとゝの／へてなきさけふほうてうもなさけ有けれはさこそおはすらめ／とて御はうにもせめいらすつく〳〵とそまちゐたるさる程に／日もくれけれは又人を入て別の御事は候ましたゝとう〳〵い」（３０ウ）たし参らせさせ給へよもいまたしつまり候はねはひか事あ／らせしとて候御むかへに御こしも候とう〳〵いたし参らさ／せ給へと申されけれはさいとう五母上の御前にまいりてい／まはなにとおほしめすともかなふましさのみふしとものま／ち奉るも心もとなく候と申けれはわかきみ申されけるは／つゐにけにものかるましく候はゝとう〳〵いたさせ給へ内入／てさかす物ならはをの〳〵うたてけなる御ありさまをもみ／見えさせ給ひなんすしはしも候はゝいとまこふて参りてこ／そみえ参らせ候らはめと申されけれはめのとの女房御くしかき／なてなとしてしやうそくせさせ奉る母うへはくろきのすゝの」（３１オ）ちいさきをとりいたしていかにもなり給はんまてはこれにて念／仏申てちゝのわたらせ給はん所へまいれよとの給へははゝ御せん／にこそたゝいまわかれ奉り候とも父のわたらせ給ふところへ／参りて見奉り候はんするこそうれしく候へしはらくも候はゝ／いとまこふてまいり候はんとていて給ふいもうとの姫

君／あに御せんのたゝひとりわたりたまふには、御せんもいら／せ給へわれらもまいらんとしたひ給ひけるをめのとの女はう／なく〳〵とりとゝめ奉る六代御せんは十二になり給へ共よのつね／の人のこの十四五よりおとなしくわりなくみめかたちゆうに／いたいけしてさか〳〵しくおはせしかはふしによはけを見え」（31ウ）しとやおさふる袖の下よりもあまりて涙そこほれけるさ／てもるへき（ママ）ならねはほうてうかゝせてきたるこしにのりて／そ出給ふさいとう五さいとう六かちはたしにてこしのともに／そはしりけるほうてうのりかへともおろしてのせけれともの／らすさいこの御ともにて候へはくるしく候へきとて大覚寺／より六はらまてはたしにてこそまいりけれわか君のはゝ上めの／とはむなしきあとにとゝまりていかにせんとそもたへこかれ／給ひける人の子はめのとなとのもとにをきて時さみる事も／あり是はうみおとしてよりのち一日へんしも身をはな／たすよのつねの人もたぬ物をもちたるやうにおほえてふたり」（32オ）か中にてそたてつるものをたのみをかけし人にもあかてわか／れにし後はこれらをさうにをきてこそなくさみつるにひと／りはあれともひとりはなしけふより後はいかゝせんおひたつま／まには三位中将殿にゝ給ひたれは昔の人のかたみにも／見つるものをいつの世にわするへし共おほえぬそや日比はは／せ寺のくわんをんをこそたのみ奉りたるにちやうこうは仏も／かなはせ給はさらんなれはちからをよはぬ事にこそおさなき／をは水に入土にうつむときこゆれはこの子おとなしけれはき／りこそせんすらめ夕さりもやきられんすらんあかつきに／てもやあらんすらんとてなかき夜すから露もまとろみ給」（32ウ）はねはその後夢にたにも見えたまはすかきりあれはけいしんあか／月をとなへてなかき夜もはやすてにあけにけりさいとう五／御文もちて参りたり母上已下の女房たちおきあかりこゑ〳〵に／いかにや〳〵との給へはけさまては別の御事ももわたらせ／たまひ候はす御ことはにて申せと候つるはわひさせ給は／てわたらせ給ふよし申せとこそ仰せ候つれとて御ふみ取／いたし奉るこれをあけてみたまへはおほつかなくなおほしめ／されそ今まてはへちの事も候はす御心くるしくな思召／候そ夜のほともまたそれには何事かわたらせおはしまし候／らんいつしかたれ〳〵も御こひしくなとよにおとなしやかに」（33オ）かゝれたりむさんのふみのかきさまやとてはゝうへこれを御／かほにをしあてゝふしつみ給ひけりなみたにくれてみ／つくきたてともそこはかとはおほえねとも思ふ心をしる／へにて御返事かきてたふさいたう五これを給て六はらへかへり参る／わか君もこれを見給てなみたにせはせたまひけりめのとの／女房はあるにもあらねは月いてゝなきありく程にそのへん／ちかき人とふらひて申けるはこのおくにたかを寺と申所に／もんかくはうと申ひしりこそたつとき人にてかまくらとのゝ大／事にし給ふなれこの程も上らうの御子がなてしにせんとて／ほしかるとこそきけと申せはうれしき事をきゝつる物」（33ウ）かなとおもひて大覚寺へもかくとも申さすたゝひとり一度も／しらぬたかを山のおくへそたつね行ひしりにたつねあふて申

／けるはちの中よりおほしたて参らせて今年十二にな／り給ふわか君の世にうつくしくわたらせ給ひつるをきのふふ／しにとられて候そやこひうけて御てしにし参らせさせ給へと／申ければひしりあはれにおほえてしさいいかなる事そとと／ひ給へは今は何をかかくし参らせ候へき小松三位中将とのの／わかきみにてわたらせ候と申けりもしこひうけたらは此／寺にをき奉り給ふへきか申にやをよひ候御命たにいき／させたまはゝいかにも御はからひにこそと申ければさて」（34オ）ふしはたれとか申ほうてうとかや承り候つるこはいかにしらぬ／人かとこそおもひたれいかさまにも行てたつねみんとてやか／てつきいてぬ一定とはおほえねともひしりかくいひてけれは／すこし心ちいてきて大覚寺に帰り参りて北の方の御前に／て此よしを申けれは母上あはれさあれかしなこひうけていま／一たひ見せよかしとそなかれけるほうてうもと（ママ）へ行て事の／やうの給ひけれはかまくらとのよりとゝ仰せを承てあひかま／へて平家のきんたちたつねとりてうしなふへきよしおほ／せかうふりて候間おさなき人さをはおほく尋ねいたして／うしなひつれとも此若君をはさいち（ママ）よをさたかにしらすし」（34ウ）てすてにむなしくくたるへきにて候つるを一昨日おもはさ／るにきゝいたしてむかへ奉りては候へともあまりにみめかた／ちうつくしくて心さまいたいけしておはしませはいつくにかた／なをたつへし共おほえ候はていまゝてまほり奉り候と申け／れはひしりいつくにまし〳〵候そ見奉り候はんとの給へは／わかきみのおはします所へ入奉る見給へはふたへおりもの／のひたゝれにせいかうの大くちきたまへりもとゆひきはより／はかまのけまはしにいたるまて世の人とみえ給はすこよひう／ちとけね給はすとおほえてすこしやせ給へりしろくうつく／しき御てにくろきのすゝのちいさきをぬきてもちた」（35オ）まふかひしりをみて何とかおもはれけん涙をさつとうかへ給ふ／をさらぬやうにもてなし給へはひしり中〳〵めもあてられす／とてなみたをゝさへて立かへる末の世にいかなるとくとなる／ともいかゝこれをはたすけさるへきとてほうてう殿に申さ／れけるはなとやらんこのわかきみを一めみるよりいとをしくて／身にかはらんと迄おもへは源二位とのに申うけて見候はゝや／と思ふなり廿日をまち給へひしりかま（か）くらとのにちうを／いたしてこうを入奉り候し事候へは御しん（ママ）せられし事な／れは今さら申にをよはねともこ下野殿のかうへくひに／かけ奉りて千万里のみちをわけらうれうのさたにも及はす」（35ウ）あしからはこねをまたにはさみ七八日に下りのほりゐんちう／をうかゝひて院せんりやうし申給はりふしかは大井川たか／せ二むらにいたる迄いのちをうしなはんする事もとゝ／なりをよそ契りをおもむしていのちをかろくしきさり／ともかまくらとのしゆりやう神つき給はて昔の事を忘れ給は／すはなとかこの若君あつけたまはさるへきかまへて廿日を待給／へとの給へはほうてうこの人はへいけちやく〳〵の正とうなりい／かにも尋ねいたしてうしなひ奉るへきよし仰せくたさ／れ候へはへんしもをきたてまつるへきにはあらねともあまりに／いとをしくおもひ奉れはまちこそし奉らめとう〳〵と

の給へ」（36オ）はやかて立にけりさいとう五さいとう六このひしりをたゝし／やうしんの仏のやうに思ひ奉りて手を合せてそおかみけ／る二人つれて又大かく寺へ参る人さなけきにしつみておはし／けるにこのよしを申せは母上めのとはよろこひて我らか此／日比くわんをんにあゆみをはこひ心つくしして祈るいのりは／こゝそかしかまくらのゆるされはいかゝあらんすらんおほつか／なけれともまつしはしのいのちはのひぬるにこそとて皆／よろこひなきし給てはせのかたをふしおかみ給ひけり扨／ひしりは関東の源二位とのに大せつに申へき事有てくた／るなり上下廿日にはすくましとて一のてしかくもんをくし」（36ウ）てそくたりけるかんちうなれはみちすからなんかん申はかりも／なけれともさるひしりにて事ともせす夜を日につき／ておなしき三十日に下ちやくくわんとうにてやかてたひのし／やうそくなから源二位とのゝ御たちへむかふ馬にのりなから／大ゆかにうちよせておるけん二位とのもむかく下たるとき／き給ひていそき出あひ給ふなに事にくたり給へるそとの／給へけれは大事に申へき事候てなりさても一年いつにて／奉りしかうへはことのゝにてはあらぬなりこれこそまこと／のこさまのかうのとのゝくひよとて首にかけたるけさふ／くろよりとり出したるを見たまへはひたいにしろかねのふたにて」（37オ）めいあり又きすあり此きすはいかにとゝひ給へはそれはくひ／とられてしやうへのほり給ひたりし時大政入道これはてうてき／なりいかてかてにかけかたなをあてゝはあるへきとてひた／いにかたなをたてたりしそのきすとこそ承れとのたまへは／源二位とのしゆくいふかくしそむをほろほさはやとおもひたま／ひけりかまた兵衛まさきよかくひかくもんかくひにかけ／させたりけるをこれをはたれにかとらすへきとのたまへは／女はうのよにしんしやうなりけるかなく〳〵出てこれをう／けとるこれはたれそととひけれはまさきよかうたれし時七／さいになりしむすめなりとそ申けるこのかうへにはあかゝねの」（37ウ）ふたにめいをかきてひたいにうちたりけりその後ひしり六代／こせんの事申いたされたり源二位殿の給ひけるは頼朝を世／にあらせ給ふほうこうわすれかたくおもひ奉れは身にた／へん程の事をは承るへしといへ共かつはひしりもよりとも／か身をもて思ひしり給へかしこの六代は平家ちやく〳〵の／正とうなりたすけをきてはよりともかしそむの末をはなに／となれと思ひたまふそされはこの事にをきてはふつとか／なふましとてそうしてしようし給はすもんかくまことにこ／とはりとはおもひなからさかはりたましいの人にて御へんを今／世にあらするはもんかくかはからひにてこそあれとてさま」（38オ）〳〵の事共かたる程に日かすをかさねけり大覚寺には人め／も草もかれはてゝかなしさいとゝつきもせすかくて夜の／あくるをも日のくるをも心もとなくてあかしくらしまち給ふ／程に廿日のすくるは夢なれやひしりはいまたみえさりけりた／のめし比もすき行は十二月十五日にもなりにけりほうてう／さのみ都にて月日をゝくるへきにあらす明日くたりなん／とてひしめきけりさいと五さいとう六てをにきりてひし／りはいまたみえす思ふはかり

もなかりけり二人つれて又大覚／寺へ参てやくそくの日かすははやすきぬほうてうあかつき／すてにくたり候なにとかつかまつり候へきと申けれは母上」（３８ウ）されはこそよくてをそきかあしくてそをそかるらんよくて／をそくはつかひをまつのほせてんものをかまくらの源二位とか／やも我身にて思ひしるに大事の人の子なりたすけんともよ／もいはしあはれほうてうとかやかもちひつへからむ人のひし／りのゆきあはん所まてこのこをくしてくたれといへかし若／よくてものほらんにむなしくさきにうしなはれむ事をは／いかゝすへきこの子はとくうしなはれんするけなるやかてあ／かつきの程とこそみえさせおはしまし候へこのほと御とのゐ／仕り候つるふしともかよに御残りをしけに思ひ参らせて／念仏申ものも候涙をなかすものも候とそ申けるさて此子」（３９オ）はいかにしてあるそ人の見参らせ候ときは御すゝくらせ給てさ／らぬやうにもてなさせおはしまし候か人の見参らせ候はぬと／きは御なみたをなかさせ給てよに御心ほそけに候と申けるけ／にもこよひはかりの命とおもひてさこそかなしく思ふらめ／ゆめをは人のたのむましきにて有けるこのあかつき六代／かしろきひたゝれにしろき馬にのりて是へきたりつると／見えつれはくわんをんのまほらせ給ふにそと思ひたれはさ／やうにてうしなはれむするか見えけるにこそせめて夢／なり共しはしもあらてやかてさめぬる事こそいとゝかなしけれさ／てなんちはいかなにはからふそとの給へはこれはたゝいつく迄も御」（３９ウ）とも仕り候ていかにもならせ給ひ候はゝけふりとなしまいらせて／御こつをとり参らせ高野こかはにもこめまいらせ候はんとこ／そ存候へと申けれはさてはうれしくも思ひたりさらはと／くかへれこの子かおほつかなく思ふらんとてかへされけり／十二月十六日のうのこくにほうてうすてにくたりけり若／君をは御こしにのせ奉るういむしやうのさかいをけふこえな／むすとてみる人袖をしほりけり都をはくもゐのよそに／かへりみてつかのまもはなれかたかりつるはゝ上めのとの女はう／にははなれて見もなれぬゑひす共にくせられてけふをか／きりに都を出あつまちはるかにおもむき給ひけん心の内」（４０オ）をしはかられてあはれなり駒をはやむるふしあれはわかくひうち／にかとむねさわきかたはらにさゝやくものあれは今やかきり／ときもをけすまつさか四の宮かはらかと思へ共せき山をも／打こえて大つのうらにもなりにけりあはつかのちかと思へ共／けふの日もはやくれにけりかゝみのしゆくにそつき給ふ其／日もきられすしてくれにけりさいとう五さいとう六馬に／のれといへ共のらす物をたにもはかすさいこの御ともなりと／思ひけれはちの涙をなかしつゝめもくらくなりけれはきやう／たい御こしに取つきあしにまかせて下りけるこれらかちゝ／さいとう別当さねもり小松のおとゝも草の陰にても如何に」（４０ウ）あはれとおほすらんとそみえさるほとに年もすてにくれ／なんとすいそけやとて馬のあしをそはやめけるみのおはり／三河とをたうみも打すき〳〵日数をふれはするかの国千本／の松原にそかゝりけるまつのもとにこしかきすへしきかは／しきてわかきみおろし奉るほうてうさいとう

五さいとう六を／かたはらによひはなちて今はをの〳〵これよりかへりのほり給へ／との給へはこゝにてうしなひ奉るへきそむねうちさはき／ものも申されすしはらく有て北条わかきみの御そはにより／てひそかに申けるはひしりやのほられ候とそむしてこれま／てくし奉りて候へともそのきなく候一こうしよかんの御事」（41オ）にてわたらせ給へはたれ申され候ともかまくらとの御もちひ／候はしと存候あしからのあなたへくし奉りて候と聞召さ／れ候てはあしかるへく候あふみの国にてうしなひ奉りぬとひ／ろう申へしと申されけれはわか君物をはの給はす打／うなつき給てさいとう五さいとう六をめしてなんちは／大覚寺へ参りてうしなひたりとは申へからすかまくらへを／くりつけて人にあつけられたるをみてのほりて候と申へ／しうしなひたるときゝ給ひなはいたくなけかせ給はん／するなりとの給へは二人のものともなく〳〵申けるは君に／をくれまいらせて都へかへり参るへしともおほえ候はすとて」（41ウ）つきせぬ涙せきあへすあひかまへてまいりつきてまつ御心やす／きやうに申てよく宮つかへ申へしとおとなしやかに仰られけ／れはほうてうをはしめて上下袖をそぬらしけるかのゝくとう／重持に御首うつへしとの給へはたちをもて御うしろへより／たりけれ共たちをもぬかさりけれはほうてうをそしとめを／見あはせけれはしけもちなみたをはら〳〵となかし申けるは／いつくにか打あて奉るへしともおほえす候余のものに仰つけ／られ候へと申けれはあれきれこれきれとてしはしはきりてを／ぞえらはれけるかゝりける所にすみそめの衣はかまきて／文ふくろくひにかけたるそあ*しけなる馬にのりてはせのほ」（42オ）るもんかく上人のてしなりしもへに行あひてあの松原／に人のおほく見ゆるは何事そととへは北条とのこそめし人とて／なのめならすすうつくしきわか君のくひをたゝいまきり給ふへ／きとておりゐられて候と申けれはあなあさましとおもひて／むちをうちてはせのほりけるかあまりの心もとなさにき／たる日かさをぬいてさしあけてそまねきけるほうてう／見つけてこゝにはせきたる法師はしさいありとてまち給ふ／所にちか〳〵とははせつきて馬よりとひおりわか君ゆるさ／せ給ひたりひしりもたゝいまのほり候かまくらとのゝみけうしよ／是に候とてとりいたして奉るこれをあけて見給へは」（42ウ）

小松三位中将これもりのしそく六代たつね出されて候なるたか／をの上人しきりにあか*づるへきよし申され候うたかひなく候／うへはあつけ奉るへく候

ほうてうの四郎とのへ　　頼朝

と御し／ひつにてそあそはされたるたかくよまね共神妙〳〵と／てうちをきけれはさいとう五さいとう六は申にをよはす北／条か家子らうとう共もみなよろこひの涙をそなかしける／去程にもんかく上人つといてきたりわか君こひうけ奉／りたりとてけしきまことにゆゝしけなりほうてういかに／今迄との給へはもんかく申されけるはこのわか君のちゝ三／位ちうしやう殿はちやく〳〵正とうなるうへしよとのかつせん」（43オ）の大将也世の末あしかるへしとて

かなふましきよしをかたくの／たまひつるをもんかく日比のほうこうたてしんていをのこさす／申て候つる程にえんいむ仕り候とそ申されける北条廿日／と御やくそく候しに日かすもすてにすき候つる間御ゆるし／なく候と存候てくたりて候かしこくあやまち仕り候らんにと／その給ひけるさいとう五さいとう六このあひたの御なさけ御／はうしにあつかり候つる御事しやうかいのうちには忘れそん／すへからす候と北条のまへにてなく〳〵申けれはまことに／さそおもはれ候らんとて鞍をき馬二ひきにのりてのほ／り給へとてきやうたいにたひにけりさてほうてう若君にいと」（４３ウ）ま申されけれは若君物はの給はねとも世になこりおしけなる／御けしきなりけれはほうてうもあはれけにおもひて一日も／をくり参らすへう候へ共かまくらとのにいそき申へき事候／とて四五ちやうはかりうちをくり参らせてくたられけりひしり／は若君うけとり奉りていそきのほり給ふ程におはりの／あつたのへんにて年もくれぬあくる正月十五日の夜に／入て京へつき二てういのくまいはかみと云所にひしりの宿はう／ありしはらくやすめ奉りてその夜大覚寺へおはします見給／へはたておさめて人もなしわか君はかひなきいのちのおしか／りつるも母上に今一度みえたてまつりみ奉らはやと思ひ」（４４オ）てこそのほりつるにさらはありしまつはらにていかにもなる／へかりつる物をとてなかせ給ひけりいかさまへいけのゆかりと／てふしともとりたてまつりたるやらんさらすはおもひのあ／まりに水のそこへも入たまひぬるにやとそのたまひける／としころかはせ給ひけるいぬわかきみの御こゑをきゝしり／参らせたりけるにやつちのく*いつれよりはしりいて、おをふりて／むかひたてまつるよになつかしけにうめきけれはいかにを／のれは有けるや人さはいつかたへそととひ給へともこたへ申／さすせめての御事にやとそみえ給ふさいとう五ちかきあ／たりのものにとひけれとも夜はふけぬはか〳〵しくこたふるも」（４４ウ）のもなかりけりある人の申けるはとしのうちより大仏まうてと／て御出候しかやかて長谷寺へ御まいりとこそ承り候しかと申せは／その時あんとし給てさいとう五さいとう六ついちをこえて／中へ入て門をひらひて入奉るけにもちかく人のすみた／る気色もみえすわか君はひしりたかをへくし奉るさいと／う五長谷寺へまいりて尋ねあひ奉りてこのよしを申け／れは母上たゝ夢の心ちし給ひてひとへにくわんをんの大し大／ひの御ちかひはつみあるをもつみなきをもたすけ給ふ事な／れはくわんをんの御たすけとそおほしけるよろこひの申あけ／し給ていそき下かうせられけり大覚寺へつき給ひて若君よ」（４５オ）ひ出し参らせてかいたうの有さまとひ奉らるかなしかりつ／る事ともおほせられかみかきなて、うれしなきをそせき／させ給ひけるやせおとろへたまひたりけれはしはらくこれに／ていたはり奉りたくは思召けれ共よその聞えもそらおそ／ろしくひしりのおもはんところも心もとなしとてやかてた／かをへをくり奉らる上人なのめならすいとおしき人にしたてま／つりてへんしも立はなれたてまつらす母上の大覚寺にかす／かなる御住ゐをもつねにとふらひ奉るさいとうきやう／たいをもあは

れみふちせられける／

大原御かうの事」（４５ウ）

さる程に法皇女院のかんきよの御住ゐも御らんせまほしく思／召されけれはおなしき二年の春の比御幸あるへしとさ／ためられたりしか二月三月のころはよかんなをはけしくみねの／白雪きえやらてたにのつらゝもうちとけすはるすき夏／のはしめにもなりしかは卯月廿日ころにそ思召たゝせた／たせ（ママ）給ひけるしのひたる御幸なりけれ共御ともには徳大寺／花山院土みかと已下公卿六人殿上人八人その外ほくめん／のともから共せう〳〵めしくせられけり大はらとをりに日よし／のやしろへとひろう有て彼きよはらのふかやふかつくりたりしふ／たらく寺をのゝくわうたいこうくうの御きうせきなとゑいらん」（４６オ）有てそれより御車をとゝめ御こしにぞめされけるはしめた／る御幸なれは御らんしなれたるかたもなしきうたいはらふ人も／なくしんせきたえたるほともかつ〳〵おほしめしられけりぜり（ママ）／ふの里のほそ道もさこそは御ところせくおほしめされけめ／とを山にかゝる白雲はちりにし花のかたみ也青葉に見ゆ／る木末には春のなこりそおしまるゝしやつくわうゐんは岩に／こけむしてふるくつくりなせるせんすいこたちよしあるさま／の御たうなりいらかやふれてはきりふたんのかうをたきとほそお／ちては月しやうちうのともし火をかゝくともかやうの所をや／申へきみねの青柳露をふくみたまをつらぬくかとうたかは」（４６ウ）れいけのうきくさなみにたゝよふてにしきをさらすかとあや／またる中島の松にかゝれる藤なみ山郭公の一声もけふ／のみゆきをまちかほなりさらてたにみ山かくれのならひな／れはおほはらやもりの下草しけくあをはにましるをそ桜／はつはなよりもめつらしくみつのおもにちりしきてよせく／るなみもしろたへなりほうわう／

池水にみきはのさくらちりしきてなみのはなこそ／さかりなりける

女院の御あんしついた屋のあさましけなるに／けふり心ほそくたちのほりてかきにはつた朝かほはひかゝり／へうたんしは〳〵むなし草かんえんかちまたにしけしともおほ」（４７オ）えにはにはよもきおひしけりれいてうふかくとさせりあ／めけんか（ママ）とほそをうるほすとも又いひつへしすきのふきめも／まはらにて時雨も霜もを露（ママ）もる月かけにあらそひてた／るへし（ママ）ともみえさりけりうしろは山まへは野へいさゝをさゝに／風そよき世にたゝぬみのならひとてうきふしけき竹は／しら都のかたのことつてはまとをにゆへるませかきやわつか／に事とふ物とてはみねにこつたふさるのこゑしつかつま木／のをのゝをとこれらか音つれならてはまさきのつゝらあを／つつらくる人まれなる所なりほうわう御あむしつにいらせ給／ひてや人や有〳〵とめされけれとも御いらへ申ものもなしやゝ」（４７ウ）有ておひおところへたるあま一人出てさふらふとそ申ける女院／はいつかたへ御かうなりたるそと仰せけれはこのうへの山へ／花つませ給ひにとそ申ける花つみて奉るへき人もつき奉／らぬにやさこそ世をいとはせ給はんからにならひなき御わさい／たはしくこそ

と仰せらけれ*れはこのあま涙をなかして申ける／は今めかしき申事にてはさふらへ共しやかは中てんち／くのあるししやうほん大わうの太子なりされともかやしや／うを出させ給ひたんとくせんにいらせ給ひたかき峯には／たきゝをとりふかき谷には水をむすひゆきをはらひし(ママ)／ほりをくたくのみならすなんきやうくきやうのこうつもりて」（48オ）つゐにしやうかくならせたまひきされはさきの世のしゆくせん／をもこせのしゆこうをもおほしめしさとらせ給てしやしんの／きやうをしゆしましまさんは何のさはりかさふらふへきとそ／申けるほうわう此あまのけいきを御らんせらるゝにあさ／の衣のよにうたてけなるをそきたりけるふしきやあのけし／きにてもかやうの事を申よと思召なんちはいかなる者そと／御尋ねあれはこのあま涙にむせひてしはしは御返事も／申さすかさねていかにとおほせらるれはなみたをゝさへて／申けるは是は平治にのふよりの卿にうしなはれし少納言入道／しんせいかむすめあはの内侍と申ものなりとそ申ける内侍」（48ウ）は二位のむすめなりきの二位は又法皇の御めのとこれは御めのとこ／なりしかは朝夕れうもん(ママ)にちかつき奉りしを御らんしわ／すれさせおはしましにけりいまさら夢かとおとろかせ給ふ／にも御なみたせきあへさせ給はす御しやうしをひきあけ／て御らんすれはらいかうの三そむ東むきにましまし中そむ／の御手には五色のいとをそかけられたり仏のひたりにはふ／けんのゑさう右にはせんたうくはしやうのゑいならひにせん／ていの御えいをもかけられたまへり御前のつくえにはしや／うとの三ふきやう八ちくのめうもん九てうの御しよなともをか／れたりくわんきやうはあそはしかけたるとおほしくてはんくわん」（49オ）はかりそまかれたるしやうしには諸経のようもんどもし／きしにかきてをされたり／

にやくうちうこつしやうむしやうしやうと／
いんせうみたくわんりきしやうあんらくこく／

なともありみかはの入道かしやうりやうせんのふもとにてつ／くりたりし／

せいかはるかにこうんのうへにきこゆ／
しやうしゆらく日のまへにらいかうす／

といへるしもあり又かたはらには／

一生はゆめのことしたれか百年のさかへをこせんはん」（49ウ）しはみなむなしいかてかしやうちうのおもひをなさん身／はこれしくれにそむる紅葉はいのちは草はにむすへる／露むしやうの風一たひさそへはうたいの身よもにちる／

なともあそはされたり又そはには女院の御手跡とおほしくて／

かはくまもなきすみそめのたもとかなこはたらちめかそ／てのしつくか

そはなるしやうしをひきあけ給ひたれは御しん／所とおほしくてたけの御さほにかけられたる物はあさの御衣／にはかみのふすま昔のらんしやのにほひをひきかへてそらた／きものとかほるはふたんかうのけふりなりかのしやうみやうこ／しのほうちやうのしつに三万

二千のゆかをならへ十方仏をし」（５０オ）やうし奉られけんもこれにはすきしとそみえし中にも／こ徳大寺の左大臣しつていこう／いにしへは月にたとへるし君なれとそのひかりなきみやま／への里

となく〳〵ゑいせられたりけるにそみな人袖をぬらさ／れけるそのゝち上の山よりこきすみそめの衣きたるあま二人／木のねをつたひておりくたる一人はしきみつゝし藤の花はな／かたみに入てひちにかけたり一人はつま木にわらひおりそへ／ていたきたりはなかたみひちにかけたるはかたしけなくも／女院にてそわたらせ給ひけるつまきもちたるはせんていの／御めのと大納言のすけとのこれなり女院は御幸なりたる由」（５０ウ）を御らんせられてくはんねんのとのうちにはせつしゆのくはうみ／やうをこしせうみやうのとほそのまへにはしやうしゆのらいかうを／まちつるに思ひのほかに御幸のなりたる心うさよ霧霞／ならはたちもへたて露霜ならはきえもうせなはやとそ思召／されけるよひ〳〵ことのあかの水むすふたもともほしあへす／あかつきおきの袖のうへ山ちのつゆもしけくしてしほた／れ給へる御すかたなれはにうゐん御あんしつへもいらせ給／はす又うしろの山へもたちも帰らせ給はすあきれてたゝせ／給ひたりけるにないしのあまふと参りて御花かたみをは／給ひけりうき世をいとひまことのみちに入せおはしま」（５１オ）さんうへは何の御はゝかりかはわたらせおはしますへきはや〳〵御／けむさん有てくはんきよなし参らせさせ給ひさふらへと申／けれは御心つよく思召返して御あんしつへいらせ給てあさ／の御衣ひきかつき給てなく〳〵御前に参らせ給ひけれ／とも法皇もおほせ出さるゝむねもなし女院もまた申／出させ給ふ事もなしやゝ有てほうわうかゝる御有さまに／迄はいかてかたれおもひより奉るへきさてもたれかは事と／ひ参らするとおほせられけれは女院とき〳〵をとつるゝか／たとてはれいせん（ママ）の大なこんの北の方七条のしゆりの大夫かう／へなとこそさふらへさて（ママ）はたれかはとふらひさふらふへき昔は」（５１ウ）この人さな（ママ）さけをかゝらん物とは夢にたにもおもひこそよらさりし／かとて御涙せきあへさせ給はすにようゐん又申させ給ひけるは／むかし人さにをくれさふらひぬる事は中〳〵なけきの中のよろこ／ひなりその故は五しやう三しようのくをはなれしやかのゆいていに／つらなりひくのせいかいをうけぬれは三時に六しん（ママ）をさんけし／一門のほたいをとふらひさふらなり（ママ）永〳〵しき物かたりては／候へとも人はしやうをかへてこそ六たうをはみると申に此みはい／きなからこそみてさふらへと申させ給ひけれは法皇は是こそよに／ふしんにおほえ候へいこくのけんしやう三さうはさとりのまへに六道／をみ我朝の日さう上人はさわうこんけんの御ちかひによりて」（５２オ）めいとにいたりけるとこそ承れまのあたりしやうをかへすして／六道を御らんせらるる事いかゝとの給へは女院さる事にては／さふらへ共六道のありさまあら〳〵なすらへ申へし此みはこしやうこく／のむすめにてんしを子にもち奉りしかは大内山の春の花も／心にまかせてなかめ九重のくもの上の月をももろ共になかめ

せ／いりやうてんのすゝしき夏ふつみやうの年の暮にいたるまてせう／ろく已下の大臣公卿にあふかれしありさまは四せん六よくのた／のしみ八万のしよてむにいねうかつかうせらるらんもこれにはす／きしとこそ覚えさふらふか寿永の秋木曽義仲とかやに都の／中をせめ出されにしのうみ浪路はるかにたゝよひしありさま」（52ウ）てん人の五すいもかやうの事にこそとおほえさふらひしに／九国をもこれよしと申ものにをひ出され山野ひろしとい／へ共やすまんとするに所なくたみのちからもなけれは御みつ／きものもそなへすたま〳〵くこは参りたれとも水もたやす／くなし海にうかへりといへ共それ塩なれはのむにをよはすはん／すいうみにありのまんとすれはやうくはとなるらんかきたう／のしゆしやうのかなしみもおもひしられさふらひきうらの／松原にしろきとりとものむれゐるをみてはかたきのはたか／ときもをけすあかつきかりかねのすくるを聞て（ママ）はくさの舟／かとおとろかるかくてひちやう（ママ）のみつしまはりまのむろ山二と」（53オ）のいくさにかちぬとて人さすこし色をなをしてさふらひし／程に又つのくに一谷とかやにて一もんの人とも十よ人むねと／のさふらひかすしらすほろひさふらひしかは人さのなをしそ／くたいすかたもみえすもろ〳〵のけた物のかはを身にま／とひくろかねをあしてにまき朝夕はたゝいくよ（ママ）はひのたえさり／しありさまたいしやくらこわうのしゆみのみねにしてたかひ／にいせいをあらそふらんもかくこそはとおほえさふらひしか夜／はすさきの千鳥とゝもになきあかしひるはいそへのなみ／にそてをぬらしさふらひし程に又なかとの国たむのうら／とかやにしてせんていをはしめ参らせて今はかくこそとて海に」（53ウ）しつみさふらひしかはのこりとゝまるものは舟そこにいふ／せられきりふせられをめきさけひさふらひし有さまはけう／くはんのかなしみも是にはすきしとこそおほえさふらひしか／さても都へかへりのほりさふらひし時はりまのあかしの／浦につきてさふらふへし夜のゆめになきさにそひてにし／の方へゆけはるりをかさりたるたかきろうのさふらふに／参りて見候へはせんていをはしめ参らせて一門皆なみゐてとう／をんにたいはほんをよみさふらふをこゝをはいつくそとと／へは二位のあまとおほしくてりうくうしやうと、申とお／ほえめてたき所にもくはあるかと、へはいまたちくしやう」（54オ）のくをはなれぬ所にてさふらへはなとかくるしみのなくて／さふらふへきあひかまへてこせをとふらひて給はせ給へと／申とおほえて夢さめ候そその、ちはつねにたいはほんを／よみて人さのほたいをとふらひさふらふなり扨は我みの命／おしからねはあさなゆふなこれをなけく事もなしたゝい／つの世迄忘れかたきはあんとく天皇の御おもかけ心のみ／たれぬさきといそかるゝはわうしやうののそみはかりなりと／申させ給ひけれはほうわうをはしめ参らせてくふの公卿／殿上人みな袖をそしほられける猶も御名残はつき／せされともやう〳〵せきやう西にかたふきてしやつくわう」（54ウ）ゐんのかねの音けふもくれぬとおとろかれ日も入あひになりしか／はほうわう都へくはんきよならせたまふ女院はる〳〵とみをく／りまいらせさ

せ給て御あんしつへ入せ給ひける折ふし山ほ／とゝきすしきりにをとつれすきけれはにようゐんかくそ／思召つゝけらる／

いささらはなみたくらへん郭公われもうきよにねを／のみそなく

その丶ち法皇（より）もつねはとふらひ参らさせ給ひ／けるとそ承るにによう院はいよ〳〵御念仏をこたらせ給／はすしてつゐに龍によか正かくのあとをひいたいけふにん／の往生をともなはせたまひけるとそ承るあはれなりし」（55オ）事なり／

六代御せんしゆつけの事

去程に六代御せんは十四五にもなり給へはいよ〳〵みめかた／ちうつくしくてりかゝやくほとにおはせしかはよのおそろし／さにとく御くしおろさせたまへかしと母上のたまひけるかよ／の世にてたにあらはたうしはこんゑつかさにてこそあらま／し物をとのたまへけるそあはれなるかまくらとのおほつかな／き事におもひてつねはもんかく上人のもとへいかにこれ／もりの子は昔よりともをさうし給しやうにてうてきをも／たいらけおやのはちをもきよむへきものかとの給へはもんかく」（55ウ）の御返事にはこれそこもなきふかく人にて候なりうしろめ／たくおほしめすましと申されけれともこのひしりりむ（ママ）ほんを／こさせてかたうとせんする人にてある物をたゝし頼朝か／一この程はいかてかなはるへきしそんのすゑはしらすとその／給ひける六代御せんこの事ともをきゝ給てかなはしとや／おもはれけん十六と申し文治五年三月十五日うつくしかり／しかみかたのまはりにきりおとしてかきの衣につけをい／なとよういしてひしりにいとまこひてしゆきやうにいて給ふ／さいとうきやうたいも御ともに参りけるまつ高野山にま／いりてたきくち入道にあひてちゝのさいこの御事共とひ給ふわ」（56オ）か事共かたりたまひてなかれけりくまのへまいりたきよしの給／へはひしり御とも仕るへしとて参られける三の御山さむ／けいとけてはまの宮のなきさにたち給ひあともなく／しるしもなきまん〳〵たる海上にむかひて父はいつくにしつみ／給ひけるやらんとてなき給ふそあはれなるさてあるへきなら／ねはたかをへ下かうし給て三位のりつしとてをこなひす／ましておはしける／

大将しやうらくの事

去程にけんきう元年十二月四日かまくらのけん二位との／上らく有ておなしき七日大納言になりたまふおなしき九日」（56ウ）右大将にしよし給ふやかてよろこひ申あり程なく大納言／大将りやうくわん御上へか（ママ）ありて同しき十六に関東へ下／やく（ママ）又けんきう六年三月十六日東大寺くやうありしに二月に／上らく有てくやうとけられしかは同き六月に関東へこそ／下られけれちんせいはゆ（い）きつしまをかきりあふしうあく／ろつかる迄皆したかひ奉るなんはんほくてきそむき奉る／もの一人もなしちう有ものをはしやうしあたる（ママ）ものをはねは／はをそきりからされけるきたいふしきのしやうくんなり／

ほうしやうしかつせんの事

へいけの一門はほろひうしなはれて今はなしと云所に新中」（57

オ）納言とももりのはつしいかの大いふ知忠とておはしき此と／もたゝは三さいのとし平家都を落しときすてをかれて／有けるをめのときの二郎兵衛ためのりかくし奉りてさい〳〵所〻／にかくれありきていかの国の有山寺にかくし奉りて有ける／かやう〳〵ちやう大し給ふ程にようかんたいはいありかたかり／けりかの国の地とうもこの人はたゝ人にてはあらすなと申／けれはこの事あしかりなんとて又都へ帰りのほるほうし／やう寺の一の橋へんなるところに忍ひてそおはしける平家／の名残とておはししかはたむの浦のかつせんの時落たりける／侍共聞出して山林よりあつまりつとひてこの人をしうとあふ」（57ウ）きていかにもしてむほんをゝこしてくわいけいのはちをきよ／めんとてたむすき（ママ）其比都のしゆこは鎌倉の源二位のいもうと／むこ一条の二位入道のうほうなりこのさふらひにことうさゑもん／もときよと云ものありいかゝしてきゝ出したりけるにやけん／きう七年十月七日とりのこくにそのせい三百よきにてほう／しやう寺の一のはしへをしよせたりかの所は四方大たけしけり堀／を二へにほりひるははしをわたし夜ははしをひくよせてと／きをとゝつくるしやうの中には折ふしふせいなりゑつ中の／二郎兵衛かつさの五郎兵衛悪七兵衛これらをはしめとし／て二十よ人にはすきさりけりきこゆるつよ弓せいひやう」（58オ）ともにてありけれはひきつめ〳〵さん〳〵にいる事馬人／おほくいころさる去程にさいきやうのふしともこれをきゝ／てはせむかふその辺なるせうけともをこほちよせ堀をは／へいちにうめてけりかけいり〳〵をめきさけんてたゝかひ／けりしやう中にもやたねつきしかはうち物になりてはしり／いてゝきりけるにおもてをむかふへしともみえさりけり／されともよせてはいよ〳〵うんかのことくかさなりけれはき／の二郎ひやう衛いたておふてやうくむいかのたいふともたゝ／の生年十六になり給ふ御まへに参りいまはかなひ候ましと／申けれはさらはとてしかいしんしやうにしてふし給ひたる」（58ウ）をひさのうへにかきのせやかてはらかきゝてしにゝけり／その子きの二郎太郎おなしき二郎おなしき三郎と三／人ありけるもみなうちしにしてけりかつさの五郎兵衛／もうちしにす廿七人こもりゐたりけるかしかいする者／五人うたるゝもの十六人越中の次郎ひやうゑ悪七兵衛は／おちにけりくひ廿五取てしやうに火かけてよせては／二位の入道のもとへ参りけり一条のおほちにくるまをた／て見物し給ひけり小松とのゝ子たんこのしゝうたゝふ／さもやしまのいくさにはなれゆあさの七らう兵衛の／せうむねみつかもとにおはしけるを二位入道きゝ給てう」（59オ）つてをむけらるむねみつうてむかふと聞てしやうくはくか／まへて三百よきにてまちかけたりたゝふさわれゆへにおほ／くうしなはん事あるへからすしかいせんとのたまひけれは弓／矢取ものゝなこそおしく候へちうたいのしうをむなしうなし／奉らん事こうたいのちしよくなるへしと申けれとも一もん／うんつきはてぬるうへはわか身一人ゆへに人をそむすへきに／あらすとて六はらへいて給てきられ給ひにけり小松殿の／すゑの子とさのかみむねさねと申けるは三さいにておほい／の御門の左大臣つね

むね一すちにわか子にしてそたてられ／けれは平家都をおし*ちときもと、めておはしけりさすかよも」（59ウ）おそろしかりけれは十八さいにて出家して東大寺のしゆせう／はうをたのみておはす上人このよしをくわんとうへ申され／たりけれはいかさまにもみてこそはからひ候はめと仰せられ／けれはちからをよはすくし奉るさるほとにきやうをたゝれ／し日よりしよく事をとゝめたまひて十三日と申にあしから／山にてしなれけり越中の二郎兵衛はたしまのくにの住人／けいのこんのかみのてにかけてつゐにうたれにけり悪七兵衛／はそのとしのふゆかまくらにていけとりにせられてうつの*ミや／にあつけられけり／

もんかくるさいの事」（60オ）

そのころのしゆしやうと申は後鳥羽院にてそまし〳〵け／るたかくらのゐん第四の御子なり御あそひにのみ御心を入させ／給ひてせいむをおほしめされす天下は一かうきやうの二ほん／のまゝなり人のしうたんもやすめましまさすかゝりけれは／もんかく二宮は御かくもん御心に入させ給て正りをさき／とせさせ給ふいかにもして二宮を位につけ参らせんと／はからひけれ共かまくらとのおほはせし程はかなはすしやう／ち元年正月十八日右大将かくれ給てのち内〳〵むほんの／事をたくみけるにあらはれてくわん人におほせて二てう／ゐのくま岩神のはうへをしよせとられて八十あまりておひ」（60ウ）のなみにおきのくにへなかされけりもんかくなかされける時お／そろしき事ともをの給ひけれはもんかくきちやうく（ママ）／はんしやにをきてはもしなかされはわかなかされたる国へ／むかへまいらせんするものをとてのゝしりけるつゐにお／きの国にておもひしにゝせられけりそのをんりやうにてや／ありけん御むほんをこさせたまひて承久三年七月十三日／になかされ給ひけりくにこそおほけれおきのくにへなか／され給ひけるはもんかくをんねんとそおほえける／

六代御前ちうせらるゝ事

さて六代御せんの事右大将も御かくれありぬまたもんかく」（61オ）もなかされ給て後かまくらにそのさた有て平家の正とう／なりもんかくはうもなしうちすてかたしとてくわん人すけ／たかにおほせてからめとりてするかのくにの住人をかへの三郎／大夫かてにかけてかまくらのむつらさかにて廿九の年／つゐにきられ給ひぬ十二のとしより廿九までのひける／は長谷寺のくわんをんの御はからひとそおほえたるそれ／よりして平家のしそむはたえにける／

（以下、四行分余白）」（61ウ）

【附記】

翻刻を許可してくださった立教大学図書館に深く御礼申し上げます。

なお、本誌次号に本書の解題を掲載予定である。

（ぱくちえ　本学日本学研究所研究員）

（すずきあきら　本学教授）